

40
246

東海東山
畿内山陽
漫遊案内

序

時方夏。暑既至。滿都將化為焦土。於是乎暑

不可不避焉。避暑之計在先擇其地矣。擇而

不精。則又與坐於焦土不異。乃避暑案內之

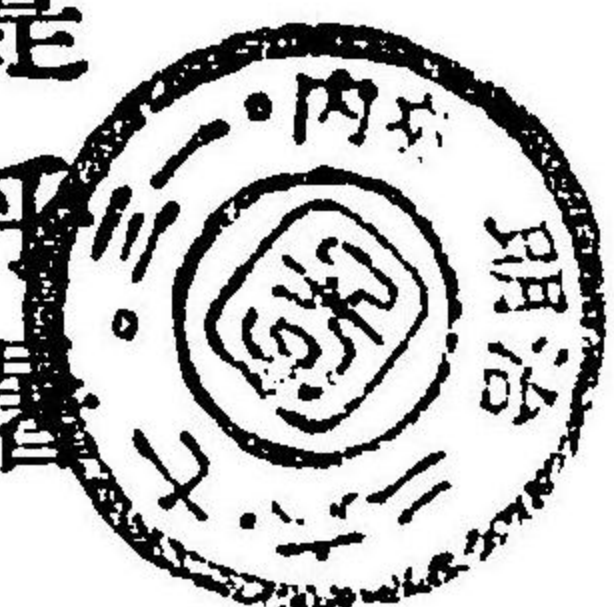
撰曷可苟乎。抑鐵路關而險夷變。昨之崑龍

汪洋不可足到者。今則得侶其麋鹿與魚蝦

以清息矣。及避暑案內之書。亦曷可無革新

如此著者哉。友人野崎左文翁。頃者著避暑

案內而成。其所載皆翁會遊之地。所謂擇而



精者。余喜其能變焦土爲清涼之境。關秀靈
爲逍遙之區。於是乎序。

壬辰六月

經峯居士識

序 文

凡 例

一 此書は余が曾て實踐せし東京近傍の温泉、海水浴場其他避暑遊覽の價ある各地の景況を叙し以て旅客の便覽に供せんとするものなり、世間ありふれの案内記には往々虚飾の文字を用ひて其實を失ふとあれども此書は専ら其の實況實情を寫すを旨とし毫も賣藥効能書的の文字を弄せず是れ此書の特色なり讀者は其文の拙きを責すして記事の眞率なるを採れば可なり

一 此書を編むに當り其の考證として引用せし書籍尠からざれども一々其の書目を掲げず是れ其の煩はしきを厭へばなり

一 此書の大體を分ちて東海、中山、東山、山陽の四部に區分せしは唯東京よりの方位に據りしものにして地理上の正しき國分に據りしものには非ず故に東海の部に見ゆる地は之を他の部に覓むる等専ら左に記載せる目錄に就て其地名を搜索すべし

凡 例

一 此書は昨年「東海東山漫遊案内」と題して發兌せしものなり今之に山陽五畿の一部を増加し且前版の誤りを訂して再版に附す之を前版に比すれば紙數殆ど百頁を増し避暑の地六十餘ヶ所を増せり去れど匆卒の際編纂せしものなれば其中或ひは二三の誤りなことも保し難し看客若し誤謬を發見せば幸ひに示教を垂れよ

二 此書を編むに當り日本鐵道會社は特に材料蒐集の便利を與へられ友人北崖子校訂の勞を取れり茲に其の厚意を謝す

明治二十六年六月

編者識

本編目次

緒言	頁數	一
東海道の部		
金澤八景	一〇	
鎌倉	一四	
江之島	二二	
逗子海水浴	二五	
横須賀海水浴	二六	
大津海水浴	二七	
鷗ヶ沼海水浴	二八	
大山(雨降神社)	二九	
大磯海水浴	三一	
國府津海水浴	頁數	三三
酒匂海水浴	三五	
小田原海水浴	三五	
箱根温泉	三七	
熱海温泉	六三	
修善寺温泉	七六	
富士山	八一	
佐野瀑園	八九	
牛臥山麓海水浴	九〇	
戸田海水浴	九三	
清見瀉海水浴	九四	

久能山……………九五
 焼津海水浴……………九六
 志太鑛泉……………九七
 五和村潮鑛泉……………九八
 秋葉山(秋葉神社)……………九九
 蒲郡海水浴……………一〇一
 鳳來寺山(鳳來寺)……………一〇二
 大野海水浴……………一〇三
 師崎海水浴……………一〇五
 佐久島海水浴……………一〇六
 豊濱海水浴……………一〇八
 湯ノ山温泉……………一〇八
 辛洲海水浴……………一一〇

朝熊山(朝熊神社)……………一二二
 二見ヶ浦海水浴……………一二三
 日和山……………一二五
 長良川鵜飼……………一二八
 養老の瀧……………一三〇
 竹生島……………一二二
 比叡山……………一二四
 石山寺……………一二五
 箕面山(箕面瀑布)……………一二七
 寶塚温泉……………一二八
 有馬温泉……………一二九
 布引瀑布(布引温泉)……………一三六
 諏訪山温泉……………一三八

百草園……………一四〇
 多摩川鮎漁……………一四一
 高雄山……………一四四
 御嶽山(武州)……………一四七
 御嶽山(甲州)……………一四八
 差出の磯……………一五二
 身延山(久遠寺)……………一五三
 稻毛海水浴……………一五六
 成田山(新勝寺)……………一五八
 北條海水浴……………一六一
 鹿野山……………一六三
 中仙道の部
 大宮公園……………一六三

荒川鮎漁……………一六七
 鬼石奇景……………一六八
 伊香保温泉……………一六九
 澤渡温泉……………一八二
 四萬温泉……………一八三
 川原湯温泉……………一八三
 草津温泉……………一八七
 藪塚温泉……………一九三
 長岡温泉……………一九三
 高津戸急流……………一九四
 赤城山(赤城神社)……………一九六
 榛名山(榛名神社)……………一九七
 磯部鑛泉……………二〇二

妙義山(妙義神社)……………二〇九
 霧積温泉……………二二二
 輕井澤(附リ碓氷嶺)……………二二五
 淺間山……………二二八
 淺間温泉……………二二〇
 姨捨山……………二三四
 善光寺……………二二五
 戸隠山(戸隠神社)……………二二八
 湯田中温泉……………二三〇
 澁温泉……………二三二
 赤倉温泉……………二三四
 日光……………二三九

東山道ノ部

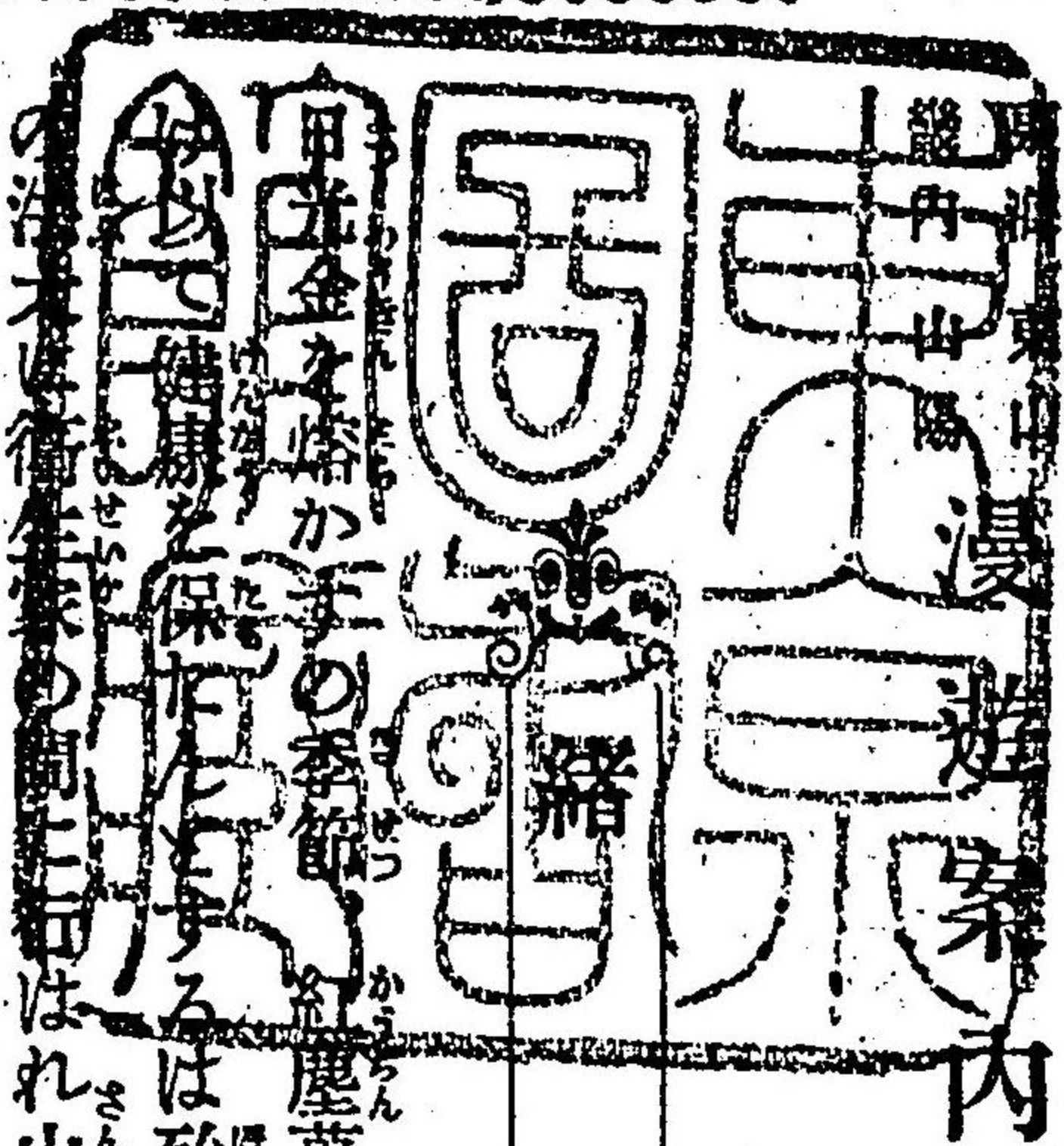
川治温泉……………二五五
 藤原温泉……………二五七
 小代温泉……………二五八
 鹽原温泉……………二五八
 那須温泉……………二六五
 筑波山(筑波山神社)……………二七〇
 常盤公園……………二七二
 大洗海水浴……………二七四
 太平山……………二七五
 岩船山……………二七七
 唐澤山(唐澤山神社)……………二七八
 甲子温泉……………二八〇
 湯本温泉……………二八二

飯阪温泉……………二八三
 湯野村温泉……………二八八
 高湯温泉……………二八九
 土湯温泉……………二九〇
 鎌先温泉……………二九一
 青根温泉……………二九三
 峨々温泉……………二九六
 遠刈田温泉……………二九七
 小原温泉……………二九八
 仙台市……………二九九

山陽道の部

鹽竈ノ浦……………三〇四
 松島(瑞巖寺)……………三〇六
 須磨ノ浦……………三一五
 舞子ノ濱……………三一七
 明石海水浴……………三一八
 書寫山(圓教寺)……………三一九
 鷲ノ湯温泉……………三二一
 後樂園……………三二四

東山、山陽内漫遊案内目次畢



言

野崎左文著

避暑萬丈の裡を逃れて苦熱を幽邃閑雅の地に避
 け、以て健康を保たんとするは殆ど都人士の常なり故ある哉近來空氣療養
 の法は衛生家の間に行はれ山陵海濱處として避暑の地ならざるは無き
 に至れり、夫れ温泉并に海水浴療法が人體を健全にするの効あるとは今
 更喋々するを要せずと雖も空氣療養法の事に至りては避暑案内者の職分
 として茲に一言せざる可からず醫學士廣瀬佐太郎氏の説に曰く抑も氣候
 とは何ぞや氣候とは空氣中に發顯する千種萬態の現象が此の地球の表面
 及び其上に生活する動植物に及ぼす所の働きを汎稱する者なり而して此

の現象を發する所の演劇者は即ち所謂氣候學の元素なる者にして熱、光、電氣、濕、氣壓の五者なり地球の太陽に於ける位置、地面の經緯度、其の高
 低の差、海陸山谷、動植物の模様に従つて此の五元素は萬般の變化を現は
 し地球の表面及び其上に棲息する生活體上に一定の感應影響を致す是
 れ即ち氣候にして吾人の知覺する所の空氣の寒熱、風雨、陰晴の如きは二
 一マイエル氏は之を名けて氣候の徵候なりと云ふ亦宜なる哉、他の語を
 以て之を言へば吾が地球の表面は即ち熱、光、電氣、濕、氣壓の活劇場な
 り而して吾人は此の活劇場の裡に生活する者なり然らば則ち吾人の健
 康なるも否とは此の演劇の模様は大關係あるや火を視るよりも明かなり
 故に其害あるは之を避け利あるは之に就き以て健康を保ち以て疾病を除
 き氣候を以て醫療の版圖に屬せしめ寒暄、燥濕、雨雪、雷電悉く收めて
 以て藥品の一種となす是則ち氣候療法の目的なりとす、凡る氣候に四種
 あり高嶽氣候、(亞爾普私氣候)、山陵氣候、(亞爾普私下氣候)沿海氣候、

及び低地氣候即ち是なり

「高嶽氣候」とは海面より高きと三千乃至三千五百尺以上の高山氣候を云
 ふ空氣稀薄透明にして壓力少く温度極めて低し然れども太陽の照輝熾
 んなるが故に晝夜寒暖の差甚だしく風力并に風向暫時に轉變して而して
 濕氣の量は僅少なりと雖も空氣の稀薄なるが故に輻射飽和し易く又乾燥
 し易く陰晴瞬時に轉換す而して此の氣候は肺臟及び皮膚より水分を排泄
 するとを盛んならしめ新陳代謝を亢進し隨つて身體に衝動強壯の効を
 致す然れども虚弱家、衰憊患者にして神經過敏なる者及び老者幼兒等は
 之に堪ふる能はざるものとす

「沿海氣候」とは大洋若くは海灣に瀕接する土地の氣候にして高嶽氣候の
 反對なり空氣稠濃にして濕氣多く寒暖の差甚だしからず強壯保攝鎮靜安
 慰の効あり

「山陵氣候」とは海面上千尺乃至三千尺の地にある氣候を云ふなり此の氣

候を有する場所は多くは山間の溪澗若くは陵坡にあり周圍は高峯環繞して劇風を防ぎ草木繁茂して鬱鬱たる森林を爲し所謂「森林氣候」を併有する者なり森林は樹木の新陳代謝に由て炭酸を吸ひ酸素を吐き阿斐を形成し水蒸氣を集積し樹葉は日光を掩蔽して清爽なる樹陰を作り土地は水分に富みて苔蒸し草茂り空氣は清冷にして皮膚及び呼吸器粘膜に緩和爽快の感覺を致す是れ即ち夏日散步の際圖らず森林に入るや各自の身體に忽ち感觸するを以ても知るべきなり凡そ山陵氣候は多少高嶽氣候の性質を帯び空氣は稀薄なりと雖も樹木の爲めに雨露多く且高峯峻嶽より溪泉流下するに由りて土地は水分に富み従つて其の蒸發盛んなるが故に空氣の水分は高嶽よりも遙かに許多なり太陽の照輝は一は雨露、一は樹木、一は土地の滋潤なるに由りて其の熾熱の力を及ぼすと高嶽に於けるが如く劇烈ならず従つて温度低くして且晝夜寒暖の差甚だしからず之を要するに山陵氣候は爽涼清淨にして高嶽の如く酷烈ならず沿海の如く緩和な

らず神經系統呼吸器及び皮膚を輕易に刺戟して其の機能を催進し酸化燃焼及び物質交換を亢盛し以て身體を強壯にするものなり故に總て神經系統を鼓舞し精神を快暢し全身の新陳代謝を作興するを要するものにして高嶽氣候劇烈の衝動に堪へざる人に偉効あり呼吸器の疾患已に著るしと發現せる患者にして高嶽氣候に堪へざる者と雖も此の氣候には能く堪へ得るものとす故に山陵氣候は夏日避暑に最も適當なるものにして時期は六月上旬より十月下旬迄を佳しとす

「低地氣候」一に中和氣候とは海面上千尺以下の地に在る氣候にして海濱若くは島嶼に非ず内地に在る溪谷平原若くは山麓にして海面上千尺に達せざるもの皆此の氣候に屬す而して此の氣候を中和と名くるは彼の氣候の原素たる光、熱、濕、電氣、氣壓等能く其の中和を得て偏頗なきの謂なりと雖も凡そ此に屬するの地は其數實に無限にして其の地形も亦甚だ同じからず其の地勢の丘岡なるや澗谷なるや若くは平原なるやに從ひ又近傍

水流の模様及び山の向背等に從つて氣候甚だ異なり而して低地の溪間に在る處は四方の連山能く暴烈なる風を禦ぎ寒熱風濕の變動急劇ならず温度は山陵氣候より遙かに高く晝夜寒暖の差も亦大に僅少なり之を「溪間氣候」といふ斯の如き氣候は總て人體經濟の需用を減少し諸器の官能を休憩するが故に山陵氣候に堪へざる神經過敏の人若くは薄弱衰憊の者最も此の氣候に適し又山陵氣候を喫するの前暫く茲に滯留して所謂豫備療法を爲すに最も適當なりとす

以上は廣瀨醫學士が氣候療法に就て論述せし所の大意なり以て轉地療養が病なき人に向つても猶ほ身體精神を安慰するの効あるとを知るべし故に都人士が温泉海水浴の有無を問はず毎歲夏季に至れば先を争ふて暑を山明水媚の地に避くるは又た此理に外ならず然れども避暑湯治の催しは重に紳士豪商若くは貴婦人の間にのみ行はれ温泉宿海水浴舎は勢ひ豪遊を競ふの場所と化せし傾きあるを以て終には避暑の舉を目して驕奢の遊

びなりと誣る者あるに至れり去れば炎熱に苦しむ中等以下の人々は縦令避暑の望みあるも其の費用の非常に多からんとを恐れ終に其志ざしを果さずして止む者も多しとか是れ併しながら其の土地の實況を知らざるが爲めに唯だ世間の評判にのみ惑はされ徒らに逡巡する者にして箱根熱海の名區と雖も節儉以て病を養ふの法無きにあらず若し其の土地に馴れ其の實況に通じたらんには勉めて冗費を省き奢らず愒ならず所謂身分相應の保養を爲し得ると亦自由なるべし故に唯だ世間の評判にのみ聞怖して避暑を以て贅澤の遊びなりとし僅かの費用を惜みて炎熱を避くるの方法を求めざるが如きは衛生家の取らざる所なりとす余は醫師にも非ず又衛生家にも非ずと雖も曾て近縣避暑の地を實踐し親しく其の情況を探り得たるが故に嗚呼がましくも自ら避暑通を以て任じ茲に其の實況實情を寫して廣く初遊の人々の爲めに其道するべを爲し併せて諸子の益々健全無病ならんとを祈るものなり、時恰も盛夏の候に際す避暑の企てある諸子

は先づ此の一冊子を懐にし豫め宿引に強誘され惡車夫に惑はさるゝの難
を避け以て轉ばぬ先の杖とも爲し玉へかし

編者は一方に向つては避暑の遊びを勧むると共に亦一方に向つては大
に旅舎の戒必を請ひたきものあり开を如何にといふに近來商賣競争の結
果として各温泉海水浴舎の中には唯だ一時の利にのみ迷ひて往々客を欺
くの惡計を運らす者あり例へば豫て車夫と内約を結ぶ客一人を誘ひ來れ
ば若干の禮金を與ふるが如き者あり其の禮金は果して旅舎の自辨なるか
と云ふに皆其客の會計中に附掛を爲すものなれば結局客の懐中より出す
に異ならず此の如くにして其家永く繁昌すべき乎、一家の不評は即ち其
土地の衰微を來すの基なれば旅舎を營む者は唯だ誠實の二字を以て宜し
く客に接すべきなり

東海道の部

東京近傍避暑の地多し然れども其の旅行は汽車汽船の安全迅速なるに如
かざるを以て茲には先づ汽車の便ある東海道の方に案内すべし去れば茲
に東海道の部と記せしは悉く東海道十五國を包含するものには非ずして
所謂東海鐵道線路の通ずる所即ち武藏、相模、駿河、遠江、三河、尾張、伊勢
近江、山城、攝津の十ヶ國又鐵道線路は國中を横ぎらざれども其近傍なる
を以て之に伊豆甲斐の二ヶ國を加へ又東山道の美濃一國は東海鐵道線路
の通ずる所なるが故に特に此部に加へ都合十三ヶ國中の避暑地を選び東
京より遠近の順序を以て記載するものと知るべし諸東海鐵道は東京新橋
を起點として兵庫縣神戸市に終る其長と三百七十六哩三十一鎖毎日數回
の發車あり(汽車發着時間表は別に卷末に掲げあり就て覽るべし)旅客は
今新橋より汽車に乗り西に向ひて旅行するものとせんに第一着に池上温

○泉あり大森停車場ステーションを距る西の方僅かに廿五町、旅舎りやうしやを光明館と云ひ本門寺きんりやう丘陵の崖を開きて客室數棟を設け母屋より長廊を架して一呼相往來す其鑛泉は多量の鹽分を含み晝夜沸して入浴に便す去れど此地は東京に接せつ近し看客の既に熟知する所なれば其の勝景等は茲こゝに贅ぜいせず夫より神奈川停車場に到れば右に神奈川臺を望む此地温泉海水浴の設けなしと雖も夏日來りて涼を納る者多し、汽車已に横濱に着すれば去て本牧の海水浴場に遊ぶも可なれど茲より往て一覽すべきは

●金澤八景

なりとす、金澤は横濱を距る西南四里餘武藏國久良岐郡の南端にあり此地は東南に海を擁して夏島、烏帽子島は灣の入口に點在し後には連峯を遶して山水の眺め兩つながら備はり其の風色杭の西湖に似たりとて大明の心越禪師曾て入勝を撰びて詩賦を殘し吉田の兼好法師も亦此地に住みて景色よきを賞したるの地なれば遠く望めば宛然箱庭の如く絶景云はん

方なし所謂八景とは洲先の清嵐。瀬戸の秋月。小泉の夜雨。乙艦の歸帆。稱名寺の晚鐘。平瀉の落鴈。内川の暮雪。野島の夕照。等にして心越禪師の詩賦は左の如し

○洲崎晴嵐

滔々驟浪歛餘暉。滾々狂波遶竹扉。市後日斜人靜悄。行雲流水自依々。

○瀬戸秋月

清瀨涓々不繫舟。風傳虛籟正中秋。廣寒桂子香飄處。共看氷輪島際浮。

○小泉夜雨

暮雨淒涼夢亦驚。甘泉洞々聽分明。蓬窓淹塞無相識。腸斷君山鐵笛聲。

○乙艦歸帆

朝宗萬派遠連天。無恙輕帆掛日邊。欸乃高歌落雲外。依稀數艇到洲前。

○稱名晚鐘

夙昔名藍成覺地。華鐘晚扣若鯨音。幽明聞者咸生悟。一片迷離祇樹木。

○平瀉落鴈

列陣冲冥堪入塞。菽盧蕭瑟幾成隊。飛鳴宿食恁棲遲。千里傳書誰不愛。

○内川暮雪

廣陌長堤竟沒潛。奇花六出以鋪練。渾然玉砌山河色。遍覆危峰露些尖。

○野島夕照

獨羨漁翁是作家。持竿盪漿日西斜。網得魚來沾酒飲。披蓑高臥任堪誇。

武州金澤擲筆山能見堂。有瀟相八景之風味。因觀鎌倉志甚詳。一夕寥

々對青燈。漫賦八景之陋句。以識斯勝境云。歲執徐夏日。東皐越杜

此八景の眺めを一眸の中に收むるの地は能見堂を以て第一とす能見堂は稱名寺より西北に當れる山上にありて禪宗の草庵なり其の本尊は惠心僧都の作にして丈一寸八分なりしを後世二尺五寸ばかりの地藏菩薩を作り靈像を其胎中に籠めたりと云ふ又昔し巨勢の金岡茲に來りて景色を寫さんとせしも畫圖の及ばざるを知り筆を投じて止みし事ありとて此山を今

猶ほ擲筆山とも云ふと云ふ此地より望めば名にし負ふ八景は眸中に集まり來りて寸人豆馬は云ふも更なり沖ゆく舟は宛然木の葉を泛べたるが如く夏島は龜の背を干すにやと誤たれ其の絶景筆の及ぶ所にあらず、山を下ると數町にして稱名寺に到る此寺は八景の一にして昔しは龜山帝の勅願所、金澤顯時の建つる所と云ふ境内阿彌陀院の後の山に顯時及び其子貞顯の墓あり、茲より町屋村を過ぎて洲先に至り行くと數十歩にして瀬戸の斷橋を渡れば左に料理店東屋、千代本の二軒あり東屋は樓號を四時總宜樓と呼び江戸名所圖繪にも其圖見わたる舊家にして庭は入江に臨み小舟を其岸に泛べて客の乗るに任するなど頗る眺めよき地なり千代本も亦敢て東屋に劣らず兩家とも魚肉の鮮けきに誇り客ある毎に生洲の魚を捕り活ながら料理するを常とす、瀬戸明神社は東屋より西の方凡る一町餘瀬戸辨才天は同じく社前の道を隔て、南の入海に斗出せる小島にあり、又同所より西南凡る六七町の處に昇天山金龍院といふ寺あり世俗飛石山

とも呼ぶ禪宗にして鎌倉建長寺に屬せり境内に九覽亭なるものありて此處の眺望も亦敢て能見堂に譲らず其の八景の外に能見堂をも併せ覽るの意にて九覽亭とは名けたるものとす儲横濱より此地に到るには根岸、杉田、富岡等を経て洲崎に出る順序なれとも旅客の都合に依りては汽車にて鎌倉に到り同所より朝比奈の切通しを経て此地に出る方便ならん鎌倉より金澤までの里程二里十町其の途中切通しの嶺凡る二十町の間を徒歩すれば其他は車を驅ると自由なり、鎌倉より此地に至る人力車賃一乗廿五錢、横濱は車賃の高き處なれば同所より金澤に到らんとするには賃金六七十錢を費やさざるを得ず又野島より横須賀まで水夫二人乗の舟賃は四十錢なり

● 鎌倉

鎌倉とは廣域東西二里南北一里餘、雪ノ下、大町、小町、扇ヶ谷等十三ヶ村に亘れる一郷の總稱にして其東は巒峯秀で、武藏相模の兩國を界し南

は相模の海に臨みて遙かに伊豆の大島と相對す鎌倉は中古源氏の覇を起し次で北條氏の占據せし古への大都會にして名祠靈刹固より多し故に遊客は消暑の餘名所を探り古跡を尋ね以て考古の材料となすも亦面白かるべし今其の重なる勝地を擧れば

鶴ヶ岡八幡宮 は國幣中社にして應神天皇、神功皇后、大仲媛の神を祭る東京より此地に遊ばんとするには新橋より汽車に乗り大船にて更に横須賀行の列車に乗換れば第一着の停車場は即ち鎌倉にして同停車場は八幡宮二三鳥居の間に在るを以て徒歩三四町にして八幡宮本社に到るを得べし(新橋より鎌倉まで汽車賃下等三十三錢)相傳ふ八幡宮は康平六年伊豫守頼義の建立する所にして永保元年陸奥守義家之を修葺す其後治承四年源の頼朝小林郷に之を再建し建久二年更に今の地に遷宮して大に寶殿を造營せしと云ふ停車場より二の鳥居、一の鳥居を潛り赤橋を渡りて境内に入れば正面に神樂殿、右には仁徳天皇を祀れる若宮、頼朝公を祭れる

白旗の宮あり昔義經の妾靜が頼朝の命に依り相夫戀の唱歌を謠ひて一曲の舞を奏せしは此の若宮の社殿なりと云又石階の西側に椰の木あり承久元年當宮の別當公曉が實朝を斬殺したるは即ち此處なりと云傳ふ、石階を登れば直ちに本社の拜殿に達す本社は應神天皇を齊まつり本殿は豎九間、横三間にして拜殿は四間に二間なり

鎌倉宮 は官幣中社にして大塔宮護良親王を齊祀し八幡宮より東北凡そ六町二階堂ヶ谷の山麓に在りて親王の籠らせ給ひし土籠は即ち本社の後に在り社は明治二年創設せられしものにて境内櫻樹紅葉多し一たび此社に詣して彼の土籠を見れば誰か暗涙を催さざる者あらんや

頼朝屋敷跡 は八幡宮の東金澤通の傍らに在り治承四年頼朝公大庭景義をして邸を大藏の郷に新築せしめ同年十二月上總介廣常が宅より新築の邸に移り玉ふとあるは此地の事なり今は一の法華堂を殘すのみにて其地は茫々たる田圃と化し去りて榮枯盛衰の理り目のあたりにあり一見自か

ら懐古の情に堪へず

荏柄天神社 は頼朝屋敷の東北に在りて鶴ヶ岡八幡宮の一ノ鳥居を距ると凡そ七町、本社に菅丞相束帶の像を安置す本社の創建并に木像の作者共に詳らかならず、一説に和田胤長の邸地は即ち此社境内の西南隅今の茂林中にありしならんと云ふ者あり猶ほ考ふべし

壽福寺 は山號を龜谷山と云ひ八幡宮の東龜ヶ谷に在りて鎌倉五山の第三なり開山塔、畫、窟、政子塔、實朝塔、望夫石等は皆此の寺内にあり

英勝寺 は福壽寺の北隣にありて東光山と號す太田氏英勝院禪尼自から菩提の爲めに念佛道場を創立し水戸中納言頼房卿の息女をして薙髮せしめ以て此寺の開山住持と爲せしと云ふ、此地は太田道灌が舊宅なり

淨妙寺 は稻荷山と號し五山の第五なり開山塔を光明院と云ひ開山の像源の直義の像あり又光明院殿本覺大姊と書したる位牌あり足利義氏を法樂寺殿正義と號し其女を光明院と號す光明院は權大納言隆親の室にして

隆顯の母なり

建長寺 是巨福山と號し鎌倉五山の第一にして建長元年相模守北條時頼の創建に係り宋僧道隆(大覺禪師)を以て開祖とす總門の額は寧一山の書する所にして其の巨の字に一畫を加へて書きたるを以て世人之を百貫點といふ山門は其の構造を宋の寺門に摸擬せしものにして結構の宏大なるは鎌倉數十の靈刹中敢て其比を見ず又佛殿には丈六の地藏菩薩を中尊とし其他同像千體を安置す

長壽寺 是寶龜山と號す源の基氏其父尊氏の爲めに建立する所と云ふ尊氏を長壽寺殿妙義仁山大居士と號し延文三年四月薨す尊氏の塔今猶ほ客殿の後なる山際にあり昔しは此あたりに尊氏の屋敷有しとも云へり
禪興寺 是福源山と號す淨智寺の筋向ひに在りて本殿には釋迦を祭り別に蜀の大帝、韋馱天、北條時宗、同時貞、上杉重房の像各一軀あり又祖師堂には大覺禪師、北條時頼の像を安置す其の東隣にある寺を明月院と云

亦亦觀るべきの靈刹なり

圓覺寺 是瑞鹿山と號す鎌倉五山の第二にして建長寺の西北二三町字山ノ内にあり弘安五年相模守北條時宗の創建にして宋僧祖元(佛光禪師)を開祖とす總門は建長寺の如く宋の寺門に摸擬したるものにして其額は後光嚴帝の宸筆なり佛殿の額亦後光嚴帝の宸筆にして祖師堂には達磨、百丈、臨濟、開山の像を安置し土地堂には伽藍神及び代々將軍の位牌を藏す其他岩窟觀音、開山塔、佛日庵、坐禪窟、虎頭岩等皆な寺内に在り其の寺域は五千二百坪なりと

妙本寺 是長興山と號す停車場の東南僅かに數町、大町比企ヶ谷に在り文永十一年日蓮の俗弟子比企大學三郎が創建する所にして寺内に比企氏一門の墓あり、本堂には陳和卿が作りし釋迦の立像を安し御影堂には祖師の像を安す又佛舍利一粒水晶塔の中にあり高さ一尺五寸許にして平ノ重時が所持せしものと言傳ふ

光明寺 くわうめいじ は天照山と號す僧良忠そうりやうちゆう(記主禪師)の開山にして仁治元年北條經時ねがし佐介ヶ谷さけがやに創建し後ち寛元元年今の亂橋材木座に移す始めは蓮華寺と號せしが後ち光明寺と改め方丈を蓮華院と名く山門天照山三字の額は後花園帝の宸筆にして二尊堂には辨才天の像及び善導の像を安置す

長谷觀音 はせくわんおん は海光山と號す鶴ヶ岡八幡宮一ノ鳥居より西凡十八町の處に在りて阪東巡禮第四の札所なり本堂には十一面觀音の像を安置せり

大佛 だいぶつ は長谷觀音の北、御輿嶽の麓にあり、像は唐銅の盧遮那佛にして長さ三丈五尺、膝の廣さ五間半、袖口より指先まで二尺七寸餘、掌中に三人を立たしむると易し奈良の大佛と共に日本の二大銅像となす、傳へて言ふ昔し寛元年間茲に一字の精舎を營み高さ八丈餘の阿彌陀の佛像を安置せしものなりと然れども此像は何時の頃にか滅亡し現存のものは建長四年に鑄造せしものなりと、此外神社佛閣名所舊跡の類枚舉するに遑あらず故に多くは省略せり

海濱院 かいひんゐん は鎌倉海水温浴場の名にして停車場の南凡十町餘、由井ヶ濱の松林中にあり元と横濱の豪商某々等相謀りて新築せしものにして機械を以て海水を館内に引き常に之を温ためて浴を取らしむるの仕掛なり又夏は海水の塵埃なき處を擇びて浴冷せしむ此地南面は海濱に接して江ノ島富嶽と相對し近傍に貴顯紳士の別荘多く眺望快濶にして頗る風色に富めり、館は純然たる外國ホテルの仕組にして飲食臥具の類皆備はり且重に外國人を客とし其宿料は一日二圓五十錢の定めなり普通の旅店は長谷の三橋樓を第一とし之に次では雪ノ下にては角正樓、丸屋、三橋支店等を善しとす借右にて畧ぼ鎌倉の案内を終りたれば是より旅客を

● 江ノ島

に導くべし、江ノ島は鎌倉八幡前停車場より七里ヶ濱を経て西凡二里、鎌倉郡南端の海中に點在す、鎌倉より人力車に乗りて極樂寺切通しを過行けば左に稻村ヶ崎を望む稻村ヶ崎は前に由井ヶ濱、七里ヶ濱の海濱を

擁し西南は江ノ島及び遠く富嶽と相對し後は松山を負て風景佳絶の地、元弘三年新田義貞黄金作りの太刀を海に投じて勝軍を龍神に祈りしは即ち此處なり、茲より腰越までの間を七里ヶ濱と云ふ其長さ關東道の七里(六町一里)なるが故に名く七里ヶ濱を過ぐれば直ちに腰越村に到る往古源の義經平族を平げて鎌倉に入らんとせし時梶原景時の讒に依り兄頼朝の爲めに拒まれ終に入るとを得ざりしかば其臣辨慶に命じて書を作らしめ以て其冤を訴へたるは即ち此地の事にして満福寺は當時の旅館なりしと云ふ、満福寺は龍護山と號し硯ノ池、辨慶腰掛石など云へるもの寺中にあり茲より江ノ島まで十五町なり

江ノ島は金龜山と號す此島は欽明天皇の御宇壬申の年四月十二日より廿三日まで打續きたる大地震の時突然海上に噴起し終に一孤島を爲したるものにて又の名を鷗鷺來島とも云ふ、此地東は七里ヶ濱、由井ヶ濱等の鎌倉海濱に面し西に富嶽、箱根山より大磯、小田原の海を望み南は渺茫たる

太平洋に連なり四顧皆な豆相房總の風景を占めて眺望飽くとを知らざるの地なり片瀬の洲鼻より島の入口まで十四町四十間、島ノ入口より龍穴まで十四町餘退潮の時には砂洲を歩みて島に渡るを常とす、江之島神社は多紀津姫命、市杵島姫命、多紀理姫命三神を祭り本社は島の西南小高き處にあり去れと昔しより本宮と稱するは島の南端龍穴中にあるものにして今の本社は其の御旅所なりと本宮は窟の内院にありて弘法大師の作れる辨天の神像と安す窟辨天即ち是なり窟の口は南に向ひ常に海水を湛へて甚だ危し左傍に設けたける棧を歩みて窟中に入れば行くに随つて四面愈々暗く夏日と雖も冷氣猶ほ肌を襲ふ行くと數歩にして洞窟左右に岐れ一を胎藏界一を金剛界といふ其奥に兩部の大日如來を安す又東の窟に無熱池あり西の窟に日蓮上人の跌座石あり傳へて云ふ日蓮此窟の中に籠り石上に坐して冥威を祈り自ら法華經を寫して窟の院内に藏むと、此外島中に上ノ宮下ノ宮あり上ノ宮は文徳帝の仁壽三年慈覺大師の創造する所

にして辨才天女の像を祭る下の宮は建永元年良真上人の開基にして源ノ實朝之を創建す本尊辨才天女の像は弘法大師の作にして其他慈悲上人(良真)慶仁禪師、源ノ實朝等の像を安置す偕此二社を過ぎて前記の龍穴に下らんとする島の南端に見ヶ淵といふ處あり昔し相承院の白菊と呼べる兒自休藏主といふ庵主に戀慕せられ其心の切なるに絆されけん終に身を此淵に投じて死しぬ自休後に之を聞き續いて投身して死しければ其處を兒ヶ淵とは呼ぶと今夏日に至れば此邊に蟹の子等打つとひ旅客に銅貨を投させ先を争ひつゝ水中に潜り入り之を拾ひて我が所得とす、江ノ島にて名ある宿屋料理屋は恵比壽屋、岩本樓、讃岐屋、金龜樓、江戸屋、堺屋、北村屋、立花屋等とす就中恵比壽屋茂八は其構へ手廣にして崖には別荘を設け眺望も亦佳なり同家の宿料は一等一日八十錢、二等七十錢、三等六十錢、四等五十錢、五等四十錢にして料理は客の好みに應じて鹽梅し金龜樓其他一二軒にては西洋料理をも調進す魚類の鮮けきは殊に此地の

誇る所なり又前には鎌倉よりの道順を記せしが若し東京より直ちに江ノ島に來らんとするには藤澤停車場(新橋よりの漁車賃下等二十二錢)にて下車し島ノ入口まで一里餘の處人力車を驅れば僅かに四十分間に達す途中片瀬と腰越との間に龍口寺あり文永八年九月十二日日蓮上人難に遭ふの舊跡にして寺内にある敷草石といふは上人此上に坐したるものとて一名首ノ坐石とも云ふ是を龍口の御難と云ひ毎歲九月十二日には宗徒打寄りて法會を營み法華經題目を誦し是日遠近より來り詣づる者多し又此處より江ノ島まで十二町なり

● 逗子海水浴

鎌倉より漁車に乗りて西行するに先だち看客に案内すべき二三の海水浴場は猶ほ横須賀支線近傍に在り逗子海水浴場も亦其一なり、逗子は横須賀支線に於る鎌倉より第二の停車場にして新橋より下等漁車賃三十五錢停車場より西に向ひ行くと數町にして其の海濱に出れば前面に近く江ノ

島を望み伊豆の陸地は大島と連なりて一大灣形を爲し其の風色をさく江ノ島鎌倉に劣らず海水浴旅店は養神亭、日影ノ茶屋等にして孰れも海岸眺望の宜しき地を擇びて建築し傍ら割烹を業として客を待つ養神亭一日の宿料は二十五錢以上五十錢までにして之を他の海水浴場に比すれば其價ひも亦稍や廉なり此外近傍に貴顯の別業多く又停車場を距る南の方一里餘字長者ヶ崎と云ふ處に長者園なるものあり前に白砂を擁し後に翠松を遶らし風景は逗子と伯仲の間にあれども幽雅の點に至りては優る所あるが如し逗子停車場より人力車賃十二錢夏季に至れば孰れも浴客充満して其の繁昌云ふばかりなし

● 横須賀海水浴

逗子より漁車に乗りて横須賀に到れば同地の海岸に海水浴場三富館あり此の地は逗子とは全たく反對の海岸にあるを以て其の眺望も亦大に異なりて頗る目新しき心地す、三富館は横須賀町若松海岸内の東京灣に突出

せる閑地に在りて後には米溪山松岸寺の勝地を扣へ前には房、總、常の諸山殊に鋸山、鹿野山、筑波山近くは富津第一第二及び猿島夏島の砲臺を望み涼氣脈々人の骨に沁し清風颯々人の袂を拂ふなり亦一個の好避暑地なり、停車場より三富館まで人力車賃八錢、同館宿料は上等六十錢、中等四十五錢にして海水浴は勿論館内別に潮風呂、眞水風呂等の設けあり

● 大津海水浴

横須賀より南一里餘(人力車賃十八錢)三浦郡浦賀町字大津の海濱には海水浴旅館大津館あり其の風致は稍や三富館に優るもの、如し同館の構造は建坪四百餘坪の總二階建にして其の眺望は三富館に加ふるに右に觀音崎の砲臺左に本牧富岡の諸灣雙眸の中にあり同館宿泊料は一週間上等三圓五十錢より特別五圓迄、中等同く二圓五十錢より三圓まで、並同く二圓、又横須賀より海上此地に到る仕立船賃は三十錢より五十錢までにして一艘十名以内の客を容るゝと云ふ(以下再び東海鐵道の順路に戻る)

● 鵠ヶ沼海水浴

鵠ヶ沼は藤澤停車場を距る南二十餘町、江ノ島を距る西北凡そ十二町の處にあり此地は一の灣形を爲し前面には江ノ島を近きと手に取るが如くに望み東は片瀬腰越を隔て、相房の遠山を眺め南は大島及び伊豆の小島等を水天鬚の間認め西南は伊豆の陸地と相對し西には富嶽、後には大山連きの巒峰を透らして其の眺望をさく、江ノ島に劣らざれど此地は近年に開けたる處なれば世間未だ其名を知る人多からず況んや實地に遊びたる者に於ては其數甚だ稀なりしが一昨年大隈伯の此地に滞在せられしより以來都人漸く鵠ヶ沼あるとを知るに至れり、地は一面の砂濱にして處々に松樹生茂り其の水浴場に充つる處は海面十餘町の遠淺にして浪高からず潮水も亦清潔なれば老人婦女と雖も決して危険の恐れなし、料理屋にして宿屋を兼ねるもの二軒曰く鵠沼館、曰く待潮館皆新築に係るものにして物價は他の浴場に較べて稍や低廉なれば轉地療養等には頗る

適當の地なるべし其他蜂須賀侯爵、藤浪侍従、高崎五六、田中平八、諸氏の別荘あり、藤澤停車場より此地への人力車賃は晴天十錢の定めなれども鵠ヶ沼に近づくに隨ひ車輪は深く砂地に入りて車の進むと遅ければ婦女病者を除くの外は徒歩する方増しなるべし

● 大山(雨降神社)

鵠ヶ沼より西北を望めば甲武の連山南に延びて漸く低くなりし處に鬱蒼として那波翁帽形の山天表に聳ゆるを見るべし是れを相摸に名高き大山とす、新橋より平塚停車場まで瀛車賃下等四十錢茲より人力車に乗換へ中原、豊田等を経て上粕屋村に至る此の里程二里、人力車賃二十八錢、同處子易明神前より二十町の間は峻険にして車を通せず(駕籠賃二十錢)此阪を登り詰れば即ち大山町にして人家凡そ三百軒ばかり、道の兩側に商家櫛比し就中舊御師の家、宿屋、茶店及び名物の挽物細工を齎ぐ家多く且道の右傍に良辨の瀧と呼ぶ小瀑布あり其他山上に新瀧、大瀧等の瀑布多

し、町の盡處より阪路二つに分れ右を男阪と云ひ左を女阪と云ふ登ると
 八町にして奥の不動堂に至り茲より猶ほ登ると十八町にして雨降神社の
 本殿に達す祭る所大山祇命にして神體は巖石なり故に石尊大權現とも云
 へり傳へて云ふ日本武尊東夷征伐の時此の岩上に腰を掛けて憩ひ給ひし
 なりと云ふ又親鸞上人七ヶ年間相州を經歷の時茲に登山して石面に歸命
 盡十方無碍光如來の十字を鐫刻し後ち本願寺第八代蓮如上人之を拜して
 其主旨を書せりと、毎歲舊曆六月廿七日より七月十七日までの間本社に
 於て祭事を執行し此の日限中は東京其他近郷より白衣を纏ひて參詣する
 者頗る多く之を大山参りとは云ふなり、大山町の旅館は翠浪閣を以て最
 どし一日の宿料は廿五錢を以て定めとす其他伊豆屋、駒屋、玉本等の旅店
 ありて夏日此地に來りて暑を避くる者多し去れど大山町は大山、櫻山兩
 山の間にあまれ眼界廣からずして眺望に乏しければ景色を愛する人に雨
 降神社に登るか又は櫻山に攀るを善しとす櫻山は町の右方にある峻嶺に

して僅かに一二町を登れば眼界忽ち開け一碧の相摸灘寸眸に入り來りて
 蒼嵐翠雲亦脚下より起る誠に一世の奇觀なり

● 大磯海水浴

大磯海水浴場は大磯停車場を距る南の方僅かに四五町の海濱に在り地は
 南に面して渺茫たる大平洋を望み右に伊豆の眞鶴ヶ崎、左に相模の長鶴
 ヶ崎を擁して長汀之に連なり西に富嶽あり東に江ノ島あり、鐵道線路を
 隔て北には高麗山、千疊敷山、泡多羅山など稱する高丘連亘す、海濱
 は即ち古歌に小ゆるぎの磯と詠みたる名所にして奇岩汀に起伏し磯吹く
 風は青松を鳴らし岸打つ波は白砂を洗ひて蕭々また颯々たり、海水浴旅
 館は禰龍館、松林館、招仙閣、愛松園、太田樓等にして別に角屋、宮代屋、
 石井、青柳等の普通旅館あり旅館は皆潮水を館内に導き一大温浴場を
 設けて客を浴せしめ又海濱には各々休息所を設け下帯、湯卷、麥藁帽子等
 を貸與し婦女童幼には附添人を出して水浴せしむ、禰龍館は去る明治九

年元の軍醫總監松本順翁が潮水の清良なるを見て此地群礁の間に水浴場を開きしと同時に有志と謀りて新築し浴客の宿泊に便ならしめたる高樓にして今は中川外治氏同館を管理せり館は客室數十を備へ洋食和食共に客の好みに應じて調理す其の席料は室に依りて高下あり宿泊料は日本賄ひにて一日五十五錢(晝食共)但し毎歲十月一日より六月三十日迄の間は席料等に特別割引を爲すと云ふ、松林館は長者林の中にあり庭前松林の中を運動場となし二階あり離れ座敷ありて頗る廣濶、且幾百本の磯馴松は館を圍繞して一碧海と連なり冬寒からず夏暑からずして眺望亦絶佳なり同館定めの宿料は上等一日五十錢、並四十錢なり又招仙閣は停車場の北、小山の半腹にありて以前は海雲樓と稱せし家なり一昨年の新築に係り家居手廣なれども後は山、前は大磯町の人家に遮られて眺望に乏しきが如し、抑も大磯町は東海道五十三次の一にして古へより繁華を極めしが海水浴の設けありしより以來年を逐ふて一層繁昌に赴き今は戸數一

千餘戸、貴顯紳士の別荘のみにて猶ほ三四十軒の多きに及べり、驛内に郡役所、警察署、郵便電信局を始めし料理店、呉服屋、小間物屋、書肆、新聞雜誌店、玉突、大弓店等ありて一として不自由を感せず且東京への交通も汽車片道二時間の上に出ざるを以て夏季に至れば都人士先を争ひて此地に遊び爲めに頗る雑沓を極む、又驛の西端(停車場より七八町)に鴨立澤あり西行法師が「心なき身にもあはれは知られけり鴨立澤の秋の夕暮」と詠みたる舊跡にして西行堂には西行の像、虎子堂には遊君虎御前の像を安し其傍らなる休憩所鴨立庵にては客の望みに應じて西行の筆跡古杖其他の古物を一覽せしむ

● 國府津海水浴

國府津は大磯より第二の停車場所在地にして東海道の國道に方り南は海に接し北は山を負ひ眺望もまた鴻ヶ沼、酒匂等に劣らず(新橋より下等汽車賃四十九錢)古しへは漁家のみ軒を並べし一寒村に過ざりしも停車

場設置以來箱根、熱海若くは小田原に赴く旅客は必ず此地にて下車する事となりしを以て俄かに土地の繁昌を増し大に其の舊觀を改むるに至れり此地に唐津と稱する小高き丘陵あり古へ親鸞上人唐土より一切經を携へ歸り船より上陸して暫く足を止めたる舊地なりと言傳へ茲に登臨すれば馳望快濶眞に活畫に對するの思あるべし此地の海水浴旅店は蔦屋別荘及び國府津館等にして皆近年の新築に係り其の海岸を以て直ちに冷水浴場に充て館内別に内風呂の備へあり蔦屋方一日の宿泊料は一日三十五錢以上、五十錢迄にして又其座敷は一週間乃至一ヶ月の約束を以て浴客に貸渡す事もあり故に家族を携へて永く逗留せんとする者は第二の法に據るを善しとす、村の西北一里を隔て、曾我村あり曾我兄弟の木像、其他緣故ある古物を存すと云ふ又此地より箱根湯本に通ふ馬車鐵道あり汽車の着後十分間を隔て、發車し其の賃金は下等一人十三錢、中等三十錢上等五十錢、一輛借切は小の中等四圓、大の中等五圓五十錢、小田原まで

下等七錢、上中等は總て湯本行の半額なり

● 酒 句 海 水 浴

國府津より小田原に至る途中に酒句村あり(國府津より人力車賃五錢)其國道より左へ入込たる處にある旅館を松濤園と云ふ青松をこ此處に生茂れる濱地七千餘坪を圍ひ込みて茲に十四五軒の別荘を建て價を定めて夏日逗留の客に貸渡す、其家は室數多きあり少きありて大小異なりと雖も一軒毎に臺所、湯殿、厩等の設けあれば家を擧げて出養生に赴むく人には適當の別荘なり又母屋には一大浴槽をしつらへ晝夜海水を沸して入浴に便し又料理の業をも兼ね客の好みに應じて調進す別荘の賃賃は其室の大に依りて異なれども小なるものは一ヶ月七八圓、大なるものは同じく三十圓乃至五十圓なりと云ふ其の海岸の風景に至りては小田原、國府津等と敢て大差なきを以て故らに茲に贅せず

● 小 田 原 海 水 浴

取者一鞭を加へて鐵道馬車を國府津より奔らすれば旅客は僅かに半時間にして坐ながら小田原驛に達す此地は大久保氏の舊城市にして戸數二千一百戸驛内に郡役所、警察署、郵便電信局等あり又舊城の北に梅林あり驛の西端に松原神社あり、海濱なる伊藤伯の別莊滄浪閣に隣れる海水浴旅館を鷗盟館と稱し後に森林を負ひ前に大海を見晴し樓は頗る廣寛にして數十組の客を容るゝに足る同館の宿料は一日三十五錢以上七十五錢以下の定めなれども客の好みに依りては座數のみを貸して自賄ひを許すと云ふ、此地の名物は虎屋の外郎、漬物、鹽辛等にして又通常の旅籠屋は中松屋專助、小伊勢屋佐兵衛、片岡永左衛門など最も名高し、偕是も避暑の序に一遊すべきは道了權現社なり同社は小田原の北三里廿八町字道了山に在り古へより小田原の道了と稱して其名世に高く毎歲一月、五月廿七、廿八兩日大祭を執行し是日東京其他近郷より參詣する者頗る多し、小田原より關本まで三里の間は人力車を通じ(人力車賃廿五錢)夫より本社

まで立登り二十八町の間は徒歩せざるを得ず本社には古木の立像を祭り別に大天狗小天狗等の祠あり又境内には古松老杉鬱蒼として枝を交へ山中温泉なく瀑布なしと雖も日蔭多く風また涼しくして幽邃愛すべきの地なり、茲より明星ヶ嶽を越え宮城野を経て宮ノ下温泉に出るの道あれども峻峻にして歩行易容ならず

● 箱 根 温 泉

前に記載せし如く旅客は國府津より鐵道馬車に乗り小田原を経て板橋、風祭、入生田諸村落の左を過ぎ行けば國府津より一時間にして湯本に達し朝日橋を隔て、早くも温泉宿福住の西洋館を望むを得べし、箱根は古へ七湯の名ありしも今は涌口二三を増して其數十湯となり又近傍に靈地勝區多し今麓の方より順を追ふて其の案内を爲せば

○湯本温泉 是箱根群山の東麓早川の西岸に在り小田原よりの官道は茲より左に岐れ三枚橋を経て箱根驛に達し七湯路は早川の左の岸に沿ひ

右の方に登り行くものなり温泉は湯坂山の麓岩石の間より湧出し其色透過りて水晶の如く唯だ少しく鹹味と帯るのみ温泉宿福住九藏、小川萬右衛門の兩家にては内湯の設けあれども他の宿屋にては小川の家の後に在る總湯を用ふ其實は少量の鹽分を含むのみにして化學上の成分甚だ少なく殆ど通常の眞水に異ならねば病を養ふには効驗多からねど温泉は浴槽を溢れて清潔なると云はん方なく且之に伴ふに山明水媚の眺めあり凡そ箱根七湯の内蘆の湯を除くの外は孰れも單純泉なれども山を登り行くに隨ひて其の含有物多きを加へ底倉に至れば純然たる鹽類泉といなれり福住は名ある舊家にして家の構へも亦廣く小川は日本造りにて其の構造は稍や福住に劣れり概して言へば福住は紳士貴婦人の宿泊するに適し小川は中等以下の人々の逗留するに宜し、今ま兩家の宿料を較ぶれば福住は之を紫紅雪月花の五等に分ち一等(紫)は一日三食及び夜具雜費とも一人一圓、二等八十錢、三等六十五錢、最下等と雖も一日卅五錢の外に猶ほ

相當の座敷料を要すれども小川は一日五十錢を以て上等の賄ひとなすと聞けり個は重に其食類の如何に依りて等級あると勿論なれども兩家品格の上より又幾分か此差を生ずる事もあらんか又昨年此地に湯本電燈會社なるものを設立し早川の水力を利用して機械を運轉し以て電燈を點する事とし箱根山中に一小不夜城を現出せしは亦た偉觀なり、湯本より總湯の傍らを過ぎ少しく阪道を登りたる湯阪山の麓に瀧ありて名を玉垂と云ふ岩角に觸れて水は幾重にも折れ段々に落ち來るさま最と面白し彼の七湯志に正兄翁が潭々の名を負はしたるは此瀧の事にや序あらば問はまし又湯本臺に正眼寺といふ寺ありて曾我兄弟の位牌を安置すと言傳ふ、若し道中雙六にて言へば湯本は振出しの地に當るをもて今ま各地への里程並に人力車賃等を掲げて讀者の便覽に供ふ

塔之澤迄	五	丁	人力車	一人挽	金五錢
堂ヶ島迄	一	里半	同	同	金二十五錢

宮ノ下迄	一里半	同	同	金二十五錢
底倉迄	一里廿二丁	同	同	金二十八錢
木賀迄	一里卅二丁	同	同	金三十三錢
小涌谷迄	二里	駕・龍貨		金六十錢
蘆ノ湯迄(新道)	三里二十丁	同		金八十五錢
箱根驛迄(國道)	二里廿八丁	同		金七十錢
姥子迄	四里廿二丁	同		金……………
大涌谷迄	三里卅二丁	同		金……………
乙女峠迄	四里二十丁	同		金……………
小田原迄	一里廿二丁	人力車貨一人挽		金十五錢
國府津迄	三里	同		金三十錢

○塔之澤温泉 湯本より早川に浴ひて登とる僅かに五丁にして此地に出づ塔之澤は元と東之澤と呼びしものにや七湯志には東之澤今は塔之澤と書すと見たり早川は地の中央を横ざりて玉ノ緒橋は其上に懸かり四面には岩山聳ねて宛然殿の屏風を立て廻したるが如し塔の峯の麓萬縁

叢中に一點の白きものあるは耶穌教會堂にして玉ノ緒橋の傍らに在る小岳は即ち勝驪山なり個は其の景色唐の驪山に勝れりといふ者のありければ舜水やがて筆を採りて勝驪山三字の額を書きたる事ありと言傳ふ温泉は孰れも湯阪山の麓又は勝驪山の傍らより湧出し其泉質は少量の鹽分を合ひと猶ほ湯本の湯の如し温泉宿は玉泉樓(堀貞藏)玉ノ湯(福原遠藏)環翠樓(鈴木善左衛門)一ノ湯(小川鎌太郎)藤屋(安藤徳治)福住樓(長谷川まつ)の六軒にして各々内湯の設けあり玉ノ湯は元と子安なにかしの所有なりしが今は福原の持となり平山某其店を預かり旅館は半ば西洋風の建築にして重に外國人を客とす昨春に至り又々内部に改良を施す由を以て一時休業の札を掲げありしが昨今は既に其改良を了り舊の如く營業するに至りしなるべし、一の湯は其名の如く此地の舊家にして玉ノ緒橋を渡りて右に在り其左にあるものは鈴木にて伊藤春畝翁去る明治廿三年此家に宿り給ひし時環翠樓の三字を書して主人に與へられしより終に樓

號（すう）とのなせしとぞ其他藤屋、福住樓は皆な七湯路の右側に在り此地近來客多く常に繁昌を極むるは温泉宿孰れも業を競ひて旅客の費用を低廉にするが故にして湯本に泊らんとする者も多くは茲に來り宮ノ下に赴く者も亦態々下りて茲に宿りを求むるとありと聞けり去れと开は只だ費用の一點にのみ拘はる事にして若し景色眺望の上より云へば塔之澤は堂ヶ島と伯仲の間にあり殊に外國人の如きは早川の水音終夜枕に響くを厭ふ事あれども日本人には却て之を愛する者多しとぞ今また塔之澤温泉の由來を聞くに一説には慶長年間阿彌陀寺開山彈誓師秋山道伯なるものと謀りて茲に温泉浴場を開きしと云ひ又寛永七年今の一ノ湯の元祖小川宗益（くわんえい）熊野權現の靈夢に感じて始めて温泉場を設けしとも言傳ふ後の説は貞享元年金湯山瑞巖和尚小川宗泉の需めにまかせ自ら筆を染めたりと聞ひし塔之澤温泉の記と云ふ巻物の文に依りしものにて宗益は元と北條家に仕へて弓箭を携ふる身なりしが聊かの事より浪々の身となり年久しく湯本

の里に住ひぬ寛永の庚午十月八日不思議に靈夢を感じ來つて此處を見るに老樹翁鬱として猪猿の類處得顔に遊び一朝にして村を爲し難きを知り歸りて石川了江に謀り木を伐り石を運びて地を拓き一の茅宇を造りて居る程に温泉其後ろに湧出たも即ち最初なる故に一ノ湯と名づく十三日を経て了江も亦來りて此處に住む云々此の巻物は今猶ほ一ノ湯小川鎌太郎の家に秘藏すと云ふ昔は兎もあれ今は家數三十軒（塔之澤全村戸數は六十餘戸）ばかりも建ち連なり大弓店あり楊弓店あり鰻屋あり鮓屋ありて皆な温泉浴客の爲めに賑へるは靈泉の効驗土地の人にも亦空しからずと謂ふべし、鈴木方の宿泊料定價一等一週間七圓、二等五圓廿五錢、三等三圓五十錢、四等二圓八十錢、五等二圓五十錢にして同家は外國人を除くの外は一切席料を申受けざる定めなりとか他の温泉宿も玉ノ湯の西洋賄ひを除けば其の宿料は畧ぼ鈴木と同様なるべし

○堂ヶ島温泉 湯本塔之澤より宮ノ下に至る新道は始終早川の南岸に

沿ひ山を回り谷を越え屈曲幾百遍なるを知らず行くに随つて谷愈々深く
 山愈々近し塔之澤より登ると二三町にして右に松露の瀧を望み又三四町
 の處に小屋ありて人一人に付一錢五厘、一人挽人力車一輛に付三錢、二人
 挽同く五錢づゝの道錢を取る但し新道開鑿の費用を補はんが爲めなるべ
 し姥の水と云へる茶屋の傍りに至れば道二筋に岐れ右を新道とし左を舊
 道とす舊道の方峻しけれども近し湯元より凡そ一里にして少しく平なる
 處に出づ是を大平臺と呼び家居二十軒ばかりも並び其盡處に至れば茶屋
 ありて西に宮ノ下を望み風景殊に好し又行くと半里ばかりにして宮ノ下
 に達す其の二三町手前なる「しのぶ塚」の碑ある處を右に折れ（人力車は
 茲より下へは通はず）狹くして勾配急なる阪道を下ればやがて堂ヶ島に
 達す、堂ヶ島は四面山を以て圍まれ其の三方には早川の溪流を遶らし宛
 然島の形ちを爲す故に堂ヶ島とは名けしもの平地形低く凹にして橋盆の
 底の如く北には明神ヶ嶽峭立して白絲の瀧は其麓に懸かり見晴しの眺め

には乏しけれと縁樹枝を交へて日光を遮り溪水は暑さを洗ひ流して夏日
 は殊に爽涼を覺ゆ、相傳ふ昔し京都天龍の開山夢窓國師老年此處に遁世
 して行ひ澄まし温泉も亦國師自から發見する所なりと故に湧口の一ツを
 夢窓湯と名け土地の小高き處に堂を設け茲に國師の碑を建つ又道の傍ら
 に國師の坐禪石あり温泉宿大和屋には猶ほ國師の眞筆を秘藏せり、當地
 温泉宿は大和屋爲太郎（小蓬菜館）近江屋半之丞、江戸屋茂與次郎の三軒
 にして大和屋定めめの宿料は一週間一等三圓、二等二圓五十錢、三等一圓七
 十五錢、四等一圓五十錢、他の二軒も凡そ是と同様なれば一體に費用の低
 廉なると推て知るべし温泉宿を出て西に向へば平松某氏の別莊ありて園
 内に調べの瀧を圍ひ込み家は客間、書房、茶室、浴室等皆な備はり結構洒
 落を極め頗る幽雅の趣きあり茲より坂を登れば途中木葉隠の瀧を過ぎ四
 五町にして宮ノ下奈良屋の庭前に出づ路傍に平野屋といふ割烹店ありし
 が昨年より故ありて休業せり

○宮ノ下温泉 或る人戯れて宮ノ下は箱根の中央政府なりと云はれき
 個は郵便電信局、村役場、巡査派出所等皆な此地に在るのみならず風色
 も亦七湯中の第一に位し此地繁昌すれば他の温泉場も亦随つて潤ひ其影
 響は往々他の六湯に及ぶとあるが故なるべし宮ノ下は海面より高きと千
 百二十尺、早川の水流より高きと尙ほ三百尺明神ヶ嶽、明星ヶ嶽の山脈
 は早川を隔てて北に聳え早雲山、冠ヶ嶽は遙かに西に屹立し小地嶽山、鷹
 巣山の餘脈西南より來り東に走りて城山、湯殿山に連なり東の方巒岳の
 盡る處より遠く相模の海を雲烟の間に認む南北西の三方は斯く山の爲め
 に取圍まれたれど其の距離遠きをもて眼界狭からず且地形稍や平かなれ
 ば遠望の眺めに富みたるも七湯中に冠たり戸數は百戸あまり温泉宿は二
 軒にして一を富士屋(山口仙之助)といひ一を奈良屋(安藤兵治)といふ兩
 家とも巨大なる西洋館を築き一軒にして殆ど他の四五軒に敵す就中富士
 屋は日本の宮殿めきたる高樓を新築し先年其工を竣へて専ら外國人の宿

泊に供へ又各室に電氣燈を點じて室内を照せり、富士屋は都て外國人の
 みを客として一日宿料三圓五十錢其の組織は純然たるホテルなり、奈良
 屋は本道の右手に在りて日本客室と西洋館とを設け洋館の方は客室凡ろ
 二十七室を併へ食堂あり玉突場あり洋館付の浴室は八角形をなせる小堂
 の中に設く西洋館一日の宿料は二圓五十錢又日本の客間は廣きあり狭き
 ありて一定の席料等を記し難けれど凡そ一人に付席料宿料其他の雜費を
 合せて一日四五十錢より一二圓の間にあるべく郵便電信の事務は奈良屋
 の店に於て取扱ひ居るをもて爲換等を振出すには都合よし近頃主人兵治
 學生をして直安に宿泊せしむるの法を設け旅行券又は學校の證明書を携
 へたる生徒には宿料等に特別の割引を爲し氣安く心のどかに逗留せしめ
 以て平日螢雪の苦を慰むといふ學生に對して鐵道郵船會社等が賃金の割
 引を爲すとは聞及びたれども唯だ榮利をのみ冀ふ宿屋にして此舉あるは
 賞すべし、温泉湯口は都て五ヶ所にして之を三日月の湯、熊野の湯、吉田

の湯、瀧の湯、明治の湯と云ふ孰れも鹽類泉なり今ま三日月の湯の分析表を掲ぐれば左の如し

宮ノ下三日月の湯一リートル中の成分

硫酸那篤留母	〇、〇六五六	格魯兒那篤留母	一、五八八八
格魯兒加留母	〇、〇〇五二	格魯兒麻個温叟母	痕跡
硅酸	〇、一二六二	炭酸亞酸化鐵	同
炭酸加爾叟母	〇、一八一八	炭酸麻個温叟母	〇、〇六二三
硫酸加爾叟母	〇、〇二五二	硫化水素	〇、〇〇一七
磷酸	痕跡	礬土	痕跡

固形分合計 二、〇五六八瓦

温泉宿の浴室に引けるは重に此の三日月の湯と明治の湯にして浴槽は微熱、温度、微冷の三個に分ち奈良屋には別に湯瀧水瀧の設けあり此地より近傍への里程を云はゞ堂ヶ島へ五町、底倉へ三町、木賀へ十町、小涌谷へ十六町蘆の湯へ一里二十六町其他上の方への分は概ね湯本の部に記した

る里程の内より一里半を引去りたるものと知るべし、又人足賃は小涌谷へ十錢、蘆の湯へ二十錢、乙女峠へ往復五十錢、箱根へ三十七錢、同じく大地獄廻り五十錢、駕輿賃は人足賃のおよる二倍なりと知るべし

○底倉温泉 底倉は宮の下の町續きにして東北は狭く東西は稍や廣く北は早川を隔て、明星ヶ嶽を望み南は蛇骨野小地獄に連なり西は蛇骨川の崖に接し宮ノ下堂ヶ島は共に底倉村の一郷なりとす蛇骨川は萬年橋の上の方より瀑布の形ちを爲して流れ來り其末は早川に合す温泉は其の上流なる岩石の間より滾々として湧き出し神靈湯、萬壽湯、靈仙湯等の區別あれども其成分は何れも硫酸の二質より成りて畧ぼ宮ノ下の湯に同じ温泉宿は梅屋牧太郎、仙石屋丈助、蔦屋きくの三軒にして宿泊料は一日一人に付二十五錢より五六十錢までの間に在り、蛇骨川の上流の地僅かに二三尺を穿てば白色にして蛇の骨に似たる奇石を得るとありとて何時しか之を蛇骨川と稱ふ此川に架したる萬年橋を渡り木賀への舊道に至れば右

に白鷺の瀧を望み其傍らに大間風呂あり傳へて言ふ昔し豊臣秀吉此の温泉の奇効あるを聞き石風呂を設けて朝夕に浴し以て戦勞を慰めたりと故に今猶ほ大間の石風呂と稱す又底倉記を按ずるに往昔新田義隆義兵を奥州に擧げし相馬の爲に破られて戦ひ利あらざりければ僅かに二三の郎黨と共に一方を切抜け辛じて箱根に來り身を木賀に潜めて時の到るを俟けるに創傷の痛み再發して殆ど難儀に覺えければ底倉の温泉奇効あるを幸ひに日々此地に通ひて湯治を怠らず漸くにして痛みも癒はける折しも密告者の爲めに撃手を差向られ義隆は郎黨と諸共に終に討死せしとなん今人公の忠死を憐み近ごろ公の履歴を著はして其功を頌し又底倉に一基の記念碑を建て、其靈魂を慰さむ、此地より小涌谷及び蘆の湯に赴くべき道あり又木賀への新道は早川の西岸に在り舊道よりすれば途少しく遠くして且嶮惡なれども其の途中見晴しの茶屋に出で巒峰の伏せる横溪流の蟠まれる趣きを眼下に下瞰すとを得べし

○木賀温泉

底倉を距ると八町ばかりにして木賀に出づ木賀は海面を抽くと一千七十尺早川の西岸早雲山二ノ平の東の麓にあり早川は宮城野村より來り此地の前を過ぎて南に流れ屈曲して東に下る、不動の瀧は二ノ平村の道に迸しり辟邪泉は温泉場の横手に流れ其水合して早川に入る温泉宿は龜屋新太郎(神代樓)伊勢屋増右衛門の二軒にして別に底倉梅屋の支店あれど個は盛夏の時のみ店を開きて客を迎へ其他の時季には戸を銷して家人は皆な底倉の本店に移り住ふといふ此地に新道の開けたる以來市坊の有様大に舊體を改め龜屋の如きは以前の庭口今の玄關口となり曾て玆に遊びし者すら猶ほ見違ふる程の思ひを爲せし事あり殊に伊勢屋は舊松阪屋の家を譲り受て之に木製黄色ペンキ塗の西洋館を建て増したれば東南の方より見る時は半は龜屋の家を隠し伊勢屋のみ此の地に幅を取るかと思はれ且其の彩色の奇なるが爲めに遠く望めば此樓もまた箱根細工の玩物かと疑はれしが惜い哉先年偶々此地より火を失し龜屋伊勢屋

其他の温泉宿は悉く灰燼と化し去り僅かに二三の民家を殘せり去れば龜屋の如きは頻りに新築を急ぎて客を迎ふるの準備中なりと雖も此地の全く舊觀に復するは本年盛夏の頃ならんと云へり誠に木賀に取りては不幸中の不幸と謂ふべし、此地より蘆ノ湯まで里程一半里、駕輿賃は三十錢往復五十錢なり

○蘆ノ湯温泉　は七湯中最高處にあるものにして海面より高きと凡ろ二千七百六十尺其の位置も亦大に他の六湯と違へり地は駒ヶ嶽神山の東の麓二子山の北に在りて東北は稍や開けたれども西南には嶺峯集まり來りて硫黃山、死出の山、火どもし山等其裾に起伏す硫黃山は蘆の湯を距ると十二町ばかりの處に横はり土塊多く硫黃の氣を含み岩の間に於て自然と燃ゆ上り硫氣は再び地中に入る蓋し蘆ノ湯の泉源なるべし又湯の花澤は硫黃山を距ると北四五町に在り小さき溪の流れの中諸處にぬるき温泉湧出す里人之を水流の稍や平かなる處に湛へ藁を入れて之に硫黃を澀着

せしめ捲りて硫黃土を取り又乾かして樽に詰め四方に運びて之を鷲ヶ所謂湯の花是なり木賀より蘆ノ湯までの山道は登るに随つて峻しく殊に七曲りと稱ふる處は屈曲七八回登るに苦しむ程の難處なるが此阪を登り詰れば漸く廣き高岡に出づ其南は二子山にして北は宮城野二の平及び小地嶽の平原を見晴し東は鷹巢山、火どもし山の餘脈箱根官道の峯に連なり小田原の海岸を隔て、江ノ島、三浦岬等を朧氣に認め其の景色さながら一幅のパノラマに似たり茲より西に折れて行くと四五町即ち蘆ノ湯なり温泉宿は紀伊國屋儀三郎、松阪屋方右衛門の兩家を以て最とし客室各々三四十を備へ和洋二様の割烹を調理して客を待つ紀伊國屋、松阪屋の兩家は先年合併して蘆友館と稱し株主組織のホテルを營み居りしが昨春又又分離して別々の營業を爲すに至れり其宿料は洋食賄ひの方一日凡ろ二圓五十錢、日本風の旅館は凡そ三十錢以上一圓以下なれども客の好みに應じ何品にても別に料理して其膳に上すと甚だ自由なり其他の温泉宿は

吉田屋國三外二三軒なれども吉田屋の外は戸を鎖して休業中の如く見ゆ
 鑛泉は多量の硫黄を含むものにして其質は他の六湯と同じからず蘆ノ湯
 に近づけば早く已に硫黄の匂ひ鼻に入り道にて入浴者の歸るに出で逢へ
 ば又硫黄の匂ひを感ずる程なり故に病症に依りては蘆ノ湯ころ特に効驗
 あれとて求めて此地に赴く者も多けれど所謂通り一遍の避暑客は土地の
 僻なると硫氣の強きを嫌ひて茲に足を留むる者少なし今ま紀伊國屋に
 引ける蘆ノ湯鑛泉の分析表を掲ぐれば

蘆ノ湯温泉一リートル中の成分

硫酸那篤留母	〇、二二一三	硫酸加爾斐母	〇、二一九五
硫酸加爾斐母	〇、〇一八〇	重碳酸加爾斐母	〇、〇一五〇
重碳酸那篤留母	〇、一二五五	硫化安瀾紐母	〇、〇一九二
硅 酸	〇、二六〇〇	游離硫化水素	〇、〇三一八
游離炭酸	〇、一〇八八	格 魯 兒	痕 跡
次亞硫酸	少 量	礬 土	少 量

鐵 痕 跡 一 有 機 物 稍 多 量

固形物合計 〇、六一二〇瓦

其の効能は癩麻質斯、皮膚病、經久頑固の汎發黴毒、全身多血、鉛水銀等の
 慢性中毒、子宮及び卵巢の慢性加爾斐、萎黃病、依卜昆徑里、喜斯底里等に
 宜しく咽喉及び氣管支加爾斐等には吸入法を用ふるも亦可なりと、蘆ノ
 湯より國道畑宿を経て湯本まで里程一里廿八町途嶮しく殊に瀧阪は頗る
 嶮岨なれども下りは歩行くともさのみ疲勞を覺ゆ又箱根驛に至る一里
 二町途は駒ヶ嶽と二子山との間を行く其の勾配湯本道ほどには嶮しから
 ず途中に曾我兄弟及び遊女虎の碑あり右手に多田滿仲の墓あり又行くと
 數丁にして右に精進池、左に薺池を望む此邊昔しは賽の河原と稱へ路の
 傍らに二十五菩薩の地藏を安置せしが今は唯だ其一を存すのみ進んで薺
 池の邊に至れば俄然として右に一面の綠水を見る即ち箱根の湖水なり塔
 ケ島の離宮は綠樹の間より影を漏らして眺望亦頗る佳なり是にて七湯の

案内を終る

○小涌谷温泉

七湯の外箱根に新温泉場三四ヶ所ありて小涌谷も亦其一なり小涌谷は宮ノ下より十五町蘆ノ湯道の途中小地獄山の麓に在りて鑛泉は蒸氣の沸騰する如く小地獄山の半腹より湧揚るものを取り樋にて之を浴槽に導き其の湧口には屋根を蓋ひて人を近づけず泉質は多量の硫氣と鐵分を含み俵麻質斯、貧血症等に効ありと云ふ温泉宿は開化亭星野常次郎及び三河屋恭三の二軒にして開化亭には西洋室もあり外國人の來り泊するに差支なし其他仙石湯、姥子、新湯等もあれと途嶮しく地僻なる上に温泉宿も亦多くは狹隘にして且清潔ならざれば都人士の杖を曳くものは至つて少なく唯だ近郷の農民等耕しのいとま來りて浴するのみ、右の内仙石湯は大地獄の山中に在り浴場二ヶ所之を上湯下湯と云、姥子温泉は冠ヶ嶽の西北大地獄山の西端にありて海面を抽くこと二千八百二十尺其の道順は木賀より宮城野に出で仙石原を経て姥子に至る凡そ一里二

十町、底倉宮ノ下よりは二ノ平より大涌谷(大地獄)を経て此地に到る凡そ一里半兩道とも孰れも嶮惡にして尋常浴客の到ると甚だ困難なるべし又姥子より湖尻の新湯まで凡そ十二町新湯は箱根湖の岸にあるをもて姥子より小蒸氣船に乗り湖水を横ざりて箱根驛に到るもよし汽船賃は一人に付三十七錢五厘なり諸例に依り箱根近傍の名勝を擧ぐれば
 大涌谷 昔しは大地獄といふ冠ヶ嶽北の崖の中腹より起り東南は劍ヶ峯早雲山、西北は大地獄山の間を通り北に流れて早川に入る所の大なる澗谷の總稱なり谷の中央より頂上に至る凡そ十二三町ばかり處々に硫氣燃え熱泉迸しりて所謂「ソルファタラ」なるもの多く溪の流れは皆な温泉となり其近傍は悉とく赭土色の焦石にして草木は枯れ萎み地皮はグザクとして軟かく試みに杖もて地を突くときは容易く二三尺の深きに入り地下の燒土溶解して突穴より蒸氣を噴出す蓋し吾が地球の尙ほ熔融の狀態なりし時表面のみ纔かに凝固して地面に薄皮を結べる有様を目前爰に見

るかど疑はる殊に降雨の後には地皮更に脆くなりて若し過つて之を踏破る時は半身焦土の中に埋められ焼け死ぬるもの時々あり生ながら焦熱地獄の苦みを見る事あるをもて偕は大地獄とは呼做しけんいとく危ふき地なり、其間にある狭き山道は底倉より二ノ平を経て姥子に至る通路なりまた大地獄谷の頂上を閻魔の臺といひ之に登れば眼界忽ち開け眺望頗る快濶なり

早川 此川は水源を箱根の湖に發し仙石原の平原を北に向ひて流れ次で東に折れ左は金時山、明星ヶ嶽、明神ヶ嶽、塔ヶ峯、右は冠ヶ嶽、早雲山、小地獄山、鷹巢山、城山、湯坂山等の間を潜り水路凡る五里計り早川村に至りて小田原の海に入る早川の兩岸は懸崖絶壁屏風の如く立ち連なり水勢は石に觸れて其音淙然たり故に早川といひ又一に荒川といふ新選六帖に「早川の瀬ざり危ふき船渡りうがひに向へ道遠くとも」と詠みしも亦此川の事なるべし而して箱根の温泉は蘆ノ湯の外は皆な此川の南岸にありて

湯本の朝日橋、塔之澤の千歳橋、玉の緒橋等は皆な早川に架け渡せるなり又浴客徒然なる儘に絲を垂れて此川の小魚を釣るに香魚ハヤなんどの獲物最も多き時もありとぞ

蘆湖 一に鑿字池と云ふ箱根湖水の事なり日本地誌に曰く蘆湖は相州足柄下郡箱根山頂に在り東西二十町十五間南北一里二十三町、周圍三十町五十九間半、深さ四十六仞其の下流を早川と云ひ東流凡る五里小田原に至り海に入る云々、其形も瓢の若く底は南に向ひ帯の方は北に向ふ冠ヶ嶽、駒ヶ嶽は東の岸にうばだち西は遙かに芙蓉の峯に對し北は近く金時山に接す東南の隅に少許の平地を遺し茲に箱根驛及び元箱根村あり又箱根離宮は湖面に突出せる塔ヶ島の丘の頂上を關き茲に西洋風の御殿を建築せられしものにて湖邊に一ツの景色を添へ來りぬ

元箱根村 は權現坂の西蘆湖の東の岸にありて人家凡る三十戸ばかり藁屋根は雨に朽ち板庇は月を漏らして其様いたく衰へたれども天然の景色

は其めぐりを精ひて古雅愛すべき所あり夏に至れば脚氣患者此村に來りて療養する者多けれど食類自由ならず且清らかなる座敷に乏しとて永くは留まらずと云ふ此地に取りて誠に遺憾き事にこそ

箱根権現 蘆湖の東の岸駒ヶ嶽の南の麓にあり元箱根村より湖岸に沿ふて行くと六町許の處より更に石階を踐みて上る社は瓊々杵尊、彦火々出見尊、木花開耶姫尊三體を祭り天平寶字元年万卷上人靈夢に由りて勸請する所なり代々の天皇屢々幣帛を奉つり英雄豪傑の士多く表矢を獻じ往昔は甚だ壯嚴の社なりしが今は大に神さびて社も亦頽敗せり是より湖涯に沿ひて湖尻に至る凡ろ五十町道路は駒ヶ嶽神山冠ヶ嶽の東麓をよぎるものにして狹けれども左のみ峻しからず又湖に舟をやりて湖尻に至る水路一里半、岸には奇巖苔蒸し葛纏ひ老樹の水に臨んで將に倒れんとするもの巨石の落ちんとして漸く木の根に支へらるゝもの等看來り看去れば眸も爲めに忙はしく宛然景色の走馬燈に對ふの思ひありて其の實況一々筆には盡し難し

々筆には盡し難し

箱根驛 権現阪を下り塔ヶ島離宮の前を過ぎて此驛に至る驛は蘆湖の東南にありて戸數凡ろ二百戸古へは人馬絡驛として織るが如く東海道中繁華を極めたる驛路なりしも今は大に衰へて古杉森々時を得顔にはびこるものゝ如し去れど風色は猶ほ昔しの趣きを棄てず風靜かに波穩やかなる日は富士の嶺遙かに湖の面に映じ宛も湖中逆しまに立つが如き事あり之を箱根の倒富士といふ宿屋は土生屋四郎右衛門、石内彌平太最も大きく就中土生屋土園内湖に枕みたる處へ近頃高樓を新築し景色を簷のうちを集めて之を三景樓と名づく若し一く其勝をかろへなば眸に入り來る風物は僅かに三景に止まらざるべし土生屋の宿泊料は一日卅錢より五六十錢までにして別に西洋料理をも鹽梅す

湖尻 蘆湖の北端にあり東は仙石原の平原に連なり東南に冠ヶ嶽屹立し西北に金時山雲間に聳ゆ金時山の南峯少しく平かなる處を乙女峠とい

ひ駿河國駿東郡御殿場ごてんばに通ずる道路は即ち此峠をよぎる（乙女峠より御殿場まで里程一里二十町）又湖尻より姥子温泉に至る十八町湖尻にある一小温泉場を新湯といふ此處より箱根驛かよに通ふ小蒸氣船じょうきせんの賃金ちんきんは前に記せしが日本の渡船わたせんを雇やとふる亦自由なり

乙女峠 仙石原より西の方二里の處に在り仙石原より一里半の處より嶮しき九折の山路を攀よち上り十七八町にして峠の頂上いたさきに出づ西には駿河駿東郡の平原を眺め其前に富嶽の兀こつとして雲間に聳そびゆるを看る風景頗る宜し箱根より富士山に登るは此峠を越ゆるを常とす

箱根の名産は挽物細工及び寄木細工なり世に湯本細工といふは往昔東海道だうの往來盛んなりしころ里人之を湯本の茶屋に持て行きて鬻うぎしよりさては湯本細工とは呼ばれしが今は此店却て宮ノ下に多く且近來外國人の此地に遊ぶ者多ければ其好みに投なじ緻密の寄木もて食卓、書棚、衝立などを製するに皆な極めて精巧なり

● 熱海温泉

箱根七湯を巡りたる後ち更に一遊を試むべき温泉場は熱海なり箱根驛より十國峠を経て此地に出るの山道もあれと竝には先づ其の地理より説出すべし、熱海町は元と湯瓦村又は磯山の里と稱し伊豆の國賀茂郡伊豆山の南日金山ひがしやまの東の麓に在りて則ち静岡縣の管下に屬す三方には山を環して北風の寒さを防ぎ東南には海を扣へ濱風よくと吹て心地爽なれば熱海のみは夏冬共に湯治に宜く彼の秋風木の葉を散らす頃となれば湯戸孰れも戸を鎖して空家となるが如き山奥の温泉場とは自から異なり今ま熱海温泉記を按ずるに仁賢天皇の四年岐島穗允君罪ありて獄死す然れども逆鱗猶ほ未だ止まず其屍を豆州熱海の海底に沈めしめ給ふ此時始めて海中に熱湯湧出して魚鱗介甲皆な爛死す其後ち天平勝寶元年己丑箱根山金剛王院の第四祖萬卷上人斯る靈湯の空しく海中に流散するとを惜み且鱗介の之が爲めに爛死するを憐れみ其の泉脈を尋ねて之を山腹に移し其

傍らに少彦名神を祭り薬師佛を本地として湯前権現と稱す其泉は則ち今の大湯にして権現の社猶ほ存せり云々、凡そ里俗に傳ふる神社佛閣等の由來には怪しき事のみ多ければ此説も亦信するに足らねと兎に角其起原は古きものに相違なし然はあれ今の熱海は昔の熱海に似ずして昔の繁昌は今の繁昌に及ぶべくもあらず開けゆく世の様は碧海蒼田も物かは今は三層四層の高樓建ち續き耕地九十町餘、宅地十二町餘、戸數は實に五百戸以上に及び其町を本町、中町、濱町、新宿、荒宿、横町、新横町、坂町、小澤、崎見町、上宿、野中、横磯など、稱へ村内に離宮あり郵便電信局あり警察署あり銀行支店あり其他西洋料理、蒲焼屋、蕎麥屋、汁粉屋、大弓、楊弓、玉突場、借馬、貸本屋、新聞縦覽所等もありて旅客消閑の具には差支なき有様なり、或人の曰く熱海は避暑よりも避寒に宜し故に遊山半分の湯治客は夏日熱海に赴く者尠しく、夫れ或は然らん併しながら此説は冬季此地の意外に暖かなるを見て此の割合ならば夏季は定めて暑からんとの想像に

過ぎずして實際は三伏の日と雖も猶ほ東京より寒暖計は二三度の下にあり盛夏の候と雖も常に此地に浴客の絶えざるを以て其證とすべし、此地への道順を記せば國府津停車場より里程凡そ八里半此内小田原迄の間は鐵道馬車の設けありて頗る便利なれども残り七里の間は上り下りの阪道多くして歩行稍や困難なり小原田熱海間の人力車は一人曳六十五錢の定めなれども十月より三月迄の間は二人曳ならでは客の注文に應せず蓋し其道路霜雪の爲めに害せらるゝの故か又別に理由ある事か未だ考へず去れば熱海の有志者は近頃此の不便を除かん爲め熱海人力鐵道なるものを敷設せんとて既に道路の測量も済み昨今工事中なりと聞く此人力鐵道落成の上は八人乗の客車を二人の車夫にて挽き凡そ二時間にして小田原より熱海に達せしむるの仕組なりと云へば旅客に取りては一層の便利を増すなるべし、人力車にて小田原を發し早川、石橋、米神等を過ぎ凡四里にして吉濱に達す地は海に瀕して浪は白砂を洗ひ南方既に熱海の魚見岬を

望み風色稍や佳なり小憩の上更に南に進めば二里餘にして伊豆山に到る此地も亦一の温泉場にして走湯は其の左岸にあり伊豆山より十八町にして熱海に到る偕熱海の景色を云へば東南海を隔て、房總の遠山雲と聯なり海上三里の處に初島ありて其形小龜の脊を池の面に浮べたるが如し左に伊豆山横磯を望み右には魚見岬を隔て、大島の時々煙を吐くを認め後には日金山高く聳えて北風を防ぎ山海の眺め共に見るべきものあり且土地は濱邊より爪先上りにして客舎は層一層より高きを以て此の景色は孰れの温泉宿に到るも其の樓上より眺め得べし熱海温泉宿は

- 一等温泉宿 石渡喜一(富士屋) 石渡要作(相模屋) 世古六之助(眞誠社)
- 樋口忠助(氣象萬千樓) 須田藤次郎(大光館)
- 二等温泉宿 鈴木良三(鈴木屋) 杉崎富八(阪口屋) 露木準三
- 平野新兵衛(小松屋)
- 三等温泉宿 野村庄左衛門(尾張屋)
- 四等温泉宿 内田市郎左衛門(古屋) 大木圓藏(高砂屋) 山田半兵衛(山田屋)

對木敬助(藤屋) 野田總八(隱居玉屋) 藤井文次郎
 山田發助(新鈴木屋) 浦井敏吉(新玉屋) 野村峯太郎
 加藤半七(登倉屋) 松尾宗兵衛(福島屋) 野田宗助(中玉屋)
 山田藤吉(升屋) 二見半右衛門(釜鳴屋) 芥川九右衛門(伊勢屋)
 鵜澤莊吉(東屋) 野田久七(角玉屋) 鵜澤だい
 六等温泉宿 渡邊徳右衛門(松屋) 米倉三右衛門 水谷佐助(坂本屋)
 上杉鐵次郎(永樂屋) 福井善四郎 根本總右衛門
 小倉清助(丸屋) 稻田松次郎 岩木吉五郎

の三十七軒にして富士屋は本町を隔て、左右に本家別荘あり、相模屋は上町大湯の傍らを温泉寺の方へ曲りたる處にあり 眞誠社は本町より小澤町の方へ曲りたる處にありて共に二層三層の樓を備へ客室皆な清潔にして紳士貴婦人以下の宿泊に適す、樋口は西洋風日本風兩様の建築にして半は外國人の宿泊に便す温泉は孰れも温、熱の二槽を備へ樋口の如きは別に蒸風呂の設けあり偕浴客逗留の費用は座敷食物等の如何に依りて

固より一定し難けれども其の食物の逃へ方に凡る三ツの方法あるとを知らざる可からず其の第一を自賄ひと云ふ客人自ら食物を調へ又は下婢を雇ひて調へしむるなり、第二を伺ひと云ふ客舎より三度々々調理すべき食物を客人に問合せ其好みに應じて調ふるが故の名なり食物に好嫌ある人又は毒立ある人は面倒と入費の嵩む憂はあれと先づ此二ツの中を擇まざる可からず、第三を宿賄ひと云ふ一日の賄料何程と定め客舎の見計ひを以て適宜の食物を調ふると猶ほ通常の旅籠屋の如くするもの是なり故に通る一遍の避暑客は此方法に據るを常とす、第一の方法に據りて下婢を雇ふ時は之に食物を與へて一週間三四拾錢の給料を取らすれば毎朝來りて夕刻まで親切に諸事を辨ず又第一第二の仕方なれば食料の外に座敷料、炭油料、湯錢等を客舎に拂ふものとす座敷料は其席の大小陋美等に依りて差異あれども一週間凡る五十錢より三圓迄を限りとし夜具損料は一組一夜四錢より十錢まで絹夜具は十五錢以上廿五錢迄を限りとす

大湯 熱海には昔し七湯と稱へて湯口は大湯、清左衛門湯、小澤湯、河原湯、左治郎の湯、風呂の湯、中野の湯等の七ヶ所なりしが海岸田園いづこにても少し深く地を掘れば温泉忽ち湧出づる所なれば其後追々温泉の數を増し今は二十餘ヶ所となりしと云ふ其中にて珍らしく且面白きは大湯にて晝夜三たび時を違へず湧き折々長湧する事もあり長湧の時間は概ね十二時間にて例へば午前五時に湧出れば午後五時に止み是より又十二時間の長休ありて一滴も湯を出さず翌日より湧出すると稍々平日の通りとなれども湯の量は多からず漸く四五日を経て始めて常に復すと其の湯の湧出る時の有様を云へば始めは疊石の間に蟹などの泡を吹くが如くブツブツと温湯滴り出で遂に沸騰する時となれば宛然數臺の大鳴筒にて瀾ぎ出すが如く蒸氣と共に熱湯迸しり出で、近邊には熱き雨を降らすなど其勢ひのすさまじく其響の物凄きと云はん方なく近づきて見る事も出来ぬ程なり故に人の近寄りて怪我する事のなき様湧口の四方には鐵柵

を結び廻らして用心となせり又温泉宿は多く此の大湯を樋にて風呂場に通き之にぬる湯を加へて浴を取らしむるやうに爲したり其中には尾張屋の湯、榊屋の湯、玉屋の湯、伊勢屋の湯など、稱へて内湯のみを用ふる温泉宿もあれと其の成分は大湯と似たるものなれば茲には大湯の分析表のみを掲げんに

熱海大湯温泉一リートル中の含有成分

格魯兒那篤留母	三、七九〇〇	格魯兒麻個温留母	二、三三三〇
格魯兒剝篤留母	一、八一〇〇	格魯兒加爾留母	一、七六七〇
硫酸 石 炭	〇、一九三〇	重炭酸石灰	〇、〇〇四二
重炭酸化鐵	〇、〇〇三一	硅 酸	〇、〇一〇〇
第一格魯兒滿俺	痕 跡	有 機 物	痕 跡
親魯母那篤留母	同 上		

固形分合計 一〇、〇二〇三瓦

右は所謂食鹽泉と稱ふるものにして其の効能は胃病、腸加答兒、肝臟病、

腺病、氣管支加答兒、子宮病、脚氣水腫等に宜しく其内にては胃病、咽喉及氣管支加答兒、子宮、傷風、鬱憂の症等には浴用の傍ら此の温泉を飲用して効ありと云ふ

噲氣館 大湯の傍らに噲氣館なるものあり故大相國岩倉公噲氣の患者に効あるとを察し官僚と謀りて建設せしものにして元の衛生局 長長與專齋、故御料局長 肥田濱五郎の諸氏専ら事に従ひ明治十八年二月始めて此館を開く噲氣場は其の建築最も壯麗にして場の中央に機關を設け大湯沸騰の度毎に蒸氣を場中に導き患者に其氣を呼吸せしむるの仕掛なり又別に浴室を構へ病症に従ひて入浴せしむる事もあり館内に浴醫局を設け浴醫長一人屬員數人を置きて温泉宿に逗留する浴客の望みに應じ往て病ひを診斷し浴法を指圖するなど頗る親切なり館内の器械はギヨイベル會社製氣壓吸入器 體重秤量器、體尺計、ワルデンブルグ氏製氣槽、スピロメトル等にして體格測定并に醫療に必要な器械は一も備はらずと云ふ

事なければ縦令病ひなき避暑一方の客なりとも浴醫局の診察を請ひ又體重を量り置く時は平生攝生の上に於て大に心得となる事もあるべし、館内診察料は十錢、浴醫長往診料は一圓より三圓まで、代診ならば三十錢より一圓まで、診断書料は三十錢、館内一回の入浴料は五錢、同く一週間入浴料は三十錢、氣壓吸入器施用料は一回三錢の定めなれども猶ほ委しき事は同館に就て問合すを善しとす

熱海八景 故成島柳北翁曾て年毎に此地に遊び畫伯野村文舉氏と共に熱海八景を選べり所謂梅園の春曉、來宮の杜鵑、温泉寺の古松、横磯の晚涼、初島の漁火、錦浦の秋月、魚見崎の歸帆、和田山の暮雪是なり今ま簡短に八景の案内を爲さんに梅園は熱海本町を距る北の方凡そ十町の處に在りて賀茂第三御料地に屬す土地幽靜之に加ふるに梅樹數百株を植ゑ花咲に至れば香雪紛々人をして去るに忍びざらしむるものあり園内別に休息所あり庭前には花卉を栽ゑ飛泉を引きて茶菓を饗ぐ、來宮は梅園の北湯前

神社の西に在り傳へて云ふ和銅年間一株の樹根偶ま漁夫の網に罹る取りて之を棄れば再三網に入ると始めの如し漁夫怪みて之を探り海濱松樹の下に置たるに一夜夢に漁夫に告て曰く吾は五十猛命なり山に七樹の樟ありて浪の音聞ゆる地あり爰に余を祀らば誓つて村民の守護たらんと因て其の根株を來宮と齋きまつり毎年八月十五日祭事を催す今は熱海の鎮守にして境内猶ほ二株の老樟あり幹の中空洞にして能く數人を容るゝに足る、温泉寺は上宿にあり臨濟宗妙心寺の末派にして清水山と號す授翁宗弼和尚即ち萬里小路藤房卿の開基にして寺内に卿の手づから植ゑたりと言傳ふる古松あり其枝四方に廣がり幽翠人を襲ふ庭前に開祖の碑あり、横磯は市街の東北端に斗出せる海濱の名にして此地夏季に至れば海水浴を爲すに宜し其濱邊に一軒の海水浴場ありて客に浴衣下帶等を貸與す、初島は海上三里を隔てたる一孤島にして人家四十二戸を有す島民は皆な質朴にして重に漁業と農業とに従事す古來の制規にて島中の家數之

より増すとを許さず故に人口割合に多し鎌倉右大臣が「宮根路を我越に
 来れば伊豆の海や沖の小嶋に浪の寄る見ゆ」と詠せしは則ち此島の事な
 り、錦浦は念佛山の麓を廻れる海岸の總稱にして魚見崎より錦巖迄海上
 半里舟にて到るべし絶壁の下奇巖突兀として連なり俗に兜岩、烏帽子岩、
 碁磐石、霰石、五色石、胎内竇、狗竇等の名あり殊に奇觀なるは窟の觀音に
 して潮干の時内に入れば窟廣くして中に白色の蝙蝠棲み其の盡處に觀音
 の石像を安す又其隣の洞を錦巖といふ早朝此洞に入れば旭光岩壁に映じ
 海水に反射して其色錦の如し故に採りて以て此岸の總稱とはなせりと、
 魚見崎は錦浦に到る途中海上に斗出せる岬の名にして横磯と相對して灣
 形を爲せり岸頭に一茅屋ありて玆に番人を置き魚の集まり來る毎に之を
 漁船に報せしむ故に此名あり、和田山は熱海の南方に蟠まれる兀山の名
 にして其麓に和田村あり山中秋は初茸を産し冬は雪中の景殊に佳なり
 ○伊豆山 是伊豆神社の在る處にして熱海の北十八町小田原道の傍ら

より左に登るなり伊豆神社は元と走湯山東明寺と稱し上下の二宮及び三
 千の支坊を領せし關東の總鎮守なりしが中古より漸く衰頽して今は僅か
 に上ノ宮のみを存す此邊老樹鬱鬱甚だ幽靜の境にして古へ古々井の森の
 名あり又石階を下りて海濱に到れば此地所謂伊豆山温泉場にして相摸屋
 江島屋、中田屋等の温泉宿あり温泉は明礬と硫黄とを含み高き處より落
 ちて湯瀧となる走湯即ち是なり此地は東に總房相の峯巒を望み南に大島
 以下伊豆の諸島を水天鬚鬚の間に眺め其の景色をさくく熱海に譲らず且
 其の距離も亦遠からざるを以て熱海に逗留する浴客も亦散步かたぐし必
 ず此地に來りて一浴を試むるを常とす、以上凡そ熱海の實況を述べ盡し
 たらば是より三島、箱根等に赴く里程を記さん熱海より日金山の絶頂
 十國峠を経て箱根驛に到る里程五里(賀籠賃壹圓廿錢)道嶮しくして其幅
 も亦三四尺に過ぎず夏は茅萱いやが上に生茂りて歩行頗る困難なれども
 十國峠の絶頂に到れば眼界忽ち開け馳望千里眼中に一の遮蔽あるを見ず

眞に十國の名に背かずして海内の絶観なり去れど夏は毒虫多く雨中は山
 蛭多くして往々人を害す宜しく心を用ふべきなり、熱海より十國峠の嶺
 續き字熱海峠を越ゆる輕井澤、鬢ノ澤、平井を経て三島驛まで里程凡そ五
 里(駕籠賃一圓二十錢)輕井澤より向ふは下り道なるを以て人力車を通ず
 其の街道より南へ十町程も入込みたる田方郡丹那村に鷓鴣石あり音聲此
 石に響くと宛然鷓鴣の人語を眞似るに似たるが故に名とす此街道は縣道
 なるを以て道幅の廣きと十國峠道の比にあらず絶頂よりの遠望も亦敢て
 十國峠に譲らず其景色眞に畫圖の如し、又修善寺へ赴くには平井より岐
 れて南に入る其の里程熱海より八里餘なり其他の里程を記せば伊東まで
 五里、網代港まで二里、湯川原まで三里十七町、吉濱まで二里にして伊東、
 網代へは舟にて到るべし

● 修善寺温泉

修善寺温泉は静岡縣伊豆國君澤郡修善寺村に在り此地は稍や偏鄙なる故

にや其の繁昌は熱海などに及ぶべくもあらず謂はゞ田舎の一村落到過ざ
 れども其の閑静なる處に直打あり諸物價宿賃等も亦随つて高からねば數
 日間逗留して靜かに病ひを養ひ且暑さを避るには修善寺も亦適當の地な
 るべし世間繁昌なる温泉には靈泉わく處絃歌沸き其遊び往々奢侈にのみ
 傾くやに聞きしが斯ては養生の場所は命を縮むるの場所となり遊山避暑
 の主意には違へり若し又金に厭ひなく只涼みをのみ取らんとならば東京
 沙埃の眞中に在りても氷の山築くとも難からねど其の入費を安揚りに
 して寛々精神を養ふを避暑の通人ども云ふべき乎偕修善寺には温泉場八
 ツあり之を獨鈷の湯、河原湯、眞湯、杉の湯、箱湯、石湯、珍の湯(又兒の湯
 とも云)瀧の湯と云ひて孰れも共同浴室なり此外猶ほ日本鑛泉誌に載る
 所の温泉には花の湯(柏屋亭内にあり)龍の湯(淺羽亭内)岩の湯(中田屋
 亭内)菖蒲の湯(新井亭内)保生湯(野田屋亭内)菊園靈泉(菊屋亭内)明治
 靈泉(衛生館館内)等ありて孰れも温泉宿の内湯となり居れり今ま當所へ

の道順を記せば熱海温泉場より里程八里餘其の中間に熱海峠あれども人力車は二人曳を通じ駕輿も亦往復す（此の人力及び駕輿賃片道二圓七八十錢）沼津停車場より里程六里馬車人力車を通ず沼津よりの人力賃は片道四十錢、馬車なれば三十錢以内なれども乗合なき時は待合すの不便あり又佐野停車場よりも里程六里餘にて矢張車を通ずれども沼津道の方平坦にて人力車の走り方も輕ければ東京より赴く人も沼津にて下車する方便利なるべし、修善寺の地形を云へば此村は三面山を環らし東の方のみ稍や平坦なり土地は海面より高きと五十餘尺、村の中央を流るゝ小川を桂川といひ温泉は多く川の中央又は其岸より涌出せり獨鈷湯の如きも矢張り此川のたゞ中より湧出するものなれど温度頗る熱くして其儘にては浴し難ければ浴槽を分ちて之によき程の水をうめ適宜の加減を爲して浴を取らしむ其の成分は左の如し

格魯兒那篤留母

〇、五二〇八

格魯兒加留母

〇、〇一九五

硫酸那篤留母

〇、四一五一

炭酸那篤留母

〇、〇二八三

炭酸加爾斐母

〇、〇八七七

硫酸

〇、〇五六五

葡萄酸加留母

痕 跡

炭酸亞酸化滿庵

痕 跡

固形分合計

一、二一八〇瓦

此他の各温泉も其成分は孰れも大同小異なれば大方は此表に依りて推し給へ又主治効能は胃加答兒、腸加答兒、肺炎、子宮病、痛風、疝氣、寸白、疥癬、瘡毒等に宜しと云へり偕又前にも述べし如く此地は未だ充分に開けざれば村民孰れも質朴にして狡猾とは如何なるものか夫さへも知らぬ風あり殊に宿屋は能く親切を盡し假にも客の人品を見て錢を食らんとするが如き事なし温泉宿屋は

- 一等温泉宿 野田修治(菊屋) 相原平八(養氣館) 淺羽保右衛門(對碧樓)
- 二等温泉宿 大川彦八郎(衛生館) 湯川廣吉(柳屋) 後藤龜之助(江戸屋)
- 三等温泉宿 野田八郎平(野田屋) 三須重吉(柏屋) 野田重嗣(水月樓)

の十軒外に中田屋、橋本屋、宇佐美屋等の宿屋都合二十五軒あり宿泊料は

菊屋、養氣館等にて一日上等五十錢、中等二十五錢、下等二十錢を定め、す然れど客の望みに依りては何品にても取寄せて其膳に上すなど田舎には似合しからぬ便利あり又温泉は別に入浴料を要せず唯だ浴客より一日一厘より六厘までの錢を集め置き之を浴室の修繕費に充るまでなり、郵便は毎日二回の集配あれども電信は三島(五里)まで行かざれば通せず又例の通り此地より近村への里程を擧ぐれば三津へ三里、粟島へ三里七町、吉奈温泉へ三里、蛭ヶ小島へ三里、堀越御所へ三里なり其他修善寺村近傍に名所舊跡少なからず即ち左の如し

修善寺 當村内にありて大同年間僧空海の開基なりと云ひ傳ふ建久三年梶原景時の爲に襲はれて範頼茲に自殺し其後ち北條時政も亦頼家を此寺に幽閉し終に浴室に於て頼家を暗殺せり其地に至りて歴史を按ずるも亦一興なるべし此寺に什物夥多あり就中尼將軍の跋、高麗版の法華經一卷、北條早雲、豊太閤の御教書等は一覽の價あり

正覺院 修善寺を距る一里強りの山間に在り嶮しき崖を劈りて洞窟となし茲に一字を建立せしものにして昔し大同年間弘法大師の降魔場なりしと云へり三伏の日にも寺に登れば涼風軽く袂を動かし午睡には蒲團を被はざれば風を引く程なりとて夏時修善寺に遊ぶ者は必ず此寺に登りて汗を入るゝを常とすると云ふ

旭瀧 田方郡大平村に在り水源を池の洞に發し狩野川に入る高さ三十餘丈幅一丈五尺、淨廉の瀧といへるも亦同郡湯ヶ島村にあり幅は旭瀧に一倍なれども高さは其の三分一にたも及ばず其他月見ヶ岡、頼家の墓、範頼の碑、御庵洞、日枝の社、蝦蟇ヶ淵、稚兒の瀧、虎溪橋、大白山、挂谷等枚舉するに追あらず

富士山

此の日本第一の高山は海面を抽くと壹萬二千四百尺四時雪を戴き絶頂に到れば盛夏も猶ほ嚴冬の如し故に此靈山に遊ばんとする者は毎年舊曆六

月二日の山開きより向ふ四五日間即ち雪の稍や解たる時を見て登山するを常とす其登り口は大宮口(表口)須山口(南口)須走口(東口)吉田口(北口)の外に猶ほ東表口、人穴口の二ヶ所あり關西より來る者は重に大宮口より登り甲斐より來る者は吉田口より登り關東より赴く者は須走口、東表口の二ヶ所よりす茲には先づ東表口新道の案内を爲さんに新橋より流車にて御殿山停車場に到れば同村に旅店近江屋、富士屋あり又富士山本宮出張所野木三平治氏に就て登山の案内を請へば氏は懇切に登山一切の事を周旋す東表口新道は即ち野木三平治、伴野佐吉外數名の有志が去る明治十六年自費を以て新たに開鑿せしものにして御殿場より一合目まで三里八町の間一直線を爲し而も傾斜急ならず其面平坦にして自由馬車人力車を通ず、御殿場を離る、道の左傍に五社淺間神社あり是を表口本社と稱す御殿場より車を驅りて往くと二里弱にして八大龍王の瀧あり登山者は此水を以て身體を洗滌するを常とす夫より瀧河原、馬返

しを経て中宮淺間神社に達し往くと數町にして本山の一合目に到る、此間の道路は前にも記す如く道嶮しからず樹木鬱鬱として通常の山道を辿るに異ならざれども一合目より上は草木稀疎にして砂愈々深く往て四合目以上に到れば終に一本の樹木をも見ず地は焦石と小砂とを混じて足動すれば迂り易く歩行稍や困難なり一合目より頂上まで凡る五里、途中十町乃至二十町毎に休泊所ありて之を麓の方より一合目二合目と算へ十合目に到りて頂上に達す四合目以上の休泊所は皆石にて疊み以て暴風強雨を禦ぐ故に石室の名あり又七合八合の處に登りて遙かに山麓を望めば雲は脚下より起りて冷氣肌を襲ひ麓の方に驟雨等ある時は雷鳴を足下に聞き雨は下より上に降るとあり是は麓より吹起る風力に依りて雨のシメキを受くるに過ぎずして雨の逆まに降るにはあらず、登山者に依りては七八合目より登るに隨ひ俗に山中りと稱して酒に酔ひたるが如くなりて物皆な黄色に見ゆる事あり或は呼吸せはしくして一二分間毎に溜息を吐

くとあり是れ空気の稀薄なるが故なり、既にして頂上に達すれば茲に國幣中社富士山本宮の奥ノ宮ありて傍らに講中信徒の籠所二軒建てり又傍らに長香朝臣の選める富士山記の碑あり、本宮より絶頂の外輪を一周する五十町、同く内輪を一周する三十六町之を俗に八千九百廻りと云ふ其の中央に舊噴火坑あり深さ數丈時として其底に水を湛へ周圍は皆突兀たる岩石より成り其最も高きものを劍ヶ峯と云ふ劍ヶ峯は頂上の平地より高きと四十丈其の岩質堅剛以て劍の刀に代ふべし故に此名あり其他獅子岩、雷鳴嶽、鋸嶽、馬ノ脊山の小峯東西に起伏し又金明水、銀明水等の井戸あり、絶頂白山より遠望すれば凡そ近隣十三州の高山は皆な眼下に瞰望し甲斐の八湖、相摸の蘆ノ湖等は宛然小池に異ならず晴天には遙かに近江の琵琶湖をも望み得べしと雖も雲烟常に糢糊として眼界數百里の遠きに達するの日は甚だ稀なり、降りには草鞋を三重に穿ち唇に壘を結付けて七合目より一合目まで一直線に下り下るを常とし此道を走道といふ

頂上より一合目まで僅かに二時間にして達し別に危険の恐れなし、今登山者の便利を謀り先づ東京出發の時刻より記さんに汽車にて午後九時五十分新橋を發すれば翌午前一時二十二分御殿場停車場に着す（下等汽車賃七十一錢）是より先同所の宿屋又は野木氏へ宛て先觸れの端書を出し豫て停車場へ出迎への者を出させ置くやうに爲さば着後直ちに人力車或は案内者等を雇ふに便利なるべし茲にて辨當などを用意し二時より人力車にて御殿場を發すれば四時には一合目に着し二合目に差掛る頃は旭日の東海より昇るを拜し遅くも午後三時には頂上に達するを得、茲にて一時間休足し三時より絶頂を降るとすれば歸途は僅かに二時間にして一合目に着し七時半には御殿場に歸り得るを以て八時廿八分の汽車にて同所を發すれば夜の十一時五十分新橋に着し即ち前後より二十六時間にして一回の旅を終るものとす去れど婦人等にして長途の疲れを厭ふ者は午後三時卅五分新橋を發して其夜は御殿場に泊し翌朝未明に登山して日

中に御殿場へ歸り復た同所に宿泊せし後ち翌朝八時十二分の汽車に乗りて正午新橋に着するも可なり、御殿場旅店の宿泊料は一夜上等二十五錢、中等二十錢、辨當六錢より十錢迄、剛方案内料は日歸り四十錢、泊掛け五十錢、御殿場より馬返しまで人力車四十錢、乗馬二十五錢、山駕籠は頂上までの往復八圓、一合目宿泊料は二十錢夫より登るに隨ひ一合目毎に一錢を増し九合目に至れば二十九錢を拂ふを常とす

箱根より富士山に登らんとするには宮ノ下より木賀宮城野、仙石原を経て乙女峠を越ぬ御殿場に出るの道あり大山よりは山道三里を歩みて松田停車場に出るを便利とす。又關西より登山する者の爲めに表口の案内を爲さば鈴川停車場より大宮まで里程三里の間は鐵道馬車の便あり(賃金十錢)大宮町には國幣中社淺間神社の本社あり祭る所木花咲夜毘賣の命にして合殿に通々杵の命、大山祇の命鎮座せり傳へて云ふ此宮神代より此地にありしを垂仁天皇の三月社殿を富士郡山宮村に創建し平城天皇の

大同三年坂上の田村磨勅を奉じて復た本社を現今の地に移すと、大宮には四五軒の旅店ありて剛力を雇ひ辨當を整ふる等萬事登山者の周旋を爲すと猶ほ御殿場の旅舎に於るが如し茲より本宮の後を右折し二股、栗倉を経て行くと一里餘にして村山に到る是より草野二里、木立二里、砂山二里にして絶頂に達し其途中一合目毎に休泊所あり村山より絶頂まで五里二十六町、九合目より絶頂に至る十町の間を胸突と云ひ道頓る險峻漸く匍匐して登ると云ふ其の途中の景色は概ね東表口に異ならざるを以て茲には贅せず

白絲の瀧 富嶽の周回名所古跡少からず今其の一二を擧ぐれば白絲の瀧は富士郡上村出村と白絲村との間にありて直下八丈幅四十二丈雌瀧、雄瀧の名ありて水の迸しり落ると宛然管より噴出するが如く二見數十條の白絲を懸けたるかど疑はる故に此名あり瀧の近傍に藤花、躑躅、楓葉ありて春より秋の間眺望殊に佳なり、源の頼朝が「白絲をあわ緒によりて結べ

とも瀧つ流は手にもたまらず」と詠みしは即ち此瀑布の事なり
 胎内竇は吉田口の途中甲斐國都留郡福地村字鈴原といふ處にあり此穴
 に入る者は膝頭に草鞋を着け燭を照して匍匐しつゝ入るを常とす入口二
 間の間は肋と稱し其岩の形筋骨に似たり漸く進みて臍石の邊りに到れば
 窟愈々狭く腹帯に到りて全く手足を前後に長く延ばして僅かに潜り抜け
 るを得るなり其の盡處に達すれば穴漸く廣く玆より復た元の道を順次に
 出で来る間一挺の蠟燭を點じ盡すに至らず又富士道者は此窟を無戸室と
 稱し此の穴に入りたる者の禱を以て懷胎婦人の腹帯に用ふれば安産する
 と疑ひなしと言傳ふ
 曾我兄弟の墓 富士郡井上出村大字久澤の福泉寺地内にあり墓は二基と
 もに五輪の塔にして高さ各二三尺五寸、幅一尺四寸、文字は磨滅して讀易
 からず本院藏する所の位碑には「高崇院殿峰巖良雪大禪定門、曾我十
 郎祐成、五月廿八日卒、行年二十二歳」應慶院殿士山良富士居士、曾我五

郎時宗、同月廿九日卒、行年二十歳」とあり又其の近傍に曾我八幡の社、虎
 御前の社あり

●佐野瀑園

佐野瀑園は佐野停車場を距る僅かに十二町、湯山某氏の所有にして園内
 五條の瀑布あり雪解の瀧は高さ四十四尺幅十五尺、富士見瀧は高さ同上
 幅十二尺、月見瀧は高さ四十尺幅八尺、銚子の瀧は高さ三十三尺幅七尺、
 挾衣の瀧は高さ同上幅十五尺皆山崖より相並ひて落下す、瀑布の傍らに
 藁葺の旅館を設く之を五龍館と名づけ客をして随意に宿泊せしむ其他園
 内に小亭を設け瀧の水は溢れて池となり一碧鏡の如く池中鯉あり鮒あり
 以て釣を垂るくに宜しく又小舟を泛ぶるに宜し、園より凡る二十町にし
 て景ヶ島あり土地小高くして眺望頗る快濶なるを以て此名あり茲に小堂
 あり景島山の三字の額は佐文山の書する所なれども堂中祭る所未だ詳ら
 かならず又園主は此邊二千町歩の山林即ち富士の裾野を圍ひ込みて特別

遊獵地となしたれば銃を肩にして古松老杉の間を逍遙し兎、小鳥の類を獵するも亦自由なり、館内別に一大浴室の設けあり栓を捻れば湯瀧滾々として飛下するの仕掛もありて夏季暑を此地に避くる者年々多きを加ふと云ふ又館の近傍に佐野八景あり乃ち景ヶ島の秋月、屏風岩の鴛鴦、千福の青田、築橋の流螢、桃園の櫻花、平松の夜雨、定輪寺の晚鐘、古城の暮雪等にして朝夕散策を試むるに宜し、同館の宿泊料は一日四十錢以上、七十五錢以下にして佐野停車場よりの人力車賃は八錢の定めなり

●牛臥山麓海水浴

漁車にて佐野を發すれば僅か二十分にして沼津に達す（新橋より沼津まで下等漁車賃八十六錢）停車場より南行し更に右に折れて湊橋（狩野川に架す）を渡り往くと十數町にして牛臥山麓海水浴場に到る（沼津停車場より牛臥まで二十五町、人力車賃十一錢）海水浴場は三島驛世古六太夫氏の支店にして三島館と號し牛臥山麓の海濱數町の間を拓き茲に數棟の旅

館を建築せしものにして館毎に浴室、厨の設けあり此地は前に内浦を擁し伊豆の大瀬崎と駿河の三保ヶ崎とは左右より斗出して内海を包み宛然一小湖水の觀を爲すのみならず岸頭には高島岩其他の奇巖突兀として起伏し東には御料林の松幾百本となく生茂り起ちて舞ふが如きもの伏して眠るが如きものありて其様稍や舞子ノ濱の趣きを存し後には牛臥山の岸頭に蟠まれるありて浴後散步逍遙するに宜し既に斯の如く眺望に富みたる上に其の海邊は浪靜かにして水清ければ夏日水浴を取るには最も適當の地なり、宜なる哉近來此地に貴顯の別荘を設けると年一年より多く御料林より志下の間には川村、西郷兩伯の別荘あり牛臥山の切通しを経て其北麓に下れば茲には大山伯の別業あり其他華族某々の諸氏等既に此邊に敷地を購ひたる者一二にして足らず夏日浴客の雜沓するも亦此地の風景他に勝りたるが故なるべし、三島館一日の宿泊料は凡そ五十錢を通常とし魚肉は毎日此の内浦にて獲たるものを料理するを以て最も新鮮にし

て味ひ殊に佳なり。俗例に依り近傍一二の遊覽地を擧ぐれば

我入道海水浴 是牛臥山の北三町の海濱にありて此地の海水浴旅館を松風館と云ふ館の一方は狩野川に瀕し其の一方は駿河の内海を見晴し前には不動岩屹然として峙ち後には小高き山を負ひて山上には八幡神社其の中腹に不動堂あり手を翳して濱邊より望めば西北に當りて近く田子の浦千本濱あり遠くは三保の松原、久能山稍や北に當りて富士山あり更に南に向へば海上三里餘を隔て、大瀬崎、眞城山は一眸の中に集まり來り其の風色眞に愛すべし松風館の宿料は並一日廿五錢、中等、上等は客の好みに應ず又沼津停車場より此地まで人力車賃九錢、沼津本町裏より小舟にて下るも亦可なり

桃郷の桃林 是三島館の東南四五町の處にあり村内民家五六十戸皆農と漁とを以て業とし每家其庭前又は麥隴の中に數十株の桃樹を培ひ夏日其實を採りて之を饗ぎ以て半年の生計に充つと云ふ民家は皆一様に竹垣を

結回らし宛から東京根岸の舊景を觀るが如し、花候に至れば紅雲十里眞に桃郷の名に背かず遠近より來りて花を賞する者亦多し、桃林中割烹店ありて桃中軒といふ固より田舎の小料理屋に過ぎざれども春季は花の爲めに客群集し稍や繁昌を極むと云ふ

● 戸田海水浴

伊豆國君澤郡戸田港は沼津を距る南の方日、そ四里半、灣は入口狹くして囊の如く潮水清くして最も海水浴に適す同港御濱と稱する所に海水浴旅館保養館あり御濱は戸田の港灣に斗出せる一少半島にして松柏林を爲し砂濱には怪石連なり保養館の樓上に登れば一時に灣の内外を望み得べくして其の絶景言はん方なく殊に富嶽は眞北に方りて其裾は遠く三保の松原に聯なり東には伊豆の連峯を仰ぎ西南には御前崎を水天髣髴の間に望むなど山海の眺め兩なから備はり畫圖も猶ほ及ばざる趣味あり、保養館は昨年五月の開業にして今春更に客室を増築し宏壯にして且清潔其の宿

料の如きも亦極めて廉なり内海に向へる方には大なる生洲を設け鯛、鰯
 其他の魚族を游泳せしめ外海の方には常の二三艘の漁舟を備へ浴客をし
 て随意に漕がしめ又船頭を附けて釣魚の慰みを爲さしむ沼津より下田通
 ひの汽船は日々に三回兩處の間を往復し其の都度戸田へ寄港するを以て
 東京より赴かんとする人は沼津にて汽車を下り同所より汽船の便に據る
 を順序とし(汽船賃十二錢)沼津停車場前旅店山本にては保養館行き浴客
 の案内を爲す

● 清見瀉海水浴

興津停車場より西へ七町(人力車賃五錢)清見寺前に海水浴場あり清見寺
 は開基創建ともに詳らかならざれども足利尊氏之を再建し嘉吉二年今川
 氏親僧明元を招きて中興開山と爲せしと言傳へ此地にては有名の寺院な
 り、旅館は海水樓、一碧樓、身延樓、佐野屋等あり海濱には家康公の御座岩
 疊岩など稱ふる種々の岩石横はり其岩のはざま波穏かなる處を水浴場に

宛てたり、海邊の景色は各所とも稍や同じ趣きを存し長き逗留の間には
 眺めに飽くものなれども此地は南に三保の松原を望み東には海を隔て、
 伊豆の諸山突出し三保と相對して海を包み西には江尻、清水港、龍華寺、
 久能山、賤機山を觀るべく北には富士、愛鷹の二峯雲の間に聳ゆるありて
 日々其の風色を新にするの思ひあり海水樓の敷地は清見關の古跡、今は
 御料地の隣りにして樓上樓下數十の客室を備ふるも近頃浴客の數を増し
 夏の盛りには客室皆な塞がる事ありといふ、同樓は宿料の一週間一等七
 圓、二等五圓、三等三圓五十錢、四等二圓五十錢、料理は好みに應じて調進
 するが中にも名物の興津鯛味ひ殊に旨し

● 久能山 (久能神社)

久能山は静岡縣有渡郡の海濱にあり山甚だ高からざれども眺望快濶土
 地幽靜なるを以て夏季此山に登りて暑を避くる者多し、山は東海鐵道の
 江尻停車場を距る西南一里餘、東海道の上原より左折すれば直ちに上り

阪に差掛り馬走を経て十數町にして頂きに達す、山上に久能神社あり縣社にして徳川家康を祭る元和三年二月の創建にして社殿は壯嚴ならずと雖も其の結構見るべきもの多し手を翳して山上より遠望すれば南は渺々たる太平洋に面し東北には駿河灣を隔て、富嶽の屹然雲端に聳ゆるを望み清見瀉、清水港及び三保の松原は其眼下にありて自から遠近の景を補ひ汽車の烟を吐いて駈る様、和船の帆を揚げて駛る狀、締視するに違あらず眞に山海風光の勝地たり、山上旅亭なし唯二三の茶亭あるのみ又山を下りて清水に出づれば茲より三保村に到る便船あり海上僅かに十八町、岬に御穂神社ありて三保津姫を祭る此邊松樹枝を交へて翠碧滴らんとし風景殊に宜し所謂三保の松原即ち是なり

● 焼津海水浴

静岡縣益津郡焼津の地たる東駿河灣に面して遙かに伊豆と相對し東北には愛鷹山、高草山を望みて富士の嶺は其上に聳ゆる南には渺茫たる遠江洋

を擁し四望皆佳景ならざるは無し焼津は静岡を距る西南三里餘、東京よりは實に五十一里半を隔つ（新橋より焼津停車場までの下等汽車賃壹圓廿八錢）此地に近年新築せし海水浴旅店秋月樓あり樓は停車場を距る僅かに五町にして館内冷浴温浴の設けあり同家宿泊料は一夜上等三十五錢中等二十五錢、下等十六錢なりと云ふ又村内に焼津神社あり郷社にして日本武尊を祭る古へ景行天皇の四拾年日本武尊東征の際賊欺いて原野に火を放ち尊を害せんと謀りしに尊は叢雲の劔を以て火を拂ひ終に賊を芟除し給ふ、焼津は其の舊跡にして今猶は近傍に草薙村の名を存す

● 志太鑛泉

藤枝停車場を距る二十餘町の處に此鑛泉場あり停車場内に旅亭潮生館の出張店あるを以て茲より同店の案内者に誘はれて本店に至るを善しとす、此道は藤枝驛を離るれば直ちに爪先き上りの阪道となれども新道にして其間も遠からねば緩歩するには適當の運動なり若し人力車を雇ふと

も其賃錢は九錢の上に出でず旅店潮生館即ち鑛泉の湧出る處は駿州志太郡青島村に屬し小名を鹽湯ヶ谷と云ふ新開地なるが故に潮生館の外に人家僅々十戸ばかり多くは農を以て業とす土地は四面縁樹翠草を環らし田子ノ浦、三保の松原等は樹木の間に隱見し樓上よりは富嶽を簷下に望みて風光亦た愛すべき所あり、鑛泉は多少の硫氣を含み其味少しく鹹し其の効能は腺病、癩癩、皮膚病、癩麻質斯、胃病、子宮病、脚氣等に宜し又同館庭内には二三小亭の外に大弓店あり楊弓店あり夜に至れば庭園は素より客室浴場等へ悉く天然瓦斯を點火するなど頗る奇觀なり潮生館定めめの宿料は一日二十五錢以上、入浴料は一日三錢とす又此地より南へ七八町にして神代の塚、人穴、烏帽子岩等の名所あり

● 五和村潮鑛泉

東海鐵道の金谷車停車場より北二十五六町(人力車賃十五錢)遠州榛原郡五和村に潮鑛泉あり土地は後に丘陵を負ひ前に田圃を見晴し眺望稍や爽快

鑛泉は寶藏寺の傍らより湧出するものを樋にて浴槽に導き火を焚きて煖むるものにして多量の鹽酸那篤留母(食鹽)と炭酸曹達とを含み腺病、癩癩、脚氣、癩麻質斯、腸痛、胃弱等に効能ありとて近來浴客多きを加へ稍や繁昌の様あり旅館は潮月館一軒、外に湯元の寺にて營業する者一軒あれども潮月館の手廣なるには及ばず同館宿泊料は一日並二十錢以上入浴料は一日三錢同じく一週間分二十錢なりと

● 秋葉山 (秋葉神社)

秋葉山は遠州周智郡の北部天龍川の東に位し不動、龍頭等の山脈に連なれる峻嶺にして山頂に秋葉神社あり軻遇突智の神を祭る、東京より此地に到らんとする者は掛川停車場にて瀛車を下り夫より人力車を驅りて森町に至るべし(人力車賃二十五錢)其の里程は掛川より森町まで三里、森町より三倉まで二里、三倉より阪下まで三里半、阪下より秋葉神社まで立登り五十町、都合九里廿四町なれども森町以北は一人曳人力車を通せ

されば登山者は駕籠を雇ふか若くは徒歩せざる可からず、其の途中屢々
 溪流を渡り又峻阪を攀ぢるなど道嶮しくして登り易からず氣田川の舟渡
 を渡り行くと數町犬居宿に達し茲より右折して阪下村の人家を過ぐれば
 道の中央に大華表あり之を一の鳥居といふ、秋葉神社は元と大登山秋葉
 寺と號し養老年中行基大師の創建、天正年間光幡和尚の中興せし禪宗の
 巨刹にして秋葉の三尺坊とて世に名高かりしが明治六年寺を廢して三尺
 坊を可睡齋に移し今は縣社に列せらる、舊記を按ずるに當山鎮守の神は
 延喜式内小國神社と號し後ち之を秋葉權現と稱す一山護神として三尺坊
 を同社に祀る享祿天文の頃甲州の武田勢此地に押寄せ來りし時寺は兵燹
 の爲めに燒失したるも秋葉神社と觀音堂とは棟上より白水迸しり出で、
 火災を免がれたるは是れ偏へに神威の顯著なるが爲めなりと言傳へ今に
 火伏せの神と崇め目下猶ほ秋葉講と稱ふる者諸國に多く毎歲十一月の大
 祭には賽人蟻の如く集まり來り境内頗ぶる雜沓を極む、社地廣濶にして

老杉其圍りに繁茂し社殿また頗る壯麗を極め賽路の兩側には數百基の燈
 籠、社傍には、寶庫、神樂殿等あり、秋葉より鳳來寺に廻るには戸倉の岸よ
 り天龍川の舟渡を渡り石打熊、巢山、大野等を経て寒狹川を越えて同寺
 に達す其の里程八里半、途中大森山の峠ありて其の前後峻阪打續き嶮岨
 にして人力車を通せず僅かに駕輿と小荷駄馬とを通ず、森町より阪下ま
 での駕輿賃一圓五十錢、同所より鳳來寺までの駕輿賃も亦一圓六七十錢
 なり又秋葉神社前には葉倉屋、三河屋、阪下には高木屋、椀屋、萬屋等數軒
 の旅店ありて宿料は一泊廿五錢なり

● 蒲 郡 海 水 浴

三河國寶飯郡西部の海濱、東海鐵道の蒲郡停車場より行くと僅か數町の
 處に近來海水浴場の設けあり此地三方は遠く山を遶らし唯だ南の一方の
 み開けて前に渥美灣を擁し竹島、大島、小島等は手に取る如く點々海面に
 散在し水清く浪靜かにして實に三河第一の好避暑地なり旅館は健碧館

海月樓、海老屋、角市等四五軒あるが中に健碧館を最とす去れと閑靜を好む客は近傍寺院の客殿を借受けて逗留するも可なり、健碧館は俱樂部やうの組織なれども別に通常浴客の宿泊を許し其の宿料は一日二拾五錢以上五拾錢以下にして料理等も亦客の好のみに應ずと云ふ

● 鳳來寺山 (鳳來寺)

鳳來寺山は豊橋停車場の東北九里拾五町ばかり設樂郡門谷村に在り、先づ豊橋停車場より北一里半豊川に至れば同處に豊川稻荷あり元は妙巖寺に屬せしが今は叱枳尼天と稱す、又同地より北一里弱一ノ宮村に至れば砥鹿神社あり國幣中社にして大己貴尊を祭れり、皆鳳來寺道の途中に方るを以て參詣する者多し一の宮より道は豊川の左岸に沿ひ長山、新城を経て瀧川の流れを涉り追分を過ぎて門谷に達す是れ其の山麓なり茲より橋を渡り樓門に入りて石階を躋ると九町、一町毎に石標あり且道の左右には老杉鬱鬱として日光を遮り僧房其間に點在す、鳳來寺は天台、眞言

の二宗に分かれ堂宇巍然として聳え其の結構また壯觀を極む、寺は大寶年間利修仙人の開基にして樂師佛を本尊とし其他開山堂、毘沙門堂等あり、寺地は前を石垣を以て積上げ後には考杉鬱鬱たる山を負ひ眺望また佳絶、其麓門谷村には柏屋、新江戸屋、布袋屋等數軒の旅亭あり又豊橋より此地まで二人曳人力車賃は二圓なりと云ふ (鳳來寺より秋葉山への道案内は前項秋葉山の部に記載せり)

● 大野海水浴

大野海水浴場は尾張國知多郡の西岸大野町に在り汽車の便に由れば大府にて武豊線に乗替へ半田停車場より汽車を下り人力車に二十錢を賃して三里の道を走らすれば一時半計にして大野に着す、去れと海路よりせんとする者は熱田より小蒸漁船に乗らば一時間にして大野海濱に着すべし熱田より大野まで海上五里毎日二回汽船の出帆するありて其の賃金は上等三十錢、中等二十錢、下等十三錢なり、大野町は西に伊勢灣を擁して遙

に四日市と相對し南は陶器の製造を以て名ある常滑町と相距る僅に一里北は日長、新知、横須賀等を経て縣道は東海鐵道の新高驛に連なり交通便利の一小都邑にして戸數四百餘戸、人口二千餘人を有す、此地の海水浴旅館は海濱館、恩波樓の二軒を最とし其他和泉屋、信濃屋、兩角、石川屋、疊屋、加見屋、越後屋の旅亭あり、海濱館は大野川河口の右岸海に斗出せる地をトして三層の高樓を建設し其の海濱を以て水浴場に充て館内別に温泉浴の設けあり、同館宿料は上等一日五十錢、中等廿五錢、下等十錢にして別荘の貸席料は一室一週間下等廿五錢より上等一圓七十五錢までの區別あり魚貝は皆新鮮にして其價は殊に廉なるを以て此地宿屋の宿泊料は他の温泉浴場の如くまた甚だ高貴ならず、傳へて言ふ今を距る五百五十餘年前即ち光嚴天皇の御宇此地の海水に浴して病を治したる者あり是れ我邦海水浴の嚆矢なるへし云々（藥師如來緣起の要を摘む）降つて去る明治十四年此地海音寺の住職磯谷某土地の有志と謀りて水浴場を開き爾後

醫學士を聘して潮水の試験を請ひしに水質清長にして氣管支病、神經病、皮膚病、胃弱等の患者に効驗あるとを證明したるを以て其名俄かに世に著はれ其の繁昌は相州大磯と東西相匹敵するに至れりと云ふ、町内に裁判所出張所、警察署、郵便電信局、學校、汽船問屋、劇場、寄席等あり料理屋には金谷園、茶松あり海濱に至れば眼界忽ち開けて西南に志州鳥羽の岬及び朝熊、布山の山々を望み西北には桑名町を隔て、養老の山脈を仰ぎ前面の伊勢の海濱静かにして白帆風に漂ひ夜に入れば漁火點々波間に明滅するなど亦一個の好風景なり、此地より汽船は日々四日市に航海しまた和船は數回熱田と師崎の間を往復す四日市通ひの汽船賃は中等二十五錢、下等十五錢なり

● 師崎海水浴

東海々濱處として海水浴場の設けあらざるは無し唯だ地僻にして往復不便利なるが爲めに其名世に顯はれざるも多かるべき乎師崎の如きも亦其

一なり、師崎は尾州知多郡南端の一港灣にして前面の海上には無数の小島點綴し三河の伊良湖崎は左より來り志摩の岬角は右より斗出して一海峡を爲し風光明媚の地なれども其地都會を距る遠きが故に名古屋人すら此地に來り浴する者甚だ稀なりと云ふ、海水浴旅館は養春館と云ひ海濱に二層樓を新築し海水浪穩かにして汚物なき處を以て游泳場に充て館内別に温浴の設けあり、此地武豊停車場を距る海陸共に四里半先づ人力車を僦ひて河和村に到り同村より仕立舟にて師崎港に到るを善しとす武豊より河和迄の人力賃十二錢、河和よりの舟賃は三十錢内外なり又豊橋より此地に渡らんとするには同所より伊勢の湊に往復する汽船に乗らば海上十二里、二時間にして師崎港に着すべし(汽船賃二十錢)又養春館には定めぬ宿泊料なしと雖も凡そ一日二十錢以上五十錢迄を限りとす

●佐久島海水浴

佐久島は三河國幡豆郡の南端陸地を離るゝ二里餘の沖合にある小島にし

て周圍一里廿五町戸數三百餘戸、豊橋よりは海路凡そ十一里師崎港を距る甚だ遠からず、海水浴場は島の南面天女島の近傍を最も好しとし此邊の岸には大いなる礁いくつとなく並び此礁の中央に各々數十人を容るべき凹みありて其形も盪の如く日中に至れば潮水沸き返りて天然の潮湯となる又本島と天女島との間凡そ半町の處に太き綱を引渡し之に浴水を湛へたる浮舟の設けあり浴客は浮舟に乗りて綱にすがり力に任せて引く時は自在に此方より彼の岸に渡るを得べく其往復する間潮水に浴し傍ら運動を爲すとを得、此方法は故の陸軍軍醫監横井信之氏の考案になりし者なりと又旅亭は島中に四五軒あるが中にも先づ龜屋を以て一等とす其の宿料は一日凡そ二十錢嶋人は多く漁りをもて生業とするが故に鮮魚を得ると望みの儘なりと云ふ此地は斯の如く海水浴に適當の場所と云ひ殊には物價も低廉なれど往復稍や不便なるが爲めにや遠來の客甚はだ勘なく唯だ近傍の人々來り遊ぶを見るのみ

● 豊濱海水浴

豊濱は前記師崎の西三十町の處に在る一小港灣にして武豊停車場を距る陸路五里餘、熱田よりは海上十四里なり、陸路よりすれば武豊より布土、河和を経て豊丘に到り同所より師崎街道と岐れ右折して松戸の小山を越ゆれば一里餘にして豊濱に達す此地は人家二百戸ばかり多くは漁りを以て業とし旅店は大西屋、梅屋の二軒あり大西屋の宿料は一泊二十錢、一ヶ月滞在費は三圓五十錢以上にて海邊の眺望は師崎と異なるとなし、武豊よりの人力車賃は五十錢、熱田より往復する和船の賃金一人前凡ろ二十五錢順風ならば半日にして達するを得べし

● 湯ノ山温泉

旅客は武豊線より再び東海鐵道の幹線に立戻り名古屋の方に進まんとするに先だち其の岐道に於て猶ほ二三の好避暑地あるを念る可からず好避暑地とは何れぞ湯ノ山温泉、二見海水浴等即ち是なり去れば茲より旅客

を特に伊勢路の方に導かんに先づ熱田停車場より瀛車を下り海岸の方に歩めば字神戸町に岡田屋、桔梗屋、紀伊國屋、伊勢屋、大森升屋等數軒の宿屋ありて皆瀛車瀛船乗客の送迎及び荷物回送の業を兼ね、此宿屋によりて解を頼み一里の遠淺を涉りて四日市通ひの瀛船に乗れば瀛笛一聲一時半にして四日市に着すべし(熱田四日市間瀛船賃は上等四十錢、中等廿五錢、下等十五錢)同所より西北三里十二町菰野村まで人力車を雇ひ(人力車賃二十錢)夫より徒歩一里廿四町の山道(駕籠賃は三十五錢)を登れば即ち湯ノ山温泉場なり

湯ノ山温泉 は伊勢國三重郡の西隅御在所嶽の麓、三岳川の上流に在り海面を抽く三百十七米突地は三面に山を負ひ東方のみ開て遠く尾參の平原を望み土地高燥空氣清涼、寒暖計は冬季卅度以下に降らず夏季は八十五六度の上に出ず鑛泉は微温泉にして之を沸し用ひ其質は硫酸を含ませる瓦斯狀亞兒加里性のもにして紀州并に伊豆修善寺の温泉と畧ぼ同質

慢性胃加答兒、消化不良の諸症、慢性腸加答兒、肝臟充血、氣管支加答兒、子宮病等に効驗あり、温泉宿は壽亭(瀬古きく)旭亭(伊藤傳右衛門)杉屋(武藤吉兵衛)の三軒にして温泉湧口は旭亭の後丘に在り各家ともに桶にて之を導き館内皆浴室の設けあり壽亭一日の宿料は晝食、湯錢ともに二十九錢、席料は八疊敷一週間二十七錢、六疊敷二十二錢五厘、四疊半十五錢の定めにて料理は客の好みに應じて調進す、温泉場の南に羅漢石あり人体に似たる巨巖並列し其形も羅漢の如く見ゆるが故に此名あり、溪流を隔て、北に青瀧ありて水は水晶ヶ嶽より落つ又此地より鮎川越の峠を攀ち鮎川を経て東海道の土山驛に出るの徑路あれども嶮惡にして歩行頗る困難なりとぞ

● 辛洲海水浴

津市にて四日市を發し龜山より岐れて津市に至り茲より二見ヶ浦に赴く途上一の海水浴場あり辛洲の浦と云ふ先づ津市より參宮街道を南に行く

と二里出雲川の北岸出雲村より、左折して濱邊に向へば廿五町にして矢野村に出づ乃ち辛洲浦の在る處なり、津市よりの人力車賃十五錢(參宮街道には乗合馬車往復す)海濱は白沙渺々として際なく松樹鬱蔚として其間に枝を交へ一帶の森林を爲し就中五百枝の松、龍燈の松、蛭子の松等最も名高く濱邊に出で、四方を眺むれば内海の布帆を始め尾濃の連山及び伊勢の神路、朝熊の峯巒皆な一眸の中に集まり來る春夏の交遊人來りて其景を賞する者多し、其の森林中に香良洲神社あり稚日女命を祀り御歳大神を合祀す欽明天皇の御宇之を創建し寛永年間津の城主藤堂氏社領を寄附して之を崇敬せりと云ふ毎歲七月十五日の祭日には本社より鳥を描ける扇を授くるの古例ありしが今は此事廢れり、又其傍らに海水浴旅館松阪屋あり二層の高樓を築きて此の畫圖の如き風色を檐の中に集め且館内に温浴場を設け客をして隨意に入浴せしむ、其の海濱は波穩かにして水泳に適し少しも危險の恐れ無し、同館の宿料は一泊廿五錢以上、客の望

みに依りては座敷のみを貸與す

●朝熊山 (朝熊神社)

伊勢に遊ぶ者は必ず太廟に參詣するを常として太廟に參詣する者は又必ず朝熊山に登るを常とす、朝熊山は宇治山田町の東二里弱、度會郡の東端伊勢志摩の州界に聳ゆる名山にして海面を抽く一千七百尺、其麓朝熊村まで人力車を通ず(宇治町より朝熊村まで人力車賃八錢、同所より山嶺まで登り三十町)頂きに登れば駿、遠、參、尾の諸山皆雙眸の中に入り其の絶景文す可からず、山頂に金剛證寺あり臨濟宗にして山城南禪寺に屬し欽明天皇の御宇僧曉臺此山を開き後ち推古天皇の十年聖德太子臨幸ありて佛舍利を納め給ふ聖武天皇も亦行幸ありて堂宇を再建せられ同時に方一里の地を賜ひて勅願所と定められたりと云ふ、堂宇壯麗にして數多の寺寶を藏し境内又名區多く其の山奥にある香海庵及び富士見臺の如き殊に著名なり、山麓朝熊村には旅店角屋久右衛門、豆腐屋幸十郎其他數軒と

名物萬金丹を饗ぐ家多し、又此地より二見ヶ浦までは里程一里十町ばかり人力車賃六錢なり

●二見ヶ浦海水浴

二見ヶ浦は伊勢第一の勝區にして山田町の東二里餘(人力車賃十錢)度會郡立石江村の西北海濱の名なり倭姫命世紀に曰く二見濱御船衛坐于時大若子命此國名何止問給不白久速雨二見浦止白支云と即ち是なり浦頭に立石崎あり眺望絶佳にして遠くは尾、參の翠巒近くは本州北部の諸山を雲烟縹渺の間に觀、岸邊には奇石怪岩起伏して風光明媚なり其の海岸數間を隔てて著名なる二ツ岩あり二岩の相距ると三間其形ち門闕の如く大なるもの高さ二十九尺周圍百三十尺餘、小なるもの高さ十二尺周圍三十尺俗に稱して注連掛岩と云ふ蓋し二岩には注連を張り其の注連朽れば之を新にし常に絶ゆるとなきが故なり、岩は色蒼黒にして木理紋を爲し退潮の時には歩いて渡るを得べく又近傍に鯨石、鼻岩、鷄冠岩、屏風岩等あり

皆其形ちに依りて名く、其の後山に傘の臺あり樹木鬱蒼たる處を伐開きて休憩所となし傘を開きたるが如き形の家根を設く故に此名あり、參宮の客常に此地に來遊するのみならず旭日を拜する此地を以て最とし毎歳一月一日の如きは未明より庶人群集し爲めに立錐の地をも餘さざる事あり、海濱に賓日館あり去る明治十四年時の縣令石井邦猷氏が有志と謀りて建設せし俱樂部やうの建物にして建坪百二十餘坪ばかり總二階建ちにして其の工費六千圓と云ふ以て構造の尋常ならざるを知るに足るべし、此館今は神園會に屬し普通の旅人を宿泊せしめず曾て 皇太后陛下が神宮御參拜の折御立寄り遊ばされ又昨年 皇太子殿下が御避暑の際御滞在遊ばされしは即ち此館なり、其の隣地に海水浴場清渚亭(若松徳平)あり家居手廣にして前は直ちに海濱浪打ち際に接し眺望快潤、空氣清良、潮水は澄みて玉の如く夏日の冷浴游泳に適す樓主徳平風流の志ざしありて浴客中文學書畫に長じたる者と見れば必ず染筆揮毫を請ひ其の書畫

類を貯ふる數百枚に及ぶと云ふ、同家の宿料は一日上等五十錢、中等三十五錢、並二十五錢、魚類は新鮮にして且頗る佳味なり

● 日和山

二見ヶ浦より松下、堅神を経て志州鳥羽町に至る一里半(人力車賃八錢)鳥羽の西北に一小丘陵あり日和山と云ふ海面より高さこと僅かに百八十尺、麓より頂きに至る阪路三町半、船人巔きに登りて天氣を觀測するを常とするが故に此名あり山上に古松あり海越の松一名天神松とも云ふまた石造の磁針器あり其近傍に芭蕉翁の碑を建て「鷹ひとつ見つけて嬉し伊良胡崎」の一句を鐫れり、松を海越といふは古歌に「日和山しぐれし跡にほの見えて白雲かゝる海越の松」と云ふに因れるものなりとす、此山に登臨すれば東北に安樂島、菅島、阪手島、荅志島、桃取島、舩島其の他無数の小島嶼を瞰下し右に鳥羽の舊城趾、左に小濱の岬を望み眼下に岩崎山、大杉山、主水山寺を眺め白帆は青松の間に隠見し

て其の絶景殆んど奥州の松島に髣髴たり先年 皇太子殿下此の山に登らせ給ひて深く其の景を賞せられしも亦た宜なり、宇佐田ヶ濱の海濱に小島あり島上二株の松樹ありて其の形ち起て舞ふが如し之を愛兒の松と云ふ、旅客此の山に登りて猶ほ風景に飽くことなくんば更に鳥羽町に出で扁舟を雇ひ此の島嶼を巡覽するも亦一興なるべし、鳥羽町には旅店大阪屋なか、酒井屋善十郎、三河屋寅吉、大島屋卯助及び料理店八百萬(旅店兼業)等ありて島巡りの舟を雇ふの周旋を爲す(是より以下再び東海鐵道の幹線に戻る)

○長良川鵜飼

世に漁りの業多しと雖も其の奇觀なるは岐阜長良川の鵜飼に如くはなし去ればこそ夏より秋の初にかけて岐阜地方に遊ぶ者は此の鵜飼を見物するをこよなき慰みとし毎年其季に至れば鵜飼見物の客は岐阜の宿屋に群集する程なり此舉も亦避暑の一興なるべきを以て茲に其の案内を爲さん

に東京(新橋)より岐阜まで下等汽車賃二圓五十四錢午前六時新橋發の第一列車に乗れば午後七時岐阜に達す同市にて名ある旅亭は玉井屋伊兵衛(今小町)津國屋光太郎(同上)菊瓶(中竹屋町)天駒(伊奈波櫻町)小見山又吉(太田町)等にして孰れも鵜飼見物の周旋を爲すが中にも先づ玉井屋、津國屋二軒を以て同市中上等の旅店とす、停車場より玉井屋まで八町人力車賃五錢、同家より長良川乗船場まで廿二町人力車賃八錢にして宿泊料上等一日五十錢、中等三十五錢、並二十八錢を定めとす此外料理屋にては松畔樓(魚屋町)水琴亭(伊奈波境内)徳文樓(今小町)十八樓(河原湊町)雙美樓(七曲町)等を稍や名高きものとす此の旅店料理屋中には先年大地震の際顛倒又は焼失せし家もあれと昨今己に普請落成し舊の如く營業しつゝある者多し、楮鵜飼を見物するには右の宿屋に就て鵜飼の場所を問合せ或は遊船を僦ふ等の周旋を爲さしめ酒を載せ肴を載せて長良川に漕出し漁舟の傍らに我船を寄せて見物するを常とすれども川瀬又は鮎の寄

場等の時々變るとあるが爲に漁りの場所は一定せず例ば中流下流にて漁りを爲す時又は月の下弦なる夜は見物するとも自由なれど上流にて鵜飼を爲す時には川上へ五六里漕上りても猶ほ漁舟七艘を並べ見るとを得ず殊に月の上弦なる夜は其の月の入るを待ちて漁りを始むるものなれば見物深更に及びて迷惑する事もあらん故に鵜飼を見物するには月は下弦なる頃と中流下流にて漁りを爲す時と木嵩多からずして川の濁らざる夜とを擇ぶべし(陰曆十五夜は漁りを休む)又遊船の賃金は船の大小醜美等に依りて各々差あり家形船鳳凰丸、蛟龍丸等は一晩二圓七十五錢、其最も小さなものは一晩四十五錢位なれば二三人連は四五十錢、五六人連は一圓内外、十二三人連は二圓以上の船を僦ふが善し、楮船を長良川に乗出せば兩岸の景色油繒に似て最も面白きに船伏山の彼方より箒焚き連れて漕出る鵜舟の火影川波に映りてきらめく様ねも言はれず漸く近づくまゝに眼をとめて觀れば漁舟は都て七艘其の船頭に箒を焚き一人の鵜匠箒の傍ら

に在りて鵜十二羽を使ふ手繩さばき殊に巧みなり又中央にありて鵜四羽を使ふ者を中鵜使といひ傍らに漁具の取扱ひを兼る舟子一人あり之を中乗と云ひ船邊にて楫を取り舟の進退を掌とる者一人之を船乗と云ひ一舟すべて四人を乗す既にして船頭の鵜匠は川瀬の宜じき所を見立て、鵜を縛りたる手繩十二條の端を左手に握り其鵜を悉く水中に放ち入るれば中鵜使も亦同じく鵜を放つ此時舟子は、舷を折叩き鵜匠等と共に聲を揚げて勢ひを添ふれば鵜は波を切り流れを溯ぼり出沒浮沈此處にあるかと思へば彼處に潜り鮎を水底に逐まはし先を争ふて之を吞む此間鵜匠は始終手繩を取りて鵜の進退を自由にし稍や七八尾づゝの魚を吞みたりと思ふ頃繩を手繰りて鵜を舟に引上げ左の手に繩を握りしまゝ、嘴を押開きて魚を籠の中に吐出させ又水に逐入れ箒を焚添へ或は舟子を指圖するなど頗る忙はしきに似たれども鵜使は從容として騒がざるは誠に妙技と賞すべし毎夜漁業時間は凡ろ三時間にして一時間一羽の獲る魚數は百二三十

尾より二百尾に至り一舟三時間の獲る所三千二百尾に上る事ありと云ふ委しくは三浦千春氏著の「美濃奇観」に譲りて茲に贅せず

● 養老の瀧

美濃の奇観ニツあり一は前記の長良川鵜飼、一は養老の瀧是なり、瀑布は多藝郡白石村養老山中にありて高さ七丈餘、幅二間許り下流を津野川と云ひ安八郡小坪村にて揖斐川に入る、鵜飼見物の序猶ほ一日を費やして此の瀑布を觀んとする者は岐阜より汽車にて大垣に至り（汽車賃下等八錢）夫より高田を経て同所に到るべし大垣より瀑布まで里程三里強り人力車賃は一人曳廿五錢二人曳四十錢、其の道路は先年明宮殿下御來遊あるべしとの噂を聞き急ぎ修繕を加へしものなれば平坦砥の如く之を垂井關ヶ原道の嶮しきに比すれば優れること遠し故に大坂地方より來る者も亦大垣にて下車するを便利とす瀧は絶壁の上より落ち飛沫は柳絮の風に散るが如く其下は唯だ一枚の巖石にして斯ばかり勢ひ激しく落來る水の

深さは漸く膝の上達し容易く瀧壺に入るとを得るも亦奇と謂ふべし昔し元正天皇の御宇此の美泉始めて顯れたるを聞召し靈龜三年九月此處に行幸ましく其水を御手に掬ひ御面を洗ひ又御痛處に滌ぎたまへば御痛み頓に癒へて其驗し著るしかりしかば還幸の後ち年號を養老と改めて天下に大赦を行ひ給ひしと續日本紀にも記してをさく人の識る所なれども今も猶ほ昔しの趣きを棄てず殊に夏の夕瀧壺より虹を吐き秋の朝紅葉の霜に照り勝るなど一層瀑布に風情を添へて眺め飽かぬ心地す、瀧のもどより四町ばかりも東の山腹に登れば茲に養老神社あり境内廣く樹木生茂りて此處も亦避暑には適當の地なり社石段の傍ら岩石のはざまより杉の木の間を潜りつゝ進しり出る小瀧を菊水と稱へ昔しは社をも菊水の天神と呼びしとか又養老寺あり瀧壽山元正院と號す養老寺より登ると二町ばかりの處に偕樂社あり個は通常の旅館にはあらず岐阜大垣等の有志者が協力に成りたる俱樂部やうのものなれども多人數の宴會等には此館

を借り用ふることを得べし、其の近傍に旅館三四軒あり中に就て豆馬亭(村上雄三)掬水樓(高木某)の二軒は家居宏壯にして庭も亦廣く豆馬亭は料理をも兼ねるをもて夏日は納涼の爲め同家に来り留まる客頗ぶる多し豆馬亭は貴顯紳士の投宿に差支なく其宿料にも特別上等といへる内規あれど先づ通常の旅籠料は上三十錢、中廿五錢、並二十錢、晝食は十五錢、十二錢、十錢等とす、菊水の邊りに素心庵といへるさゝやかなる庵を結び茲に茶を賣る老尼あり年の頃六十あまり名を素心と云ふ昔しは名古屋豪家の娘なりしが雅びの道に心をゆだねて今は俳諧三昧にのみ耽り蓮月來葉の聲みに倣ふどにはあらねど七八年前より此庵に浮世の塵を避けて歌を詠み句を連ぬる片手間に薄茶一服を立て、客に侑め聊かなりはひの助けとす去れば杖を養老に曳く韻士騷客にして素心庵の扇を敲かぬはなく今は素心の茶は養老山的一名物となりしも亦風流の一徳なるべし

● 竹生島

江州琵琶湖の北方に位し其の名世に高き竹生島に遊ばんとする者は東海鐵道の米原驛にて敦賀行の列車に乗換へ長濱にて汽車を下り同地舊城趾の邊りより漁舟を雇ひ酒を載せ肴を載せて漕出づへし長濱湖岸より竹生島まで水上三里許り順風に帆を揚げて姉川の河口に至り茲にて漁夫に命じて湖中の鱒、鮎、ウグヒ、ハス等を捕獲せしめ或は刺身となし或は鹽焼と爲し更に一酌を催しつゝ島に向はゞ興味殊に多かるべし、竹生島は周回廿六町、最高處は水面より高きと六十尺其の東方に入江ありて舟の泊するに便なり、島は皆岩石を以て成り水光山色天然の美を蒐め神工鬼斧人の目を驚かす、島上に辨天の祠あり都久須夫麻神社と云ふ長七寸三分の神像を祭り左右に宇賀神を合祀す其南に觀音堂あり西國巡禮三十番の札所にして行基作四臂千手の觀音像を安置す又神社には什寶多く其の眞偽は知れざれども天狗の爪、馬の角など、稱するものは殊に奇なり、社記に曰く竹生島者在江州湖中。其巖石多三水精寶珠。傳言孝靈天

皇四十年。江州地裂而湖水始漲。駿州富士山忽出焉。景行天皇十年。湖中竹生島初涌出。云々、島上に竹を生ず故に竹生島とは云ふなるべし、長濱より竹生島まで漁舟の賃金は往復七八十錢にして客四五人を載す（長濱には井筒屋利八其他數軒の旅亭あり）又東淺井郡早崎より同島まで水上五十町此處より乗船するを普通とす

●比叡山

江州大津町の西北に突兀として雲霄を摩するの高嶽あり直立二千三百尺之を比叡山また四明ヶ嶽と稱す、此山に登らんには東海鐵道の馬場驛にて瀛車を下り二里半の道を人力車を走らせ（人力車賃二十錢）て阪本村に達し夫より徒歩五十町の阪路を躋れば山顛に到る、峻阪崎嶇として登り易からざれども一たび山頂に達すれば清冷膚を襲ひ人をして復た炎熱の何物たるを念れしむ頂きには老杉古檜翳翳として林を爲し溪流噴水滾々として所々に涌出し滿山冷然として自から人界を隔つ、樹林の間に立ち

て東西を眺むれば大津京都の全市は共に眸中に入り東北には琵琶湖面の一碧鏡の如きを瞰下し風色秀麗、夫の平親王將門が平安城を望瞰して逆意を抱き始めたるは即ち此山なり、山上に旅店なし夏季に向へば幾組かの外國人或は神戸より或は大坂より妻を挈へ兒を伴ひ全家擧げて此山に登りテントを張りて家となし九旬の長日月を此の靈境に送るを常とす、又山中雲母越の傍らに延曆寺あり天台宗にして延曆七年僧最澄の創建に係る其の東麓阪本村の中腹には有名なる官幣大社日吉神社あり大津の方より登山する者は必ず參詣すべきなり、京都より登山する者は修學院村より高野川の流に沿ひて八瀬に向ふを善しとす

●石山寺

石山寺は近江八景の一にして馬場停車場を距る南の方一里餘（人力車賃十錢）瀬田川の西に在り、寺は眞言宗にして良辨僧正の開基天平勝寶年間創建に係り後承暦二年祝融の災に罹り堂塔悉く燒失せしを右大將

賴朝之を再興し天正の頃に至りて堂宇いたく頽廢せしを豊臣秀頼の母堂
 淀君治世安民の祈願を籠めて伽藍を造營し寺地を寄附して修補の効を奏
 す今の本堂即ち是なり本尊は良辨作の二臂如意輪觀世音にして長六寸別
 に丈六の巨像を作り之を其腹中に納むと云ふ、本堂の傍らに源氏の間あ
 り寛弘年間紫式部此山に參籠して源氏物語を作りし所にして式部自筆の
 般若經并に式部の所持せしと云ふ石山形の古硯を秘藏す又源氏の間式部
 影前に於て歴世の歌人源氏の卷々を題して和歌を詠じ之を奉納するの古
 例ありて故人の色紙短冊數千百今に内陣に納めて寺寶とす、山は皆岩石
 重疊し本堂より右折して石階を躋れば山腹の稍や平坦なる處に觀月亭あ
 り仲秋月白き夕此山に登りて終夜宴を開く者多く眺望また快濶にして前
 には湖水の波靜かなるを一瞰し右に瀬田川を隔て、三上山、鏡山を望み
 背後には岩間、笠取、醍醐の翠巒を負ひて其の風色の佳なる實に近江第一
 と稱せらる殊に夏の夕は其麓湖水の邊に無數の螢飛かひて宛も銀河を地

上に看るの思あり去れば此螢を見んとて遠近より來り集る男女頗る多く
 其名宇治の螢狩と共に高し、湖岸には旅店多く又夏季に至れば大津町宇
 石塲の岸より瀬田川の間を往復する小蒸氣船ありて石山々麓までの乗合
 賃金は一人前五錢なり

● 箕 面 山 (箕面瀑布)

箕面山は攝津國豊島郡の北部に在り吹田停車場を距る三里、大阪を距る
 五里、大阪より赴く方道稍や平夷なり(大阪よりの人力車賃二十錢)其の
 道順は大坂市より北野を経て池田街道の服部、櫻塚等を過ぎ更に山崎街
 道を東し牧落といふ處より左折して山道に掛れば一里にして山に達すべ
 し此道昔しは人車を通せざりしが今は開鑿成りて車にて登ると自由な
 り、山中に寺あり瀧安寺といふ役の行者の開基、白雉年間の創建にして
 行者堂の古跡あり其傍らに辨天社ありて役の行者作る所の天女の像を祭
 り江州竹生島、相州江之島、藝州嚴島及び當山を併せて日本四所の辨天

寺記に曰く東西の山峯は峨々として兩部の曼荼羅を表し南北の翠巒峴々として不二の尊体を顯す飛泉高く懸りて其水萬頃の田園を潤し巖石は左右峙ち南方遙かに晴れて水流滔々として澆る其形も箕の面の如し故に名とす古へは此地に諸堂巍々たりしも兵亂に罹りて荒蕪に歸し後ち慶長年中今の地に移す云々、瀧安寺の北十八町の處に箕面の瀧あり直下十一丈二尺、幅十八尺餘、巖頭より飛下して石面を走り落ち其水碎けて千顆萬顆の白玉を散し水聲數町の外に達す殊に秋老い霜深き頃は滿山の楓樹紅を漲らし其間より瀑布を望むなと絶景言ふ可からず、瀑布の近傍に三鉢の松、座禪石、唐人辰岩等あり又本坊の隣地に岩本樓其他の割烹店ありて旅店を兼業とす

●寶塚温泉

西ノ宮停車場の北二里（人力車賃十五錢）六甲山の東麓武庫川の西岸宇伊子志村に鑛泉あり寶塚温泉と云ふ近年の發見に係り冷泉にして多量の鹽

分を含み胃弱、貧血性、麻痺質斯、腸加答兒、氣管支加答兒、子宮病等に効能ありと云ふ温泉場は混浴にして其室は堂宇の如き形ちを爲し浴槽廣濶にして温、冷の二槽に分てり其後なる崖の半腹に數軒の旅店料理屋あり前に武庫川の流れを望み後に兜山を負ひ眺望佳絶風色明媚夏日は浴客蟻集して頗る繁熱を極む、旅店宿泊料は一日二十錢以上三十五錢までにして魚類は西の宮より運搬し來り新鮮にして且廉價なり、此地より東北一里中山寺村に中山寺あり西國巡禮二十四番の札所にして用明天皇の二年聖德太子の開基とす、又寶塚より生瀬を経て有馬に至る新道ありて二人曳人力車を通ず途中天狗岩其他の巨巖多し

●有馬温泉

有馬は關西第一の湯治場にして温泉は遠き神代の昔しより湧出で滾々として其湯今に至るまで絶えず人代となりては舒明天皇を始めとして世々の天皇此地に幸行ましく屢々靈泉に浴し給ひしと日本紀等にも見ゆた

れば其起原の古きは云ふ迄もなく病に効驗あるとも亦推して知るべし有馬は元と有間と書し攝津國有馬郡湯山町に在りて人家凡そ四百五十戸、土地は海面より高きと一千二百尺なり大阪の方より此地に赴かんには神崎停車場より前記の寶塚を過ぎ行くも善ければ住吉停車場より六甲山を越え瀧の川に沿ひて登り愛宕山の麓に掛るをもて第一の近道とす、住吉より有馬まで里程三里十五町山道なるを以て車を通せざれと住吉には有馬通ひの賀籠ありて午後二時迄は一挺五十五錢、二時以後は同しく八十錢にて雇ひ得べく若し徒歩するとも健脚なる人は旦に往て温泉に一浴し夕に復るも亦自由にして途中風景の奇なる大に心神を慰むるに足るものあり、温泉場は愛宕山の中腹に位し三方山を以て包まれ眺望快活ならずと雖も町内に警察署、郵便電信局を始めとして商家軒を並べて各種の日用品を商ふを以て滞在中日々の需用に差支ふる事なく又近傍名所多きが故に徒然に苦しむの憂ひなし、浴場は去る明治十六年一たび西洋風の構

造と爲せしが先年改めて日本造りとし其様宛から宮殿に異ならず故に田舎の爺婆は額突きて門前を過ぐるものありとぞ、泉質は鹽類泉にして一リートル中固形物の成分左の如し

鹽化那篤留母	一、四七一七	臭素那篤留母	〇、〇一〇五
鹽化加留母	〇、一二八一	鹽化諸母尼護	〇、〇〇一三
鹽化加爾叟母	〇、二八九六	鹽化麻屈涅叟母	〇、〇二四二
鹽化亞兒密紐母	〇、〇〇二九	硫酸石灰	〇、〇〇一四
鹽化利知烏母	痕跡	酸化滿德	痕跡

而して味ひは鹹らしく色は茶褐色を帯び浴衣手拭等は忽ちにして褐色に變ずるのみか屢々入浴する時は爪先までも色付く事あり浴槽は宿屋より通ひて入浴する様に爲したる一の合浴所なれども其内には別湯、並湯の區別ありて別湯(幕湯とも云ふ)の入浴料は一度十錢、並湯は一錢五厘、宿屋より木札を渡し且入浴の際案内を爲すを常とす其の効能は腫物、皮膚病、打傷、中風、慢性癩麻質斯、子宮病、貧血性に著るしければ肺患には却て害

ありと言傳へ近來肺病患者の入浴する者大に減少せり、編者先年有馬に遊びし時宿屋に張出しありし入浴心得なるものを寫し歸りたれば左に掲げて浴客の便覽に供ふ

遠來の病人疲れたるをも厭はず俄かに入浴すると勿れ◎老人小兒并に虚弱の病人は最初より數回又は一度に長湯を爲すと勿れ◎最初の一週間内は一日二回、其後は三回と定め入浴の時間は二十分間に過ると勿れ◎飲食後並に空腹の節直らに入浴すると勿れ◎入浴逗留中大酒暴飲を慎むは素より猥りに交接すると勿れ◎惡寒、發熱、頭痛、眩暈等の時は平癒するまで入浴すると勿れ◎入浴前は必ず湯を掛けて能く身体を温むべし決して冷むたる儘にて入浴すると勿れ◎入浴後は發汗するとも衣服を脱して邪氣に冒さるゝと勿れ◎入浴後は直ちに浴衣を脱替へ濕氣を呼吸すると勿れ◎固有の持病發作の氣味ある時は至快に至るまで決して入浴すると勿れ

けんきう 建久二年の昔し仁西上人有馬に來りて温泉場を再興せし時和州吉野より數名の人々を連來り藥師如來の十二神將にかたどりて十二坊を建築し其人々をして温泉を守らしめしが此坊いづとなく客舎となり其數も亦今は八軒に減じぬ即ち左の如し

- 奥之坊 (淺野仙太郎) 御所坊 (金井四郎兵衛) 角坊 (宇保はる)
- 二階坊 (佐々木孝太郎) 中之坊 (梶木源之助) 下太坊 (山下庄左衛門)
- 池之坊 (久武直之助) 尼崎坊 (岩本久吉)

此外通常の宿屋二十餘軒あり多くは三階造りにて客間各々數十室を備へ宿泊料は一等五十錢、二等三十五錢、三等廿八錢、四等廿一錢、五等十六錢、晝食は廿五錢より六錢まで、席料は一週間凡そ五圓より七十五錢までの等級あり尤も旅籠にて泊る客は別に席料を仕拂ふに及ばず又一坊毎に樓娵三四名ありて赤前垂を掛けて働く之を湯女と云ふ、攝津名所圖繪に曰く「家毎に二娵あり一人を大湯女と稱し都て是をか」と呼ぶ一人は十

三四歳より十八九歳までの少女美貌を撰んで紅粉を施し容色を飾らしむ是を小湯女といふ其家々に名を定めて代々に傳ふこれを通り名といふ二婢共に入浴の旅客に隨從して入湯の時刻を知らせ浴衣を肩に掛けて案内し衣類を預りなどして侍女の如くす或は酒宴の席に出て歌を諷ふこれを有馬節と云ふ鄙びたる調子うち上げて諷ふさま古雅にして殊勝に覺え侍る「云々、今も大かたは異なる事なし唯だ其の人数を限らざると客に接してみだりに淫猥のふるまひ無きとは乃ち今昔の差なり倅例に依り近傍遊覽すべき勝地を擧ぐれば

鼓ヶ瀧　は湯山町の南八町瀧、川の上流にあり直下一百尺近傍巨巖突兀として奇景云はん方なし瀧道の盡る處に有明櫻あり數十株の山櫻楓樹に交りて其妍を擅まゝにす實に有馬六景中に冠たるものなり

落葉山　は城山、童子山、道場山等の別稱ありて湯山町より河を隔て、西の方に峙だち山麓には瀧ノ川の流れを帯び夏季の交には鶯歌蟬聲を聽

き秋冬には月色雪影を観るべく亦た一個の小仙境なり

温泉寺　は湯山の町續き愛宕山の麓に在り僧行基の開山、仁西上人の再建にして長一尺の薬師如來及び運慶、湛慶作の十二神將を安す昔しは此寺の僧侶等行基仁西兩師の像を輿に載せ正月二日に入初めの式といふを行ひ來りしが今は此事廢れり

功地山　は湯山町より巽の方にありて最も風景に富めり在昔孝徳天皇の此温泉に行幸ましませし時行宮を營ませ給はんが爲め良材を伐採せしめられたる舊地にして今は有馬の公園地となれり

有馬富士　は湯山を距る三里餘の北方に在りて屹然天表に顯はれ其狀圓錐形にして駿州の富士山と似たり冬より春の初めに掛けて満山雪を戴きたるの景色殊に絶佳また六景の一たるに羞ぢず

其他鳥地獄、蟲地獄、極樂寺、善福寺、温泉神社、抛木山の城趾、菩提院の古跡、龜尾の瀧等觀るべき處多し、又名産として是有馬筆殊に名高く昔しよ

り人形筆と稱へて人の玩るぶ所なれども個は唯だ一の玩弄品に過ぎずして實用には適せず之に勝りて近來評判宜じきは籠細工、竹細工の類にして近年は外國人の好みに投じて書棚、額縁等の精巧を極めたるものを造り出し年々海外輸出の高を増加するに至れり又二階坊の佐々木孝太郎氏去る明治廿二年より有馬鐵砲山(一名陶器山)の土を採りて陶器を製造するを創めしが其實は京都粟田焼と同じく今は有馬名産に其一を加ふるに至れり、湯山町より神戸市まで五里二十町、同く神崎まで六里二十六町共に二人曳人力車を通す

●布引瀑布 (布引温泉)

布引の瀧は三ノ宮停車場より北凡る二十町(人力車賃六錢)葺合村布引山麓に在りて新道平坦車を驅るに便なり山麓より登ると三町許りにして水聲の滔々たるを聞く是を雌瀧とす雌瀧は高さ七丈三尺瀑水は岩角に遮られて勢ひ稍や緩なり其前に長廊を架して客の觀覽に便し又傍らに茶亭

あり、長廊を渡り右曲左折して猶ほ山に躋る二三町にして雄瀧の前に達す雄瀧は直下十五丈水勢急にして箭を射るが如し又山下には人家凡る百戸櫓を並べて整然一市街を爲し其の西側に布引温泉あり炭酸質冷泉にして之を沸し用ひ近傍の旅店料理屋より客の案内を爲す、入浴料は幕湯一回十錢、合幕同く五錢、並湯同く二錢、近隣旅店(料理屋兼業)の重なるものは常磐舎、富貴樓、菊水樓等數軒にして宿泊料は一泊上等三十五錢、中等廿五錢、下等十五錢、晝食は上等二十錢、中等十五錢、下等十錢なり元來此地は料理屋茶亭の風儀太だ悪く初遊の客と見れば強て飲食を勸めて不法の價を貪るなど大に勝地の名を傷くる事あり(山上の茶亭に此弊殊に多かりしなり)しが今は大かた此惡習を一洗するに至りしと云ふ、又布引山の麓より右折し字熊内を経て山道を登る一里餘にして摩耶山あり數百級の石階重疊し山頂に天上寺ありて頗る眺望に富む、寺は法道仙人の開基、大化元年の創建にして本堂に十一面觀世音を安置し寺内別に摩耶

夫人堂、開山塔あり、英米人此寺をムーリテンブルと稱し、毎年九夏三伏の頃來りて炎熱を避くる者多く寺にては其の客殿を貸し又精進料理を鹽梅す、歸路ハ上野村に出るもよし

● 諏訪山温泉

汽車にて神戸市に入れば市の北部布引の山續きに椀形の丘陵を認め其の中腹に瓦屋根軒を連ね酒旗翻々風に翻へるを遠望すべし是れ即ち諏訪山なり諏訪山は神戸停車場を距る北十五町餘（人力車賃四錢）山中に諏訪神社あるが爲め直ちに取つて山の名とは爲せしもの乎、其の中腹に温泉場ありて近傍に割烹店櫛比し山上は乃ち公園にして眺望快濶市内の勝地は一々指點し得べし先年金星の太陽を經過せし際佛國天文學者某此山に於て觀測せし事あり後ち其地に石碑を建設して紀念とす、温泉入浴料は幕湯一回十二錢、並湯二錢、近傍の料理屋（旅舎兼業）は本常磐、西中及び東常磐、山海樓、一力亭等最も名あり又諏訪山の後に再度山あり山麓より頂き

まで凡そ二十町山上に觀音堂ありて如意輪觀音を安置す寺は僧行基の創建にして後ち延暦年間弘法大師二回まで此山に登りしとて之を再度山と稱するに至れり陰曆毎月廿一日は大師の縁日なりとて神戸兵庫の地より登山する信者多し

編者云ふ京都、大阪、神戸近傍及び是より播州路を西に向ふに隨ひ避暑に適當の地頗る多し先づ京都にては圓山温泉、四條河原、若王寺、清水、嵐山、大阪近傍にては大川の納涼、天保山海水浴、住吉海水浴、堺大濱及び濱寺、神戸近傍にては湊山温泉、和田岬和樂園等枚擧するに遑あられども此の一小冊子には到底掲げ盡し得ざるを以て關西地方（山陽の部は別に卷末に記載せり）の案内は姑く筆を埒に止め次には再び東京に立戻り甲武鐵道線路を経て甲州に到るべき沿道各避暑地の道しるべを爲すべし

●百草園

東京新宿停車場より八王子に至る甲武鐵道の近傍には名所舊跡亦少からず就中小金井櫻花の如きは世人の歎賞する所なれども個は避暑に用なきを以て記さず、而して百草園の如きは其名未だ顯はれずと雖も夏日必ず一遊すべき勝地なるべし百草園は武州南多摩郡七生村字百草の高丘にあり甲武鐵道の國分寺停車場より府中驛を経て西南二里廿五町、道平坦なるが故に人力車を驅れば二時間以内にして達す、園は元と松蓮寺と號し夙に名勝の地を以て稱せられしが維新後横濱の豪商青木某氏の所有に歸し爾來庭園を修理し且新たに櫻桃數十株を栽ゑて大に其の風致を増せり園内築山あり泉水あり其の高丘には十國臺、清涼臺、富士見臺等の小亭を設け又別に氣樂亭なる一小割烹店ありて客の飲食に便す、十國臺に登れば十州の峯巒眸中に集まり前には多摩川の清流を瞰下し眺望飽くとを知らず此園春は觀櫻に宜しく夏は納涼に宜しく香魚の漁期に至りては多摩

川に下り立ちて魚の潑刺たるを獲るも亦自由なり園内別に養生館あり個は園主青木氏の別荘なれども客の望みに依りては其座敷を貸渡し一宿を許すと云ふ、國分寺停車場より百草まで片道人力車賃二十錢、其の途中府中驛の大國魂神社に參詣するの便あり社は府中驛の南端にある古き宮にて元と六所明神と云ふ官幣小社にして景行天皇の四十一年之を創建し中殿に武藏大國魂大神を祭る毎年五月五日の夜祭事を執行ひ本社より驛の中央にある假屋へ數基の神輿を移す間驛の家々は悉く燈を消して暗やみと爲し式終りて後ち一時に燈を點す其の提燈の多きと幾千個なるを知らず之を六社の提燈祭と云ふ

●多摩川漁鮎

拾遺集に「多摩川に晒す手作りさらく」に昔しの人の戀しきやなう」と詠みし武藏の多摩川は其の水源を信濃に發し甲斐都留郡黒川村に入りて一瀨川、丹波川等の稱あり夫より東流武藏の多摩郡に入りて多摩川と稱

し曲折六十八回小川村にて秋川を容れ拜島、日野等を経て橋樹郡川崎の北にて海に入る長さ凡ろ三十八里、川幅最も濶き處八町二十間、下流を六郷川と云ふ、香魚は即ち此川の名産にして毎年夏季に至れば都下の人々多く日野立川の邊りに遊びて漁りの業を見物し傍ら其獲たる魚を炙りて鮮けきを賞翫するが中にも甲武鐵道線路の開けたる以來鮎漁と避暑とを兼ねて此川に遊ぶ者一層其數を増せしと云ふ漁師は多摩川沿岸何れの場處にても雇ひ得べしと雖も日野立川兩村には鮎漁の案内を爲す家ありて停車場より道の程も近ければ先づ此の二ヶ所に赴くを善しとし新宿發一番又は二番の列車にて出で立ち終列車にて歸京すれば充分の慰みなるべし、先づ新宿停車場に至れば松の屋といへる茶店に鮎漁御案内の看板を掲げたるを見るべく此家にて問合さば實地に到らざる前凡ろ漁りの模様等を知る事を得べし例へば雨後水を増し又は其川の濁りし時には捕獲多からざる事もあれば是等の都合はすべて松の屋にて聞合せたる後ち往

くと往かざるを決すべし、汽車に乗りて立川に到れば停車場前に丸芝支店の茶店あり茲より東十二三町にして立川村丸芝本店に達す丸芝は元と農家なれども年來鮎漁の事に慣れたりとて夏季は漁り一切の案内を爲し舟を雇ひ漁師を雇ひ又其の奥座敷を客室に宛て、料理等をも爲せり今ま同家定めの鮎漁賃金を聞くに

- 一 鵜飼 (引網付漁師三人添) 一組 金一圓五十錢
- 一 羽網 (待網付漁師八人添) 一組 金二圓五十錢
- 一 釜 (引網付漁師二人添) 一組 金一圓
- 一 投網 (漁師一人添) 一反 金五十錢
- 一 友釣 (漁師一人添) 一人 金三十錢
- 一 屋根舟 (船頭二人諸道具付) 一艘 金一圓

屋根舟には客十人を容れ舟中にて酒を酌み且捕り得たる香魚を濫刺未だ死せざる間に料理して食する事も自由なれど其の費用の點より云へば成丈け連の多きを以て經濟なりとす又漁りの中にて最も興あるは羽網にて

多き時は一回四五十尾の鮎を捕ふる事あり次は鵜飼次は笠なれども鵜飼は當今用ふる事少なしと云ふ、立川村を距る五六町多摩川の南岸に普濟寺といふ寺あり其庭より望めば多摩川の鐵橋を眼下に見おろし足柄、高雄二山の間より遙かに富嶽の雲に聳ゆるを眺め多摩川一帯の清流のむかし調布を今も晒せしかと誤たるゝばかり日光に映じて白く、汽車は煙を吐いて奔り小舟は帆を揚げて下り其の絶景云はん方なし此寺近頃客殿を修繕し客の望みに應じて一宿をも許すと聞けば一日の漁りに飽き足らぬ人は九芝より案内を請ひて茲に一夜を明すも亦興ある事なるべし、日野驛には玉川亭といふ料理屋あり同家は近年二階家を新築し又豆州熱海より固形温泉を取寄せ客をして随意に浴を取らしむ同家樓上よりの眺望は零ぼ普濟寺と同じく漁業の賃金も亦九芝の定價と同じ、新宿より立川まで下等汽車賃二十二錢、同く日野まで二十五錢なり

● 高山

神奈川縣下南多摩郡淺川村より登り三十町其の頂上に寺ありて藥王院といふ抑々此寺の由來を原ぬるに人皇四十五代聖武天皇の御宇天平十六年行基菩薩の草創したまふ所にして其後應安年中に山城醍醐山の俊源此地に來り八千枚の護摩供を修し夢の告に依りて不動明王の化身を彫み一字を營みて之を安置す即ち今の飯綱善神の社なりと、社は峻しき石段を登り詰めたる處に在りて彫刻美を盡し彩色きらびやかなり石段を下りて左に護摩堂、藥師堂、大日堂あり右に藥王院の坊あり四面には杉の大樹幾百本となく茂りて眺望を遮り左のみ見晴しよき處とては無ければ山に入れば風かろく音づれて木陰冷しく夏を愈るゝの思ひあり殊に蚤蚊の煩ひ絶えて無しとて夏日は參詣を兼ねて此山に遊ぶ者も少からず去れと寺内には宿屋一軒もなければ茲に泊まらんとする者は藥王院の坊を頼みて一宿するを常とす中には數日間逗留する者もあれと富士講など云へる信者多人数此坊に宿る時は座敷塞がりしとて一宿を斷らるゝ事もあるべし、境

内より西南へ狭き山道を降ると十六七町にして琵琶瀧に達す瀧の高さ一丈あまり其傍らに茶店二軒ありて多く發狂人を宿らせぬ蓋し此瀧は神經病を癒やすに効驗ありと言傳ふるが故なるべし又本道を降ると十町餘夫より左に折れて峻しき崖路を降れば七八町にして蛇瀧に出づ幅は琵琶瀧よりも狭けれと勢ひは却て彼に勝りて水も亦清潔なり偕高雄山に遊ばんとするには先づ新宿より八王子行きの汽車に乗り（新宿八王子間の汽車賃下等三十錢）八王子よりは甲州街道を通る馬車に乗移れば字小名路より十町ばかりも向ふなる高雄山の本道（ほんだうたかをばし）高雄橋の橋詰まで一時間餘にして達し其の賃金は僅かに八錢（人力車ならば八王子より此橋詰まで十八錢）高雄橋を渡れば直ちに山道に差掛り其の途中一町毎に何丁目と記せし立石ありて道に迷ふべき恐れもなければ二軒茶屋より裏道を登り行く方五六町も近しと云へり、里程は八王子停車場より淺川村高雄橋まで二里十五町夫より上り三十町、新宿發の第一列車に乗込めばゆるく參詣

見物の上八王子發終列車にて歸京し得べきも第二列車にて行かば日歸りには餘程いそがしかるべし故に若し終列車に乗後れし時の用心にとて八王子有名なる宿屋を記し置かんに曰く角屋喜兵衛（横山町）倉田屋庄左衛門（同上）山上十郎左衛門（八日市町）旅籠は通常二十五錢なり

●御嶽山（武州）

此山も亦避暑には屈竟の地なりとて近頃は外國人さへも好んで杖を曳くとか聞けり里程は甲武鐵道の立川停車場より青梅宿を経て七里半、八王子驛よりも同じく七里餘、別に八王子より五日市に出で夫より御嶽までの裏道もあれと道峻惡にして登り易からざれば茲には立川よりの道順のみを記すべし立川停車場より青梅まで五里餘、人力車一人曳の賃金六十錢、道は多摩川の南岸に沿ひ行くと三里にして羽村に達す此村は即ち多摩川上水の分る處にして水門は石を以て疊み水道の兩岸には奇岩立ち並びて宛も小赤壁の趣きを備へたり羽村より青梅まで二里餘又青梅より

向ふ御嶽村まで二里の間は上り坂にて車を通せざるが中にも山に近づき
ては道愈々峻しく漸くにして本社に近づけば兩側に舊御師の家二十軒ば
かりも簷を並ぶ今は此家通常の宿屋の如く客を泊め其の取扱ひ最と深切
なるが上に座敷も亦頗る手廣く且奇麗なるあり、石段を登れば即ち御嶽
神社の本社拜殿に達す本社は縣社にして少彦名命を祭り結構壯麗を極め
境内には古松老杉生茂りて風いと涼しく土地は海面を抽くと三千八百尺
の上にあるをもて盛夏と雖も寒暖計は八十二三度の上に登らず夜は七十
度以下に降るとあり又神社の近傍一顧の價ひある名所多く就中七代の瀧
綾尾の瀧、御萩の瀧、おほん岩、圓山、日の出山、那具男の峯等は此山に遊
ぶ者の必ず往て一覽すべき處なり

●御嶽山(甲州)

八王子より甲州街道を経て甲府に至る二十三里廿七町の間には別に好
避暑地として讀者に紹介すべき勝區なきを以て茲には其道中の順序の

みを記さんに八王子より小佛峠を経て吉野驛(相模)まで里程五里半の
間は乗合馬車の往復するありて其の賃金は一人三十五錢(雨天二割増)
を定めとす小佛峠新道は舊道の左を迂回し其の傾斜は舊道よりも緩な
れども猶ほ峠二十町の間旅客は馬車より下りて徒歩せざるを得ず峠よ
り下り坂に向へば右に絶壁を仰ぎ左に溪流を臨み屢々崖を下り多く橋
を渡り右曲左折往きくして吉野に達す、茲より一の谷川を徒渉して對
岸に到れば此處より又猿橋行きの乗合馬車あり其の賃金は八王子吉野
間と同額にして里程は五里弱なり、既にして甲斐の國に入れば道路は
修繕行届きて神奈川縣下に於けるもの、如く峻悪ならず上野原、野田
尻、鳥澤等を経て猿橋驛に達する迄の間は左に桂川の急流を臨み風景
稍や快潤、馬車は吉野の對岸より三時間にして猿橋に達す、驛には奇
工を以て有名なる猿橋あり故に其の橋名を取りて直ちに驛名といなせ
しなり驛中旅店の上等なるものを大黒屋儀甫、久保田屋健一郎、小松屋

要嶽の三軒とす、猿橋を渡して行くと四里餘にして笹子峠の東麓黒野田に達す(乗合馬車賃二十八錢)同所より笹子峠を登るに駕籠馬車なるものあり一輛三客を載せて峻険を攀づ其様甚だ危きに似たるも駕籠に比すれば廉にして且速かなり(駕籠馬車賃上り二十五錢下り十五錢)峠を降りたる處を駒飼村と云ひ茲より右折すれば行くと二里にして勝頼の古戰場天目山に達す、駒飼より甲府まで里程五里餘此間又た乗合馬車の往復あり其の途中勝沼驛以西は道平坦一輛輕く馬車を走らすれば二時間にして甲府に着し得るなり

御嶽山は甲府を距る北三里二十町、地は甲州西山梨郡宮本村に屬し山中に金櫻神社あり郷社にして大貴己少彦名の命を祭ると猶ほ武州の御嶽神社のごとし、甲府よりは新舊二道あるが中に新道は始終荒川の東岸に沿ひ峯を越ゆる谷を渡るなど頗る峻険を極むと雖も其の景色の奇なる宛も一幅の畫圖を観るが如く徒歩少しも飽くとを知らず、行くと二里にして右

に鞍掛岩を望み又十數町にして石門に到る巨岩山腹より斗出して自然の洞門を爲し人は其岩下を潛り行くものなり、昇仙橋は今や大に破損して將に顛せんとするもの、如く此橋を渡れば右に仙娥瀧を望む瀧は直下二丈餘、幅五尺、夏日は此瀧に打たれて涼を取る者多し茲より二町にして又一の洞門あり高さ三丈幅一丈餘の一枚岩を穿ちて一の隧道を作りしものなり是より字猪狩の里に出で七八町にして御嶽(宮本村)に着す、金櫻神社は其の北端石階を登り詰めたる處に在りて樓門あり、拜殿あり、神樂殿あり皆金銀を鏤め丹朱を塗りて裝飾頗る美麗なり、村内人家五十戸ばかり此地は去る明治十八年小學校より火を失して全村悉く烏有に歸したりとて今は假建の家多し、旅亭は松田屋、大黒屋の二軒にして外に名物の蕎麥を饗ぐ家、水晶細工を業とする家あり金櫻神社の例祭は毎歲舊曆三月十一日より十五日迄五日間に執行し是日は近郷近在より參詣する者引きも切らず露店は數十町の間立ち並びて頗る賑し、と云ふ、御嶽より

水晶山まで里程四里道峻しくして登り易からず又甲府より御嶽までの間と雖も人力車を通せず駕籠賃は一挺七十五錢、案内者の賃金二十錢、松田屋大黒屋の宿料は一泊二十錢内外なり

●差出の磯

甲府より東北三里十二町、東山梨郡八幡村に差出の磯といふ處あり地は笛吹川の左岸に位し後に丘陵を環らし前に清流を擁し土地幽邃にして亦一個の好避暑地なり川に架する橋梁を龜甲橋と云ふ長さ六十間許り西洋風の建築にして橋柱の下に石を積みて基礎とす其形も龜甲に似たるを以て此名あり橋の兩岸に櫻樹多く夏は螢を以て名物とす左岸には有名なる割烹店甲背樓あり就て一酌するに宜し、磯の北數町字北八幡組には大井俣神社あり又龜甲橋を渡りて東すれば數町にして日下部に到る日下部は秩父街道の一驛にして人家稠密、郵便電信局あり警察署あり旅店の如きも亦四五軒にして足らず、甲州より差出の磯まで乗合馬車賃十錢、人力

車賃二十五錢春夏の候甲府より此地に來り遊ぶ者頗る多しと云ふ

●身延山（久遠寺）

甲府より身延山に到らんとするには馬車又は人力車にて鰍澤に出で同所より舟にて富士川を下り身延村字波木井の岸より上陸するを善しとす茲には甲府より身延までの道順を記さん甲府より鰍澤まで里程四里十六町毎日乗合馬車の往復あり（馬車賃二十錢）其の順路は甲府より押原、花輪を経て釜無川を渡り南湖、青柳を過ぎて鰍澤に達す、鰍澤旅店は上田屋高造、萬屋徳平、粉屋丑造等を以て最とす諸富士川を下る川舟に二種あり一を時間舟と云ひ一を並舟と云ふ時間舟は午前四時より五時迄の間に鰍澤を發し同十一時まで岩淵停車場に着し途中飛乗を許さざるものにして賃金は一人前三十五錢、並舟は午前十時まで鰍澤を發して日一ぱいに岩淵へ着し其の途中にて客の上り下りを許すものにして一人前賃金三十二錢五厘（波木井まで八錢）なり舟は厚き板を

以て造り其底の岩などに觸る、毎にウ子くどたはむ様になし急流につれて奔下るものなれども船頭は舳に立ち棹を以て岩を除け岸を支へ衝突等の危険を避くると甚だ巧みなり、波木井の岸より上り行くと十五六町にして身延の總門に達す即ち身延町人家の入口なり。

身延山久遠寺は日蓮宗總本山にして甲斐國南巨摩郡身延山の麓にあり文永十一年甲戌南部實長僧日蓮を招請して草庵を西谷に營みて之に居らしむ後ち弘安四年創めて一の堂宇を造り之を久遠寺と號す文明六年僧日朝今の地に造營すと云ふ此寺は先年町家より出火せし爲め二王門、祖師堂、眞骨堂等に至るまで悉く燒失せしが信徒等淨財を抛ちて之が再建を謀り今や新築全く成りて頗る壯嚴華麗を極む先づ身延山總門を入れれば左の方數段の石階を登りたる處に粟島祖師堂あり、行くこと半町太平橋を渡れば左右に商家軒を並らべ之れを身延下町、中町、上町と云ふ上町の盡處に山門の跡あり茲より男阪二百八十三階の嶮しき石段を登れば右に鐘樓を

望み正面に祖師堂を望む、堂は幅十間奥行二十間ばかり承塵、欄間等の彫刻には悉く鍍金を施し廻廊勾欄等は皆な朱塗にして其内部の如きは更に一層の美を盡し金色燦然人の眼を射る、祖師堂の右に眞骨堂あり八角形の藏造りにして其前に拜殿あり其他奥殿、水明樓、大庫裡、位牌堂等は皆其の寺域内にあり茲より登り五十町にして奥の院あり又四里廿六町にして七面山に達す山は海面を抽くと四千六百二十尺にして此處にも亦奥ノ院及び七面大明神等あり去れど其道は頗る峻阻にして婦女子等は容易に登し得ず偕身延の旅店中稍や上等なるものは升屋重利、田中屋勘造、玉屋久之助、梅屋半作、山田屋龜之丞等にして孰れも祝融の災ひに罹りたる後ち新築未だ全からず壁なども多くは荒壁の處多しと雖も其客室は皆手廣にして一家數十室を備へ其結構山間の旅舎には似合しからず個は何々講など云へる多人數の信徒一時に來り泊するとあるが爲めなるべし、宿泊料は一泊廿五錢晝食十錢を定めとすれども多人數の時には多少の割引

を爲すを例とす、身延より東京に歸らんとするには同所より凡そ二十町富士川の岸大野といふ所に出で、猷澤より下りの並船を待受けて飛乗を爲すを善しとす(乗合船賃十八錢)又七八人連の時は別に一艘の舟を仕立てるとも其賃金は一人割三十錢の上に出でず舟は六時間以内にして岩淵停車場内の掘割に達し陸に上れば停車場前に二三の旅亭あり岩淵より汽車にて東京に歸るに五時三十分間にして新橋に着し其賃金は下等壹圓〇壹錢なり最初甲武鐵道に據りて東京を發し八王子、猿橋、甲府等を経て猷澤に到り富士川を下りて岩淵に達し同所より汽車にて歸京すれば日數凡そ四五日を費し其の旅費も儉約すれば十圓の上に出ざるべし

● 稻毛海水浴

已に東海道(東京より西の方)各地の案内を了たれば茲には其方角を南に轉じ房總地方二三の避暑地を掲ぐべし但し之を東海道の部に加へし所以

のものは安房、上總の二ヶ國も亦東海道十五國の内なればなり、東京より本所、堅川、逆井、市川、船橋、馬加、檢見川等を経て千葉縣千葉町に到る途中千葉より一里ばかり手前(東京より八里餘)街道の傍ら字稻毛といふ處に海氣療養館といふ海水浴場あり兩國廣小路より毎日數回往復する千葉通ひの乗合馬車に乗れば凡そ三時半にして同所に達し、其の馬車賃は三十六錢、人力車賃は八九十錢なり、海氣館は稻毛大山の緑樹枝を交へたる處に客室數棟を設け温浴あり清泉あり土地は海面より高きと四五十尺、前に一條の國道を挟みて海を控へ其の濱邊には磯馴松幾百本となく生茂り稍や小舞子の趣きあり館内の客室は皆眺望宜しけれども海邊に出れば更に其の景色を新たにし油ヶ浦遠近の風物を一眸の中に收むるのみならず西に芙蓉の峯を仰ぎ南に鹿野山、鋸山を望み朝霞暮烟は雲霞と相映し空氣清く潮風涼しく未だ浴を取らざるに既に心身の爽かなるを覺ゆ海氣館一週間の賄ひ料は上等四圓、中等三圓二十錢、下等二圓五十錢、洋食賄

ひ料は一日六十錢以上壹圓五十錢以下にして別に席料を取らず又稻毛より成田に七里、佐倉へ四里、鹿野山へ八里なり

● 成 田 山 (新勝寺)

新勝寺は世俗成田不動と稱し下總國下埴生郡成田村に在り東京よりは前記の本所、逆井、市川等を経て船橋に至り同驛にて千葉街道より岐れ左折して成田街道に入り大和田(萱田)井野、上坐、臼井等の村驛を過ぎて佐倉町に入り猶ほ本佐倉、酒々井、中川、伊篠等を経て成田村に達す此里程東京より十五里十町、兩國より成田通ひの乗合馬車ありて日々二回づゝ發車し其の賃金は一里間四錢五厘の割合なり、途中の佐倉町は千葉氏の舊城市にして商家軒を並べ交通また頻繁町内に佐倉の城址、宗吾神社等あり○既にして成田村に入れば兩側には成田講其他何々講と云へる看板を掲げし旅店櫺比し奉納手拭は風に翻がへりて客を招くを見るべく行て新勝寺前に至れば正面石段の上に巍々として寺門の時だつあり是れ

を仁王門と云ふ成田山三字の額は前の東大寺別當道恕上人の筆にして左下に那羅延金剛、密迹金剛を安す、仁王門石階の下より左すれば茲に新勝寺の本坊あり殿堂壯嚴にして其の後園の如きは殊に美觀なり、仁王門を過ぎて又石階を躋れば兩側に奉納の石燈籠立ち連なり階を登り詰めたる處に不動尊本堂あり結構美を盡し燈光は金器銀財に映じて燦然人の眼を射る、其右に三重の塔及び鐘樓あり茲より再び階段を登りたる處に奥ノ院光明堂ありて金剛胎藏の銅像を勸請す、寺記に曰く抑々成田山明王院神護新勝寺は新義真言宗京師上嵯峨大覺寺御門跡未なり開山を寛朝大僧正といふ本尊大聖不動尊は弘法大師の開眼にして高雄神護寺なる護摩堂の靈像なりしを朱雀天皇の御宇天慶年間廣澤遍照寺の寛朝僧正 詔りを承はりて叛賊平の將門を調伏のをり其の靈驗あらたなるを以て僧正下總まで供奉したまひて修法せしに幾程もなく將門は貞盛、秀郷の爲めに誅せられぬ是れ偏に明王の威徳なりとて猶ほ東國鎮護の爲めに尊像を長く

此地に留められたり爾後靈驗日々に新たにして道俗群集すると市の如し爰に天文年間小弓大嚴寺の開山道尊上人法器の不満を歎き尊像に祈請すると殆ど一日満願の夜不動明王の利劍を呑み血流れて淋漓たりと夢む醒て後も智識大に進み道德益々顯はれ世に名譽の高僧となれり今猶ほ其法衣大嚴寺に存し當山開扉のをり拜せしむるものは是なり其寺境は松杉鬱茂して青苔道滑かなり護摩の烟絶ゆるとなく鈴鐸の鏘々として國家の昇平を祈るに信心膽に銘し渴仰胸に溢る堂宇の結構、伽藍の壯嚴實に無比の大道場なり毎月廿八日は參詣の縑素肩を摩し袖を聯ねて寶前に絡繹たるが中にも一五九(新曆)三月の繁昌は喜捨の淨財堆を爲し樂施の清泉漲るが若し銅瓦雲に聳え金鈴風に吟じ其の全盛なると普く世の知る所にして筆紙に盡し難し他邦の人一たび此の靈區に詣でなば其の溢美に非ざるを知るべし云々、又寺寶多きが中に天國の寶劍は當寺第一の靈寶にして平の將門調伏のをり朱雀天皇より賜ふ所と云ふ、東京より乗合馬車

に乗りて午前六時兩國を發すれば正午には成田に着す若し人力車を雇ふとも一里の割合八錢の上に出でず但し人力車ならば船橋、佐倉等にて繼換ふるを善しとす

●北條海水浴

安房の北條と館山とは町續きにして共に鏡浦灣を擁し灣内波靜かにして潮水清く婦人等には頗る適當の海水浴場なり旅亭は皆座敷の清潔と宿料の低廉とを競ふが中にも北條濱通りの木村屋は海水浴客の便利を謀りて別亭を濱邊に新築し其の結構善盡せりと迄には至らねども亦紳士貴婦人の來り泊するに適せり茲より田圃道十餘町を過ぎて市街に入れば吉野庵其他の宿屋數軒ありて旅籠は一日上等三十五錢、中廿五錢、並二十錢位なり、北條町には郡立北條病院及び醫學士の開業せる者も尠からねば浴客は先づ醫師の診斷を経て適宜の水浴を取るを善しとす又濱邊に出れば近く夫婦島の樹木葱鬱なるを望み遠くは横須賀浦賀に漁船の烟を吐いて來

往するを認め伊豆の諸山は茫乎として雲烟糲糊の間に出没するなど絶景云はん方なし借東京より此地に赴くには午前七時靈岸島船松町の川岸より出帆する房州通ひの小蒸氣船に乘らば途中保田灣、加知山、船形、那古等へ寄航し正午には館山に着し其賃金も一人前四十錢の上に出でず元來房州の海岸は到る處海水浴に適せざるは無く誠に海國の名に背かざるものなり今筆の序に房州海岸各所の模様を記せば保田には有名なる日本寺境内に公園地あり同所十州一覽臺に登れば豆、相、甲、武の巒峯は眼下に集まり海濱は亦水浴を取るに宜しけれども惜いかな善美なる宿屋に乏し加知山には漁家軒を並べ兎角に不潔を免かれざれど流石は元と酒井侯の城下ほどありて旅店にも乏しからず年々來遊の浴客多し、那古は波山灣の北岸にあり觀音の境内に上れば鏡浦を一目に下瞰し風景殊に佳なり旅人宿は山田屋を最とし以下數十戸あり、波山を距る三里長尾村根本に到れば養壽院と號する海水浴場あり夫より以東は處として海水浴場ならざる

るは無く年々諸學校の生徒等には來浴する者多く就中白濱村の丸屋、曠村の干倉の温泉の如きは最も妙なり夫より東海岸に出で鴨川町に至れば吉田屋、相摸屋あり天津屋には井筒屋、蓬萊屋あり天津町より一里半清澄山に登れば盛夏の候猶ほ冷を覺え眺望も亦快潤なり清澄山は上總の鹿野山と共に房總二山の一なるが昨年來其の道路を修築したれば今は頂上まで腕車を通じ二人曳にて天津より往復五十錢、山中に小梅屋山口屋の旅店あり

● 鹿野山

鹿野山は上總國周淮郡草牛村に在り此山に遊ばんとする人は午前八時靈岸島發の汽船に乗りて木更津沖に着し(汽船賃二十五錢)夫より解にて十五六町の遠淺を渡り其先は人力車にて濱地(水中)數町を行けば午前十一時頃までには木更津町に到着すべく解賃は三錢人力車賃は八錢なるを以て汽船賃を併せて其賃金は都合三十七八錢の上に出でず木更津には鳥飼

其他の旅亭三四戸あり就て晝食を了り寛々休足の上鹿野山に向ふも其の
 里程五里に近ければ徒歩するとも午後六時までは山上に着す若し人力
 車を僦へば其賃金は綱曳にて七八十錢鹿野山上の宿屋まで直着に往かる
 となり鹿野山の静閑幽雅なるは勿論山上よりは近く富津の砲臺遠くは觀
 音崎の砲臺を望み東京灣を隔て遙かに横須賀金澤と相對し夏島猿島等
 を雲烟縹渺の間に認め眺望絶佳、山上には有名なる旅館吻々館あり此館
 の宿料上等壹圓より下等四十錢までにして別に洋食の賄ひを爲す又山中
 に神野寺あり承和二年乙卯の創建僧源瑜の中興にして寺域は昔し六萬餘
 坪を有せし古刹なりしが一たび袁玄道者流の巢窟となりしより今は大に
 衰頽を來せり、夏日此地に暑を避る者多きが中に脚氣患者の轉地療養に
 は最も適當の地なりと云ふ

中仙道の部

茲に中仙道と稱するものは東京より日本鐵道の太宮を経て上州高崎に到
 り夫より信州を過ぎて濃州に到る迄の途中武藏、上野、信濃三ヶ國の浴道
 各納涼地を擧ぐるものにして之に越後の赤倉温泉を加へしは信濃より直
 江津鐵道線路の便あるが故なり先づ上野停車場より汽車に乗りて北行す
 れば一時間にして太宮に達す此驛には有名なる

●太宮公園

あり、公園は埼玉縣北足立郡太宮町東北の方にありて太宮停車場を距る
 僅々十二町先づ汽車にて上野を發し太宮に到り(此汽車賃下等二十錢)同
 停車場より人力に賃すれば六錢にして公園に達す園には武藏の總鎮守な
 る氷川神社(官幣大社)を祭り其の周圍には數百年を経たる杉松森々とし
 て林を爲し神社の前面には周回十餘町の古池ありてみたらしの池と呼ぶ

之に碇を架し又小舟を泛ぶ、公園内第十四區より亞兒里加質の鑛泉涌出するを以て旅店萬松樓は此鑛泉を引きて館内浴室の設けあり魚肉類は日々東京より運送し來り和食洋食とも客の好みに任す若し浴客徒然の折には池に臨みて太公望を學ぶを得べく馬を借りて運動を試むるを得べし、園内割烹店(旅店兼業)の名あるものは萬松樓、合翠樓、藤ノ戸樓、松友館等にして孰れも池畔に其樓を構へ公園一面を眼下に瞰るを得るが中にも萬松樓は其名の如く松樹蒼蒼たる間にあり其の裏座敷は田圃に接したるを以て春は鳴蛙を聽き夏は飛螢を觀るに宜し今ま萬松樓定め宿泊料を記せば上等賄ひ一週間四圓十錢、中等三圓廿五錢、下等二圓五十錢座敷料は席の大小陋美に依りて差異あれども概ね一週間六十八錢より壹圓六十八錢までを限りとし旅籠は一夜一等四十八錢、二等三十八錢、三等二十八錢なりと云ふ又例に依り近傍一顧の價ある名所等を記せば

八本松 是氷川神社南大門八丁目を三丁程東に入りたる處にありて昔し

日本武尊東征の時御陣を据ゑさせられたる舊地なりと言傳ふ○潮田山は文明年中上杉定政の老臣太田資清の次男潮田出羽守資忠が茲に新城を築きたる舊跡にして大宮壽能の城と云ふ後ち天正十八年豊臣秀吉の爲めに落城す○九郎塚稻荷 是足立藤九郎盛長が出生の地にして代々此地に住めり後ち住居の地に塚を築き稻荷の籠を安置せり之を藤九郎塚と云ふ後年畧して九郎塚と呼び今は誤つて黒塚と書するに至れり、其他鬼塚、蛇松等見るべき處多し

● 荒川 鮎魚

熊谷の市街を距る六七町なる荒川は隅田川の上流にして白沙清流頗る開轄の地なり鮎は此川の名産にして毎年六月中旬より漁獵を許す、鮎魚の相場は鵜一羽人足三人附にて一圓廿五錢、船一艘(凡ろ十人乗)船頭二人附にて一圓其他は料理代等にして若し一組七八人にて出掛ければ其の費用多きを要せずして一日の快遊を盡し得べし又此川は平日本極めて少な

ければ老幼婦女を伴ふも危険の虞なく所に依りては淺瀬を歩して渡るな
 と時に取りての一興なるべし、熊谷停車場前には清水屋其他二三の茶亭
 ありて鮎狩の案内を爲し驛内には清水屋本店、小林屋等の旅亭あり、熊
 谷驛は中仙道屈指の市驛にして人家稠密、商業頗る繁昌を極め驛内に蓮
 生山熊谷寺あり熊谷直實出家の後ち蓮生坊と號し此寺を開基す本堂は安
 政元年に焼失せしも其後再築して今は郡役所となれり驛の北側には高木
 神社、南側の裏には石上寺等あり其堤を熊谷堤といふ、上野より熊谷まで
 汽車賃下等四十六錢なり

● 鬼石奇景

大宮より上州前橋に至る間は別段好避暑地として讀者に紹介すべき名區
 に乏し強て之を覓むれば鬼石の奇景なるべし、日本鐵道會社中仙道線な
 る新町驛の手前に線路を横ざる河流ありて之を神流川と云ふ此川は水源
 を三國山の麓に發し東流して武藏と上野との州界を爲し新町驛の東にて

鳥川と合して利根川に入る平日は水涸れて河底礫となり居れども雨一た
 び至れば水勢滔々奔湍岩に激して急流となる其の上流鬼石、三塲の近傍
 は兩岸に怪石起伏して奇景言はん方なく上毛地方の文人墨客には其奇を
 探らん爲め夏季節を曳く者多し其石は皆一種の木理紋ありて庭石に用ふ
 るに最も妙なりと云ふ、此地に到らんとするには新町停車場(上野より新
 町停車場まで下等瀛車賃六十八錢)にて瀛車を下り西南五里餘の道に歩
 めば鬼石村に達す(新町より鬼石までの人力車賃四十錢)其途中淨法寺村
 に八鹽温泉及び淨法寺温泉あり泉質は鹽類泉にして其の成分効能共に磯
 部温泉と同一なれども地僻なるが爲めに其の名世に顯はれず、鬼石、淨法
 寺兩村ともに二三の旅亭あれども魚類肉類に乏しければ旅客は豫じめ鐘
 詰、西洋酒の類を携へ行くと肝要なるべし

● 伊香保温泉

已にして上州高崎又は前橋停車場に着すれば此兩地より赴くべき温泉頗

る多し、先づ上州にて名高き温泉はと問へば誰しも第一に指を伊香保、磯部に折るが中にも伊香保は昔しより名高く磯部は近年に開け地勢家並等も亦自から異なり伊香保温泉は群馬縣下上野國西群馬郡伊香保町に在りて高崎停車場を距る七里十五町前橋停車場を距る五里廿九町、東京よりは實に三十五里餘を隔て、方位は西北に當れり其の道順は高崎より宇小鳥、井出、中里、柏木、峯林、水澤等を経て澁川に出るも善ければ鐵道馬車の便利あれば東京より行く人も前橋にて下車する方宜しからん前橋停車場を出で北の方へ歩むと二三町澁川道の町盡處字細ヶ澤に至れば茲に鐵道馬車の停車場あり下等乗合馬車は一時間毎に發し澁川迄一人前十二錢(下等借切一圓五十錢、中等は二圓五十錢)其の途中半田の先にて馬車を下り利根川の舟橋を徒歩にて渡り向の岸にて再び馬車に乘移り一時三十分間にして澁川に達す澁川の鐵道馬車停車場前に茶店(福田松五郎)ありて茲にて伊香保行の人力車切符を賣捌く伊香保まで二人曳七十二錢

の定めなれども雨後道惡しき時は一割乃至二割を増すを常とす澁川より向ふは都て登り阪にて凡そ一里程も行きたる道の左の方に御影の松といふ古松あり明治十二年 皇太后陛下温泉へ行啓ありし時此處に御野立ちりしとて村民後に萬里小路博房卿の歌と前群馬縣令揖取素彦氏の題辭とを請ひ碑に彫りて樹の傍らに建つ卿の詠は

芝中の松の宿りに千代かけて残るは君か御影なりけり

夫より猶ほ阪道を登り澁川より凡そ一時三十分間にして伊香保に達す今ま伊香保の地名に就て伊香保誌の説く所を記せば此地の名は萬葉集の上野歌に出たるを最も舊しとし其外續日本後記、三代實錄延喜式にも出で文字も亦伊加保、伊可抱、伊賀保など種々に記せり且ろの指せる地も今は僅に温泉ある一村の名とすれども昔は此國の中央なる群馬郡の西北に連れる今の榛名山、相馬ヶ嶽、船尾山、水澤山など呼べる一帯の山々周圍二十餘里の麓をかけて大方は伊加保嶺と言ひしと論なし升は萬葉集に伊

加保嶺の雷又は雪といひ此の大山より吹起る風なれば伊加保風といひ或は伊可保の雨雲または虹なると云ひ集中に其歌いと多くあるにても知らるいかで今の狭き地名につきて斯くは言ふべけんや又今の榛名の山中にある沼は則ち萬葉集以下中古の歌集に多く伊加保の沼と詠みしものなるをも思ふべし且或人の説に伊加保といへる名義も此の大山殊に國の直中に聳て厳く大きく秀でたるより嚴秀の意にて然か名けしものなるべく彼の高千穂なと山を保といふも皆秀づるの意より出たるものなればなり云々此説當れり諸伊香保の地は元と嶮しき山の中腹を拓きしものなれば南に山を負ひ西は谷に臨み東北に向ひて田野を見晴し家は皆崖を築き石垣を疊みたる上に建て設けたればこの屋根は甲の床と並びて一段は一段より高く其狀楷梯を立て掛けたるが如し温泉宿の名高きものは木暮金太夫(把翠樓)木暮武太夫(聚遠館)村松秀茂(香山樓)千明はる(仁泉亭)島田多朔(岫雲樓)永井喜八郎(掃雲樓)島田忠藏(積流館)岸權三郎(浴蘭堂)

大島甚左衛門の九軒にて之を大家と云ふ(大家中木暮八郎といふ旅館ありしが今春より休業せり)昔しは大家十二軒ありて家々にては十二支を形取り子より亥までを其家の符牒の如く用ひ來りしが今は其の三軒を失ひ猶ほ存在し居る家にて其代の變りたるもありと又此外に温泉宿澤山あり其の名を一ト纏めに記せば

福田善十郎 福田與重、森田喜三郎、齋藤仙助、茂木忠藏、一倉半平、横手信太郎、寺島金四郎、中澤歌吉、金田辰藏、森田恵十郎、羽鳥善吉、木村貞次郎、萩原久吉、岸要吉、萩原重朔、多湖小太郎、町田市太郎、金井市太郎、塚越七平、宮下彦太郎、大塚政五郎、萩原傳七、原澤善、近江屋佐吉

等なり、其中にて木暮金太夫、同武太夫、村松秀茂等にては別に日本の土藏めきたる西洋室を備へ洋食をも料理し且一人入り特別浴室等の設けもあれば外國人の宿泊に差支なく其の一日宿料は凡そ二圓五十錢より三圓五十錢迄の間に在り、伊香保の温泉宿も亦他の温泉場と同じく座敷の善惡、蒲團の絹と木綿の違ひ等にて宿料にも區別あり今ま木暮金太夫方の定め

を聞くに座敷料、蒲團損料、賄料、入浴料等を混じ一人一週間の宿料は一
 等七圓、二等五圓、三等三圓五十錢、四等二圓五十錢、五等一圓五十錢の等
 級あれども客の方にてても一番氣安く宿屋に取りても世話のなき一法は既
 に熱海の部にも記せし、如く先づ其の温泉宿に至れば自分が望みの座敷
 を見立て、座敷料を何程と定め置き日々の食物は己の好む品々を時々注
 文するにあり然すれば宿賄ひにて己れの好まぬ下物を出され據ころなく
 別に一二品を誂へ無益なる散財を重ねるよりは却て經濟に當る事もあり
 て萬事都合宜しからん又日本人に癖として斯る保養の遊び場所に至れば
 其席料などを聞くを耻のやうに思ひ數日間逗留の後ちイザ勘定といふ時
 に及んで意外に金高の上りしに驚く事もあれど最初より席料は何程、蒲
 團損料は何程と云ふ事を問合せ置かば此悔は無き譯なり、編者は温泉最
 負にはあらねど夏一季の儲けにて残り三季の暮しを立て魚類、肉類、菜蔬
 の類まで馬の脊人の肩を假りて取寄せる温泉場に在りては多少物價の高

きと當然の事なれば先づ其の宿屋に至らば豫じめ席料蒲團賃等を問合せ
 置き而して後ち奢るべきは奢り儉約すべきは儉約し唯だ其分に應じたる
 遊びを爲すと暑を避け病を養ふの本意とも云ふべき乎偕此地の温泉は市
 街より南の方凡ろ八町の溪間より湧出し湯元にありては温度華氏の百二
 三十度なれども樋にて各温泉宿の浴室に導くを以て其の途中にて温度冷
 め内湯にては百十度内外即ち適宜の入り加減となれり大抵の温泉宿には
 浴室四五箇所もありて孰れも竹の樋より瀧の如く浴槽に落ち其餘りは溢
 れて市中の溝に出で集まりて一つの流れを爲し其下は水車にかゝると都
 て六箇所若し長明に筆を探らせなば温泉の流れは絶えずして而も元の湯
 にあらずなど書くべきものにて晝夜溢れて淀まざれば其の新しくして清
 潔なるは云ふ迄もなく色は少しく赤土色に濁れども臭氣なく泉質は純粹
 なる炭酸泉にして胃弱、癩麻質私、白下下、月經不順、貧血症、皮膚病、神經
 痛等の病症に効驗あり其の泉質分拆表は即ち左の如し

伊香保温泉一リートル中成分

硫酸曹達	〇、六七七五	硫酸石灰	〇、一一二〇
硫酸加里	痕 跡	重碳酸石灰	〇、一九八〇
硫酸マグネシヤ	痕 跡	重碳酸マグネシヤ	〇、一一九〇
鹽化那篤留母	〇、三一五八	重碳酸亞酸化鐵	〇、〇〇七一
鹽化加留母	痕 跡	硅 酸	〇、〇三五〇

却説前に言ひ殘したる伊香保市街の摸様を記せば市街は東西三町南北四町棟数は五百戸ばかりもあれど冬季霜雪の多き故にや瓦屋根は至て少なく有名なる温泉宿と雖も亦多くは柿葺の屋根を用ふ、南北の中央にある一條の阪道を伸通りと稱へ此外左右に裏町ありて上の方を上町といひ下の方を下町といふ、下町の入口に紅葉館の支店と伊香保俱樂部等もあり郵便電信局は温泉宿島田多朔方に之を設け先年より常設の許可を得て信書は毎日三回の集配を爲す、上町の突當りにある石段を登れば茲に伊香保神社鎮座ましまし其の石段の麓より湯澤の左岸を経て湯澤及び榛名道

あり湯元へ至る山道の右の方には挽物細工其他の土産物を賣る家建ち連なり谷を隔て、向山の麓に岩崎の別荘を望み三伏煖くが如き熱き日も此處に至れば汗立どころに乾きまだ來ぬ秋の玆に隠れ居るかど疑ふ程なりとぞ近頃此地にも御料地を定められ伊香保道の入口十四五丁手前より其の榜示杭を認むべく市街に入れば各戸湯瀧の落る響き相集まり其音のみを聞けば雨の降り來りしかと思はれ蒸氣の立登るを見ては時ならぬ飯を炊ぐかと怪しまる、市街の中央に鑛泉取締所あり浴醫森本某氏常に同所に詰合ひ居りて何時にても浴客を診斷し又按摩物賣等の客室に入り來る杯は他の温泉場と變る事もなければ十時以後は此の物賣等を座敷へ通さざるは客に紛失物等のなきやうにどの宿屋の注意より出でしものなりとか又例に依り此地より近傍市街及び名所舊跡への里程及び人力車賃等を記載すれば凡ろ左の如し

澁川迄

二里七町

人力車賃一人挽

金卅五錢

前橋市迄	五里廿九町	同	同	金八十錢
高崎町迄	七里十五町	同	同	金九十錢
中之條迄	四里八町	同	同	金七十五錢
澤渡温泉迄	七里餘	同	同	金一圓十錢
四萬温泉迄	九里十六町	同	同	金二圓四十錢
草津温泉迄	十三里餘	同	同	金二圓廿五錢
榛名山迄	二里十八町	駕籠賃	往復	金一圓八十錢
辨天龍迄	三十町	同	同	金一圓
船尾龍迄	一里十町	同	同	金一圓廿錢
二ツ嶽迄	二十五町	同	同	金八十錢

右の内一人挽にては上ると六ツかしき道もありて是非とも二人曳か駕輿かを雇はねばならぬ事もあらんが此時には其賃金凡そ一人曳の二倍と見積れば大差なかるべし又伊香保近傍往て一覽すべき名所少からず筆のついでに其の二三を掲ぐれば

物聞山 は伊香保市街の東南に聳むたる小山にして俗に金比羅山と云ふ漢鹽草、秋の寢覺等に物聞山は上野とあり和漢三才圖繪に物聞山は伊香保に在りと見ゆ又上野志、名跡考等には伊香保の東南松樹蒼蒼たる山なりとあり依りて金比羅山の本名なりとす此山の中腹に登れば伊香保全市街を眼下に見えろし眺望絶佳、所謂伊香保八景の一にして夫木集に「伊香保なる物聞山の郭公にこらぬことに聞ゆなるかな」と伊勢の詠出でしは即ち此山の事なり

船尾山 は伊香保より高崎に至る街道の西の方にあり昔し此山に傳教大師の開基せし巨刹ありしとて今猶ほ山の南腹に其の遺跡あり又山の東北に船尾の瀧あり絶壁より落つると直下二十丈、幅二間ばかり水烟四散して近づく可からず此瀧は瀧川邊よりも遠望し得べくして其狀白布を懸けたるに似たり下流を瀧の澤と云ひ東に流れて利根川に入る、柏木より伊香保路は此瀧の澤を渡るなり其路ある處より瀧まで澤の奥凡そ二十町程

もあるべし

御影の松 は伊香保より澁川路を下ると一里許なる路の右側に在り此事は既に伊香保道順の内に記したれば畧す

箕輪の城趾 は船尾山の南、東明屋村にあり又箕輪とも書けり城は大永年中長野伊豫守信業の築く所にして其子業政之を守る弘治永祿の間武田信玄此城を攻むると五年を歴れども業政能く防ぎて之を卻く永祿四年業政歿して右京太夫業盛尋で之を守る時に武田勢大舉して之を攻め終に此城を陥る後ち武田氏より瀧川氏、北條氏に屬し天正十八年に至り徳川氏井伊直政を此の城主となし後ち直政高崎に移りて此城を毀てり今猶ほ其の堀櫓、外郭等の跡ありと云ふ

ガヲメキ温泉 は相馬ヶ嶽東南の麓、西明屋村にあり泉質未だ詳らかならず諸瘡、火傷等によしと云へり温氣甚だ薄きが故に火にて沸し用ふ、ガヲメキは伊香保温泉より凡そ三里半、高崎に到る途の中程にあり

二ツ嶽蒸風呂 は伊香保の南二十四五町の處に在り山麓の砂地より蒸氣を噴出し其の熱度は百十度より三十度に至る、茲に屋根を覆ひ四方を密閉して體を蒸す其質は詳かならざれども硫黄の氣甚だしく閉づると稍久しければ動すれば絶息するとあり依て近年は屋根の上に氣孔を穿ち又別に家を造り頭部を其上に出し身體のみ蒸す者あり今其傍らに二三の浴舎あり伊香保の浴客一日の運動として茲に來る者多し(榛名湖其他の事は榛名山の部に記す)

産物 伊香保物産の第一とする所は即ち温泉にして一村實に之に依りて生計を營めり製造の産物は甚だ少きが中に湯花染といへるは木綿を湯滓にて染む其色赭黄となる之を腹腰に纏ひて効能ありと云へり又鏡の拭粉を製す砥の粉と天花粉とにて製し別に奉書紙を温泉に浸し乾して揉みたるものにて拭ふなり能く銅鏡の光りを生ぜしむと云ふ其外近き山の雜木にて挽物細工、盆類を製して商ひ湯元道には此品を鬻ぐ勸工場あり又湯

晒艾あり冬は氷蕎麥、氷豆腐等を製す

● 澤 渡 温 泉

澤渡温泉は前橋停車場を距る西北十一里廿五町上野國吾妻郡上澤渡村に在り前橋より澁川までは前記の鐵道馬車に據り澁川より途中中之條まで五里半の道に乗合馬車の往復する事もあれと發着の時刻甚だ不規則にて乗合少なき時は發車を見合す等の事もあれば最初より人力車を雇ふ方宜しからん其賃金は澁川より澤渡まで八十五錢より壹圓迄(中之條まで六十錢)道順は金井を経て南牧に至り北牧との間に吾妻川を渡り夫より小野子、村山、市城等を過ぎて中之條に到るの間山道は概ね吾妻川の北岸に沿ひ且始終上り坂なれば峻岨なる處は時々車より下りて歩行せざるを得ず中之條より原村に到る途の中程より北に折れて行くと二里弱にして澤渡に達す去れど伊香保より此地に赴かんとするには湯中子を経て加々摩利山の北峯を越へ五町田を経て澤渡道に出るを近道とす(但し人力

車を通せず)澤渡の地たる三方皆山を以て圍まれ東南の方少しく開けて近く四萬川に接す素より山間の一村落に過ぎずして左のみ見晴しよき土地にはあらねど海面より高きと凡そ二千二百尺の上にあるを以て山氣肌を襲ひ暑中と雖も寒暖計は八十度以上に昇らず夜に至れば六十度以下に降るとあり泉質は硫黄泉にして専ら病後の衰弱を治し胃病、腺病、皮膚病、蠱毒等に効驗ありと云ふ温泉宿は福田みき、福田六右衛門、福田喜八郎、關總吉、關口十郎の五軒にて此外二三軒の小料理屋もあり宿料は通常一日二十錢より三十錢まで、席料、賄料、入浴料等を合せて一週間の費用は一圓五十錢より二三圓位迄にて諸物價は僻地の割合には貴からねど牛肉牛乳等は得ると難しと云ふ

● 四 萬 温 泉

同郡四萬村にあり中之條までは澤渡と同じ道を取り澤渡道の中途より岐れて四万村に入る前橋より里程十三里十二町、中之條よりは四里七町、村

の入口に山口温泉といへるあり個は近郷近在の者農業の暇來りて浴する所にして戸數十四五軒ばかりもありしが先年火災に罹り温泉宿田村平八外商店四五軒を殘して其餘は悉とく灰燼と化し去りしと云ふ、茲より溪流に架けたる小橋を渡れば即ち四萬温泉場に達す土地の人は此湯を新湯と稱へて山口温泉と區別せり戸數は二十戸ばかり中に就て温泉宿田村茂三郎(小倉屋)關善平の二軒最も手廣にして客間各々百室以上を備へ孰れも内湯の設けあり今ま鑛泉の成分を聞くに明治八年獨逸醫學士マルチン氏の分析せし結果は左の如しと

四萬温泉一リートル中の成分

格魯兒那篤留謨(食鹽)	一、四五四〇	格魯兒加留謨	三、二六二〇
硫酸加爾斐謨	〇、二八三七	硫酸加爾斐謨	〇、二九四五
珪 酸	痕 跡	磷 酸	〇、〇六一九
第一格魯兒滿俺	同	硫酸苦土	痕 跡
有機物	同	觀魯母那篤留謨	同
固形物合計	二、三五六一瓦		

又其の効能は皮膚病、癩麻質斯、挫傷等より生ずる關節の痛み胃弱、貧血症等に宜く胸はり、胸痛み、食物不消化等には朝夕此の鑛泉を服用するも善しと云へり、四萬より溪流の岸に浴ひて昇り行くと數町の處に日向温泉あり戸數僅かに二戸あるのみなれど前に水晶山を望み近く大泉小泉の瀧を控へ土地頗る閑雅なれば四萬より散歩かたぐ此處に遊ぶ者多しとす、四萬温泉宿は中央に新湯川の流れを挟み關、田村の兩家とも優劣なきが中にも田村の本家稍や眺望に富めり同家宿料の定めを聞くに上等旅館料晝食とも一日金五十錢、中等同く三十五錢並は廿七錢より廿二錢まで、席料は八疊の座敷にて一週間特等二圓五十錢、一等一圓五十錢、二等一圓二十錢、三等八十錢、四等五等は合客を雜居させるものにて一日一人に付三錢五厘より二錢五厘まで、夜着蒲團は一夜六錢より一錢までの差あり又此地近傍の名所は小倉瀧、摩谷瀧、蠟石山、水晶山、大泉小泉の瀧等にして各地への里程人力車賃等は左の如し

中之條迄	四里七町	人力車賃	一人挽	金五十錢
原町迄	四里十六町	同	同	金六十錢
澤渡温泉迄	四里	同	同	金五十錢
草津温泉迄	九里十六町	同	同	金一圓廿五錢
澁川迄	九里廿町	同	同	金一圓廿錢
沼田迄	九里	同	同	金一圓
前橋迄	十三里十二町	同	同	金一圓四十錢
高崎迄	十四里廿三町	同	同	金一圓六十錢

右の内二人挽又は駕輿ならでは行かれぬ處もあれど茲には唯だ其標準を示す爲めに掲ぐるのみ又此地より草津に赴くには澤渡限り車を雇ひ夫より先は下り坂多ければ歩行か駕輿に乗る方便なるべし

● 川原湯温泉

前に掲げたる四萬温泉道の途中中之條より岐れて原村を過ぎ猶ほ行くと三里足らずにして岩島村に達し茲より一里行けば川原湯温泉場に到着す

べし中之條より岩島村まで一人曳人力車賃五十錢、岩島より先は道稍や峻しければ足弱の人か病人を除くの外は歩行を善とす若し駕輿を僦ふとも其の賃金は廿五錢の上に出ざるべし温泉の性質は硫黄泉にして少しく臭氣あれど皮膚病、腫物等に頗る効能ありとて態々此地に赴く者も少からず湯口は大湯、瀧の湯、目の湯、百々湯、笹の湯等に分れ虎の湯は温泉元萩原慎太郎方の亭内に在り、此地の温泉宿は右の萩原を始めとして樋田宗七郎(升屋)、樋田又平(山本屋)、豊田道藏(柏屋)等の四軒、料理屋は柏屋、高田屋、林屋、中屋等の四軒孰れも正業を営むものにして彼の曖昧なる達摩屋にはあらず、萩原方の宿泊料は一日一人に付一等五十錢、二等四十錢、三等三十錢、四等廿五錢を定めとす但し他の三軒にては一日四十錢を上等とし下等に至つては二十錢位にて泊める事あるべし又た此地より澤渡へは二里草津へは四里なり

● 草津温泉